THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年 第七號

第二百三十二號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

空前の大著●空前の美本

小栗風葉氏
徳田秋聲氏
柳川春葉氏合著

小説 三人叢書

紙數大判八百頁
總洋布最上製
價壹圓五拾錢
小包料拾五錢

風葉・秋聲・春葉の三氏は現時文壇の誇りとすべき最も大なる作家也。三氏の傑作數十篇を輯めたる本叢書は小説界空前の偉觀を以て目すべき者ならむ。

發行所 東京神田駿河臺（電話本局三千四番） 東京國民書院

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候



內地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來るクツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側

電話本局　一七四三番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

春陽堂新刊

(東京日本橋通四丁目角)
(振替貯金口座一六一七)

泉鏡花氏著

婦系圖

▲鏑木清方氏 鰭崎英明氏合作(木版口繪三葉挿入)

任俠の雲は瀧に叫び
戀愛の波は螢に歌ふ

●後編(新刊)
●前編(既刊)
實價各八拾錢
郵税各八錢

小說 灰燼

上司小劍氏新作(久保田金仙氏裝 寫眞版三葉挿入)

世の老人が古い夢を見てゐる中に一代の青年は相率ゐて新しい酒に醉ふた、文壇に於ける近頃の新傾向は其一面を示すものである、この小說は理智と情意との衝突し混亂した

現代青年の活歷史である

實價五拾五錢
郵稅六錢

青々園氏著

若狹物語

●梶田半古氏畫 木版口繪挿入(實價五拾錢 郵稅六錢)

佳人若狹、忠孝二道の爲め苦節を全ふして後、自ら意中の人の銃彈を受けて死す、一編の波瀾はその黒船の舷を洗ふに似たり得意なる青々園氏の新講話は亦家庭の好讀物として大方に薦む

眞宗信徒生命保險株式會社

◉當會社の約欵に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
◉當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
◉當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
◉當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限內ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
◉當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
◉當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
◉當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角　(電話　七貳貳番)　京都本店
東京市京橋區南植町壹番地　(電話本局五壹八番)　東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角　(電話東壹貳五參番)　大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地　(電話　七貳六番)　長崎出張所
廣島市紙屋町(秦　忠兵衛方)　(電話　六〇八番)　廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

明治文壇未曾有の **大作漸く完成!!!**

小杉天外先生作

岡田三郎助先生挿畫　小林鐘吉先生挿畫
中澤光弘先生挿畫　鰭崎英明先生加裝

寫實小說 コブシ

前編五版　中編三版

後編新刊

（七月十日發賣）

前編一冊定價金壹圓
中編一冊定價金壹圓
後編一冊定價金壹圓
各壹冊小包料金拾貳錢
三冊合送小包料金廿四錢

形式 總洋布。美裝。舶來上等紙。紙數壹千百五十餘頁。挿畫コロタイプ九枚。銅版二十六枚。

內容 男女學生間に横溢する新興の意氣。婦人の節操を破るに到る徑路。大學敎授の家庭。外交官の生活。戀愛に囚はれたる三婦人三樣の態度。遺傳力に支配さるゝ血族間の氣質體質の異同。肉慾の衰へざる老婦人の煩悶。自殺者の絕息に到るまでの精神狀態。

由來 コブシは明治三十九年三月より四十一年一月に亘りて前後三年の間著者は他に一行の文も草せず全力を此一編に傾注したる一大勞作なり。而して後編を完成するに當りて改竄數ヶ月を費やし行文と脚色と殆ど面目を一新す。

發兌元　東京市日本橋區箔屋町十四番地　章光閣

特電話本局二〇八五番振替口座（竹澤章）五八九二番

中央公論第二十三年第七號目次

"THE VALLEY OF THE LLUGWY"



BY B. W. LEADER, R.A.



第二十三年
第七號
第二百卅二號

我が國家國民の使命

（一）

代議政治の發達は已に其頂點に達せり、而かも此の政治が理想的最良のものたらざるや明らけし、否、幾多の弊害の蔽ふ可らざるあり、其の普通選擧なると制限選擧なるとを問はず、共に救ふ可らざる弊害あること其の一也、多數決議の必らずしも最良ならず、多くの場合に於て愚かなる傾向に趨るの免がる可らざる其の二也、多數決なるが故に、多數を制するがため、諸種の請賄、脅迫の行はるゝ其の三也、此等の諸弊は、或る程度まで之を匡救し得るも、而かも絶對に之を禁ずる能はず、随つて代議政治の理想的最良のものに非ざること言を俟たず、但だ今日に在ては、比較上是れ以上の政體と政治とを發見し得ざるを以て、餘儀なく之に滿足するのみ。

現に英米の學者中、代議政治の發達已に頂點に達し、是れ以上に改良するを得ずとして絶望の聲を放てるもあり。

思ふに我が代議政治は、英米の其れに比して尙ほ發達の餘地あるべし、我が代議政治の英米に比して幼稚なる言を俟たざれば也、然れども其の發達の頂點に至るも、竟に英米以上に至り得ざるや勿論なるべし、果して然らば我が代議政治の發達また知るべきのみ、所謂憲政有終の美を濟すといふを以て、政治上の最大目的と爲すが如きは、無識に非ざれば則ち故らに自から欺むき世を欺むくのみ、少くも政事家として主力を茲に致すの愚なる論莫きのみ。

（二）

政黨内閣を組織するを以て、殆んど政治上の唯一の目的らしく思ひ做すものあり、是れ亦聊か時代遲れの見也

最善なる内閣は、最も賢智にして又最も有力なるもの也、適材を適處に置て、十二分に其の智勇辯力を揮はしむるに在り、正しき意味に於ける藩閥内閣の非なるが如く、唯だ多數を恃む政黨内閣も亦不可也、黨閥を以て藩閥に代るのみ、曾て適材を適處に置かず、善良なる政治の以て中外に信を得るに足らざるが如きは、是れ一の醜惡内閣に外ならざれば也、若し人材最も多く政界に集まり、而して適材を求むるの政黨に於てするを至便とせば、吾人と雖も政黨内閣に隨喜すべし、今の如く國民と政黨と沒交渉にして、殊に學識材幹の寧ろ政黨以外に多き以上、政黨内閣を唯一の理想とするが如きは、餘りに無意味な

らずや。

吾人を以て絕對に政黨內閣を非とする者と做すと勿れ、政黨は理に非ずして勢ひ也、旣に代議政治を行ふ以上政黨の存在を認めざるを得ず、政黨の存在を認むる以上、政黨內閣の立つ亦當然のみ、是れ理にあらずして勢ひ也、然り事實也、吾人は唯だ政黨內閣を以て最善なる內閣と做すの理に於て非なるを主張し、政黨內閣を立つるを以て、政治上唯一の理想となす者の妄を闢かんとするのみ、政事家は寧ろ其の內閣に於て適材を適處に置くを理想とし、必らずしも政黨と藩閥とを問はざるの雅量なかる可らず、吾人は我が政治上の進步のため、殊に此の希望を玆に表白するの無要ならざるを信ず。

（三）

憲政有終の美を濟すといひ、政黨內閣を組織すと唱へ、之を以て日本政治上の最大理想と做すが如きは、餘りに迂遠也、殆んど白日に電燈を點ずるよりも愚か也。

然らば則ち政治家は何を以て理想と做すべき乎、曰く國家及び國民の正當なる使命を理會すべし、而して此の使命を理想として進むべきのみ。

更らに少しく具體的にいへば、內に在ては多數國民の利福のため、併せて國家社會の基礎を鞏固にするため、將さに生ぜんとする社會政策問題に最善なる解決を與へ、外に在ては國勢發展の方針を明確にして、國家一切の施設を此の方針に基きて定むべし、是れ國民をして由る所を知らしむる也、國民を率ゐ、國勢を指導する政事家素より然らざるを得ざる也。

社會政策問題が內政上重要の問題となるべきと今や滔々たる世界の大勢也。

獨逸の政治舞臺に於て、社會主義者たるベーベル氏の勢力が、隱然たる一敵國の如きを思へ、英國の自由黨內閣が竟に勞働黨の首領を迎へて內務大臣の一席を與へたりしを看よ、社會問題、少くも勞働問題が政治上の最大難題にして、而かも動もすれば國家社會の基礎に影響するの虞あるを思はゞ、誰か之を雲煙過眼に附す可けんや。

我が國未だ多く社會政策問題を生ずるに至らず、勞働者また謹直柔順の德に富みて、未だ多くの難題を提出するに及ばすと雖も、而かも漸く世界の大勢に漏るゝ能はざるは、現に諸處に於て同盟罷工の起るに視、工場法案が實際重要なる問題たるに徵して、略々之を察知するを得、思ふに將來此等社會政策問題が政事家を惱ますに至らんと必然也。

徒らに法制の末に走りて却つて社會問題を誘發する素より愚也、而かも社會問題の目前に湧出せざるに慣れて、之を常と做し、曾て考慮を之に費さざるは更らに愚也、天の未だ雨らざるに牖戶を綢繆する、豈智者のとならざらんや。

吾人は我が政事家が時代遲れの陋見に泥み、若くば眼前の問題のみに齷齪して、却つて重要なる社會政策問題を閑却するを惜む、國家社會の基礎を永遠に鞏固ならしめ、且つ多數國民の利福を損せざるがため、豫め我が歷史と人情の特點とに考へて、以て社會政策問題を正當に解釋するの準備を爲すと、眞

に生命ある政事家の任也。

少しく具體的にいへば、社會政策の主要なる問題は、素より資本と勞力との調和にあり、生活問題殊に食物を廉價に供給すべき問題を解決するにあり、多數國民の德性を養成すべき敎育宗敎の問題を解決するに在り、吾人は機を見て卑見を陳ぶるを期すると同時に、識慮ある政事家が潜かに思を玆に致さんとを望まざるを得ざる也。

（五）

我が日本民族は大に發展すべき將來を有す、隨つて國家も亦大に擴張すべき運命を有す、抑も三千年の奮歷史を所有して、其の文明の性質こそ異なれ、程度に於て寧ろ歐米の上に位するが故に、一度び彼の物質的文明を輸入するや、直ちに咀嚼し消化して善く其の用を爲さしめ、今や歐米人をして後に瞠若たらしむるものなきに非ず、日淸戰役及び日露戰役は其の顯著なる一例なりとす。

歐洲に在て陸軍の最も勇なるは素より露國を推さゞるを得ず、然るに日露戰役は日本軍の露國軍よりも精銳なるとを明示す、玆に於て日本兵の精銳世界に冠たると、論理上必然の判斷なりとせざる可からず。

然れども斯の如きもの何ぞ陸軍のみに限らんや、日本民族の如き歷史と文明とを有して、愛國心及び團結力、進步氣質に富めるものは、將來大に發展すべく、隨つて其の國家の大に擴張せらるべきや論なきのみ、所謂國民及び國家の使命なるもの乃ち玆に存す。

（六）

今や人口の増加と生産の過剰とは列國を通じて競ふて殖民地を拓き、利權の擴張に力めしむ、以て有餘る民族を移住せしめ、且つ通商貿易を進張せんと欲するのみ。

我が日本も亦同じ必要を感ずると切なり、唯だ其の發展すべき方向孰れぞや、所謂北守南進か、抑もまた北進南守か、是れ經世家の大に考慮すべき所にして、又政事家の最も力を致すべき要點なりとす。

韓國は既に我か保護に歸せり、而して南滿洲を其の利權範圍としたり、若し更に北進せんと欲せば、勢ひ再び露と衝突せざる可らず、今や露國は日本に對して復讐すると共に、日本の北進に當らんと欲し、外交上には力めて親和の態度を示すと共に、裏面に於て極力戰鬪準備に鋭意しつゝあり、現在の西伯利亞鐵道に滿足すると能はずして、更らに三億餘の巨資を投じて軍事專門の黑龍江鐵道を布設し、且つ五ヶ年を期して新たに二十五萬の土着兵を西伯利亞に設けんとするが如き、殊に其の準備の一たるや爭ふ可からず、列國も亦此の形勢を看取して少からず危惧せざる能はず、現に列國人が日露兩國の財政に信用を措かざるに至れるも、畢竟此が爲めならずや。

日本は素より之に應當するの準備を缺くべからず、苟くも露國に對して抗爭し得ざると明白とならば、是れ所謂兩國の均衡を喪ふ也、露國は必らず勇躍して打擊を加へ來る可し、露國をして容易に手を出すとを得ざらしめざらんと欲せば、我れ亦彼れに應當する實力あるとを暗示し置かざる可らず、斯くして彼我の均衡を保ちつゝ、開戰を避けざる可らず、所謂武裝の平和なるもの是れ也。

然れども斯の如きは彼我の不幸ならざるや否や、殊に日本の不利益ならざるや否や、我れ若し北守南進の方針に據らんとせば、心よりして露國と親善し、以て武裝せざる平和を保持するを必要とすべし、其の方法果して如何、外交上に於て施設すべきもの素より百端なるべし、而して滿洲開放の如き、亦其の一策ならざるや否や。

ポーツマス條約に於て、我れ滿洲に於ける列國の機會均等主義を標榜して以て之を開放することを宣言したりき、既に然る以上は、南滿洲鐵道と大連とを經營する外、一切平等に列國に開放すべし、我が租借地たる旅順口にして、果して軍港として我れに缺く可らざるものならば、姑らく現在のまゝにても可なり、然らずんば軍港要塞たらしめざるを條件として、之を開放する亦可也、要は盛んに歐米人を歡迎して、茲に大に商工業を發達せしむるに在り、斯くすれば露國は第一に日本に北進の志圖なきを悟りて心を安んず可く、第二に列國を憚かりて、南滿洲の再併呑を斷念すべく、軍を朝鮮に入るゝ殆んど不可能なれば、日本に復讐するの單に海軍に由るの外なきを悟るべし、而かも露國海軍が日本を凌ぐまでに發達するの至難なるに於て、竟に復讐を斷念するに至るや知るべきのみ。

唯だ我れ竟に北進せざるを可とするや、滿洲を斯の如くにして開放するの利害及び効果如何、吾人は茲に此の問題を提げて敢て世に問ふ、日本の將來を慮かるもの深く之を研究し決定すべし、而して是れ國家及び國民の使命を盡す所以ならずや。

若し北守南進の方向を執らば、我は如何なる發展を爲すべきや。

福建省の不割讓は既に清廷に之を約せしめたり、更らに我が商工業のため豐饒なる市場たるは南清一帶なるべし、楊子江流域を首め、廣河流域の方面なるべし。

非律賓も、暹羅も、遠くは安南迄も、總て我が日本民族發展の舞臺たるべし。

然れども誤解すると勿れ、日本人は之を征服して我が領域と爲すにはあらず、唯だ有餘る人口を移住せしめ、又は商工業を經營せしめ、以て通商貿易の市場と爲さんと欲するのみ、之を征服せんとせば或は征服せられ得ざるにもあらざるべし、而かも斯くして何等の效果ありや、清國と暹羅とは兎に角一個の獨立國なり、非律賓は米國の領土也、安南は佛國の保護國たり、之を征服せんと欲せば、勢ひ其の感情を害し、之と衝突せざる可らず、是れ豈吾人日本國民の欲する所ならんや、要は歐米列國人の做すが如く、單に移住民を送り、通商を拓かんと欲するのみ、若し之を妨害して門戸を閉塞するに止まらず、利益を壟斷して、我が進むを排するに武力を以てするが如きものあらば、我れ亦餘儀なく之に應ずべきのみ、而かも我が好んで望む所に非ざるや論莫き也。

日本民族の繁殖すべき方面は、樺太臺灣の如き領域は勿論、韓國を始め、滿洲、南清より、非律賓、暹羅、安南の方面にも及ぶべし、此の間に於て日本民族は繁榮すべく、同時に國家は其の利害關係上、玆に其の勢力を擴張するに至るべし、彼の太平洋の彼岸なる南北兩米の西部また亦然るべき也。

（八）

北米合衆國の一部に、日本人排斥の氣風あるは慨すべく、此がため竟に日本人の移住に制限を加ふるの餘儀なきに至れるは、假令移住者に於て一半の責任を分つべき事實あるにせよ、吾人の少からず遺憾を覺ゆる所とす。

更らに奇恠なるは、來るべき改撰期に於て大統領たらんとするタフト氏及び氏を撰擧すべきレパブリカン黨の大會が、公然亞細亞人排斥を宣言し、其の政綱の一端に揭ぐるに苦力勞働者の入國を拒絶すべきを以てし、以て日清兩國人の移住を排斥するとを暗示したる一事なりとす。

吾人日本民族が米國に移住するは、猶ほ英獨墺露伊の諸國人が米國に移住すると同じきのみ、其の爲さんと欲する所亦然り、米國は理に於て猶ほ英獨墺露伊に對するが如く日本に對して可なり、紐育のみにも八十萬人に近き獨逸人あるも、獨逸は米國に對して何等の累を爲したりや、何等の累を爲さんとするや、我が日本民族の言語、宗教、風俗、習慣は素より米國と異なると多し、而かも此がため平和及び治安に何等の害ありや、一部勞働者の起つて之れを排斥するにあらざる以上、波瀾生ぜんとするも得べからざるにあらずや、米國の資本家は寧ろ柔順勤勉にして且つ廉價なる日本人を好愛し、而して廣漠なる米國西部地方の開拓は、寧ろ此等日本人の移住に待つと多きにあらずや、然るに險惡狠戾なる一部勞働者の說に聞きて、公然日本人を排斥す、單に米國自身の不利益なるのみにはあらじ。

今の大統領ルーズヴェルト氏は、最も率直に正義を唱導して、容易に之を枉げざるの概あり、隨つて日本人排斥を公言せず、寧ろ其の敎書に於て公々然日本人排斥の不理非道なるとを喝破したりき、レパ

プリカン黨は其の政綱に於て多くルーズヴエルト氏の主義に賛同すと稱しながら、獨り日本人排斥を標榜したるは何ぞや、思ふにタフト氏は剛毅なる政事家なり、然るも其の正義を主張するとは竟にルーズヴエルト氏に比す可らず、否、怜悧なる政治家的性質として、其の多數の投票を收集するがためには、少數なる資本家の希望を斥けて多數の險惡狠戾なる勞働者の歡心を迎ふるに急なるも知る可らず、苦力勞働者排斥を標榜して之を更たむる莫くんば、タフト氏の人格また略々知るべきのみ。

遮莫、タフト氏の人格の如き必らずしも吾人の問ふ所にあらず、吾人は正義上及び利害上、極力日本人排斥に反對せざる可らず。

基督敎の博愛主義は、素より人種の區別を立つるとなし、正義も亦素より人種の色彩を分つことなき也、然るに英獨墺露伊人なるが故に之を迎へて、黃色人種なるが故に、日淸人を排斥すといふは、是れ基督主義に反する也、正義を無視する也、斯の如き非人道的行爲は飽まで之を排斥せざる可らざる也。

若し米國が其の主權を以て、一國の利害上悉く外國人の移住を許さずといはゞ、必らずしも一理なきにあらず、啻だ一方に許して一方に許さず、最惠國條欵を無視するが如きは、是れ一方を侮辱する也、日本は知らず何時まで此の侮辱を甘受すべきぞ、

北米の太平洋沿岸は、其の氣候地味に於て實に日本民族の移住に適する最良最便の地也、之を閉塞せらるゝは日本民族に取つて少からざる不利益也、且つ墨其哥、秘露、智利の諸國も、亦深く日本人移住の眞利害を知らず、單に米國が排斥したるが故を以て、亦漫然として日本人を排斥せば、日本民族は太

平洋の彼岸を通じて全く閉塞せらるゝに至るべし、今や實に此の憂惧すべき傾向の隱約の間に看取せらるゝに於て、吾人は將來容易ならざる不利益を蒙むるとを掛念せざる能はず。

我が政府及び政黨が動もすれば此の問題を輕視し、國論また之に冷淡なるは、吾人の慊して以て慨する所たり、日本の國家及び國民の使命を理會するもの、何如ぞ斯の如くなる可けんや。

(九)

露國と努めて親和し、眞心よりして平和を相持するを必要とせざるや否や、即ち北守南進を以て我が發展し擴張すべき國家國民の使命と爲さゞるや否や。

是れ實に國家國民に取りて最も重要なる問題也、經世を念とし、政治に志あるもの先づ善く之を解釋するを要す、彼の軍備、財政、外交の三問題の如きは、此の解決を待て然る後適宜に決定せらるべし、此の問題の解決を先にせずして、徒らに財政、軍備、外交を云爲するも、到底根基ある施設を看るとを得ず、竟に其の日暮しの姑息策に止まる、況んや唯だ政黨の消長を喜憂するが如きをや。



生活の情味

金子筑水

第一

生活する事は、其の裡に生活を味ふ事を含んでゐる。生活を味はずしては、無論吾人に生活は無い。生活の情味は何であるか、又其の情味は、生活全體にどんな關係があるか。茫漠たる疑問てはあれど、吾人には多大の興味ある問題に感ぜられる。

生活の情味又は單に生活の味ひといへば、言ふまでもなく、生活其のものを嚙みしめて味はつた吾人が情の上の經驗を意味する。生活の範圍は廣い、其の內容は極めて複雜である。生活の情味は多種多樣にして、且極めて複雜なるべきは自然である。特殊の情味については、暫く之れを不問に附し、例へば平生吾人が感興を引く度合の比較的に強く深く長く、且比較的に複雜にして、假令精確に生活全體の情味と總稱し得ないまでも、少なくとも、其の情味中の重要なもの顯著なもの、情味中の情味とも感ぜられるものについて、其の色合を何と形容すべきか、其の特質をいづこに、求むべきか、其等がこゝに吟味しやうとする要點である。初から我等は斷つておく、此等の疑問に對する答辯は、無論一家の經驗を土臺としたものゝ又學術的に精確な調査を遂げたものでもない。

普通には生活の重要な情味が、極めて簡單に解釋されてゐる、其の複雜な情味までが、餘りに簡單に形容されてゐる。一面に於て、生活は樂しい、おもしろい、**愉快なものである、**スヰートであると**解釋されるに對**

して、他面に於ては、つらい、苦しい、にがい、辛い、酸い、悲しい、哀れな味が生活の主要な情味と解釋されてゐる。樂世觀と厭世觀は、まさしく此の種の解釋の對照であらう。生活の情味が、或は樂しく面白く、或は不快、苦痛、悲哀の調子を帶べるは言ふまでもないが、さればとて、此の種の簡單な言葉で、生活の複雜な情味を言ひ現はさうとするは、餘りに大膽に餘りに無理なことではないか。仔細に論說するまでもない、經驗上の事實に徵すれば、生活の重要な情味は極めて複雜である、其の內容は味へば味ふほど深みがある、不思議である、濃厚である、艶麗である、壯絕である、悲絕である、然るに此等複雜の情味を十把一トからげに、或は苦樂或はおもしろい、おもしろくない等の簡單な形容詞に盡さうとするは、生活の眞味を盡さゞるのみか、生活其のものについて、幾多の誤解を世に廣める源ではあるまいか。吾人の日常生活に於てすら、其の情味は極めて複雜である、濃厚である、簡單におもしろい、苦しい、にがいと形容される情味も、仔細に味へば、苦樂以上、おもしろい、おもしろくない以上、尙さま〲に複雜な味ひを含んでゐる。多くの場合に於ては、苦樂の兩調が妙に混交して、苦しいやうな樂しいやうな、而も其れ以上强く吾人の感興を引く深いこみ入つた味ひが感ぜられる。假令苦しからうが、おもしろくなからうが、吾人は尙そこに吾人の感興を引くに足るの情味を覺える場合は幾らもある。例へば月の華やかな夜ひとり郊外を散步するとする、苦しいと感ずることもあらう、樂しいと感ずることもあらうが、單に苦樂を以て盡すべからざる一種複雜な情味を覺えるが普通である。深夜心ゆく友と靜に來しかた往くすゑを語るとする、我等はそこに形容すべからざる限りない情味を感ずるではないか。吾人が小說を讀むとする、讀みおはつて深く感に沈むとする、實際生活に於けるとは多少趣きは違つてゐるが、吾人は尙小說によつて、人生の複雜な情味を味ふのである。斯かる類例は餘りにクラシカルに餘りにロマンチックだと難ずる者があらうか、嚴格な意義に於て、近代の現實生活の情

味――ロマンチックなのとは頗る趣を異にした近代生活の情味は、更に明らかに苦樂一邊のものにあらずして、より複雑に、より嚴かに、形容の出來ない一種不思議な味ひをもつてゐる。世人は動もすれば、近代生活をひとへに苦痛一邊又は悲哀一邊のものゝごとく解する。苦痛と悲哀とは、近代生活の唯一の情味なるが如くに解する。現實生活就中近代の現實生活が、ロマンチックな一種遊戯に類した輕快な情調を含んだものにあらずして、むしろおごそかな苦痛と悲哀との情調に富んだものであるは我等も之れを認める。近代生活が赤裸々な眞面目な生活であるだけ、それだけ強い深い苦痛と悲哀とに富める事は、何人と雖も是認せざるを得ない事實であらう。然るにもかゝはらず我等は、近代生活は决して單純に苦痛一邊のものにあらずして苦痛の情調の裡におのづから一種深刻な、まぢめな、強く鋭い複雑な情味が深く內在的に籠れるを主張せざるを得ない。近代生活が赤裸々に眞面目に現實的であるだけ、それだけ其の情味は、更にいよ〳〵鋭く深く、更にいよ〳〵切に吾人の感興を強める底のものである事を主張せざるを得ない。吾人が情生活全體を壓倒するほどの激烈な苦痛は別として、苦痛の情調の伴ふてとは、必ずしも吾人が感興を絶滅するものではない。むしろ倒に、強く吾人が感興を引くの情味は、おほかた深い苦痛と悲哀とをつゝんでゐるとも言はれやう。トラジカルな情味は、すべて此の種類のものではないか。我等は近代生活の情味を、如何にしても單に輕快なもの、おもしろいもの、愉快な者と形容しがたいと同時に、又ひとへに苦しい一邊又は悲しい一邊とも感ぜず、むしろ其の苦しいやうな悲しいやうな味ひの裡に、何故とも知らず、強く吾人を引きつける眞面目なおごそかな深い鋭い一種複雑深奥な情味の籠れるを認めざるを得ない。現在生活が吾人に取つて苦しからうが面白くあるまいが、倘吾人は其の裡に一種深みのあるシンミリとした不可思議な情味を味ふのである。一日の勞役をおはつて、生活に疲れた勞働者がたど〳〵として家路に還るとき、彼れが苦痛と悲哀とは明らかに

其の顔面に示されてゐる、而も彼れが現世に執着する一人の勞働者なるかぎり、彼れは尙他人の得知らぬ生活の不思議な情味を味つてゐる、人は彼れが食ふ一片のパンの味ひを、ひとへに飢餓を防ぐ肉的快味とも呼ぶであらう。されど彼れが食ふ一片のパンは彼れが心血を濺いだ勞役を意味してゐる、努力の完成を意味してゐる、生存の複雜な滋味を意味してゐる。彼れはそこに一種不可思議な情味を味ふのだ。

吾人は生活の情趣を餘り簡單に解釋し過ぎる。吾人が情生活は極めて複雜である、生活其のもの丶複雜なるよりも更に複雜である。苦樂の兩調が互に錯綜し融合するは言はずもあれ、些末な日常の事件に於てすら、容易に分析解剖を許さゞる複雜な情調が一團の情趣に聯合し融和するが普通である。情生活の聯合作用が知識生活のそれよりも微妙であるだけ、それだけ吾人は些末の事件にも複雜な微妙な情趣を味ふが普通である。斯かる生活の複雜な情調を傳へるは詩人小說家の役目で、現實生活に於ては、詩人小說家さへ容易に寫し出だす能はざる複雜微妙な情趣が吾人に味はれる。此の複雜微妙な情趣を、ひとへに快樂一邊のもの又は苦痛一邊のもの丶如く解するは、初から生活の情趣其のものを誤解し、延いて人生全體を誤解することになる。人生の半面は複雜微妙な情趣で、此情趣につゝまれたものが人生である。斯かる複雜微妙な情趣をば、我等は假に生の情味と名づける。つまり一種名狀しがたい深刻な情味なのである。露骨に言へば、吾人は生活の情味に餘り慣れすぎてゐる、吾人が情の感受性はあらゆる生活の情味を味ふには、餘り鈍りすぎてゐる。情生活が甚しく荒んで、何等か異常な刺激を俟つにあらずば、容易に強い感興を覺えざるは、就中近代人士の通弊である。吾人は如何にもして再び生活の情味を正當に味ふ位置に還へらなければならない。生活の情味を除いては、生活の何ものなるかは吾人に考へられない。複雜微妙な情趣を除き去つた人生は、さながら無意義な空虛な荒寥たるものではあるまいか。生活の情味を奪ひ去らるれば、吾人は遂に人生に對して背を向けざるを

得ない。

第二

玆に一の大なる疑問がある。生活の情味は、生活全體に於て、どれ程の價値を占めるものであらうか。吾人が日常生活に觀るに、吾人は必しも情味其のものを目的として生存しないらしい。吾人日常の行動は、たゞ何となく或行動其のものを遂げるので、必しも之れに伴ふ複雜な情味を目ざしてはゐない。三度の食事は、之れに伴ふ複雜な情味が全然豫想されないではないが、必しも情味其のものが目的であるではなく、むしろ吾人は何となく之を欲するやうに見える。食はんがために食ふので、必ずしも味はんがためではないやうに見へる。生活に關しても同じ道理だ。吾人は唯何となく生活を欲するので、必ずしも其の複雜な情味を味はんがために生活するとは思はれない。一方から見れば、生活は如何にもブラインドに見える、たゞ生のために生を欲するやうに見える、之に伴ふ情味のごときは、眞に伴生物に過ぎずして、何等重要なものではないやうに見える。唯わけもなくブラインドリーに働きたいから働く、遊びたいから遊ぶ、食ひたいから食ふ、寐たいから寐る、必しも勞働や遊戯の味ひを味はんがためではないやうに見える。事實、生活の目的が其の情味であるとは言ひにくい、情味は如何に複雜で微妙であらうとも、其れが生活の唯一目的でないことは明白である。吾人は唯情味のためにのみ生活するとは思はない。

然らば生活の情味の價値はいづくにあるか。生活全體に取つて、其の情味は何等重大な價値の無いものであらうか。我等は決して然か思はない、むしろ生活全體に取つて、其の情味は、一種深い重大な關係ある事を認めざるを得ない。吾人が日常生活の行動を觀れば、一見如何にもブラインドにも見える、何等の根據もない盲目的動作にも見える。されど尚一歩進んで考へれば斯かる盲目的動作も、畢竟は吾人が情意の要求に根ざしてゐる。既に情意の要求に根ざしてゐるかぎりは、斯かる動作も、如何に不明瞭であらうとも、全然之れに

伴ふ情味を豫想しないとは言はれない。勿論場合によつては、殆ど全くブラインドリーに、生活の情味を豫想しない折もあらう。されど普通の場合に於ては、假令漠然ながらも、不知不識の間、斯かる情味の豫想に殆ど必然的に混入するを妨げ得ない。假に吾人が生活には、何等の情味も伴はないと定める、吾人が一切の行爲に、何等吾人の感興を引くに足るの情趣が纏綿しないとする。斯かる場合にも吾人は尙依然として生を樂むてあらうか、ます〳〵生活の範圍を擴張するてあらうか。食物が極めて無味であると假定する。生活が極めて無味乾燥て、殆ど全く吾人に冷々たるものであると假定する。吾人は尙食ひ且生活することを欲するてあらうか。甚だ疑はしい。斯く考來たれば生活の情味が、生活全體に取つて、如何に重大な位置を占めるものであるかは、おのづから明白であらう。生活の情味は、生活の刺激者であると同時に其の完成者である、吾人を生活に刺激するものであると同時に吾人をして生活を樂ませるものである。情味を引離つては生活は考へられない。無論情味は生活の全體てはないが、生活を成就するものは情味てある。情味なき生活は、吾人に取つて、如何に荒寥たるものであらうぞ。さすればまた生活の情味は無論生活の唯一目的てはないが、少なくとも生活目的を完成するものである。複雑微妙な情味を味はずして、吾人は完全に生活の目的に達したとは言はれない。人生を樂むには、必ず人生の情味を味ふを要件とする。

斯くの如く生活の情味は生活の刺激者であると同時に、其の完成者てあるとすれば、吾人は及ぶべきかぎり、廣く且深く斯かる情味を經驗するが吾人の本望てある。至願てある。斯かる情味の經驗がます〳〵廣く且深ければ、吾人に取つて生活の範圍はます〳〵擴張され、其の内容はます〳〵豐富に成行く筈てある。單に快樂一邊の情味を味はんとすれば、吾人は現世に於て、常に矛盾を感ずる、失望に追ひやられる。生活の情味は、決して輕快なものではない、單純なものではない。眞面目な沈痛な深みのある一種不思議な情調が現實生

活の味ひである。斯かる情味を味ふことます〳〵深ければ、いよ〳〵深く人生を味ふ所以にして、いよ〳〵深く人生を味ふことは、いよ〳〵切に吾人が本願を滿たす所以である。

第三

生活の情味について、吾人は尙最後の一大疑問に接せざるを得ない。前段屢々繰返へしたごとく、生活が與へる情味は極めて複雜である、微妙である、尋常苦樂以上強く吾人を引きつける一種不可思議な力を持つてゐる。吾人は此の複雜微妙な力に引きつけられて、現世に執着し、飽まで生の情味を味はんとしてゐる。然るに吾人は、さながら惡夢を見るがごとく、屢々下のごとき疑惑に襲はれる。在來吾人が經驗した生活の情味は、果たして吾人を現世に執着せしむるに足るほど大なる價値を備へたものであらうか。現に吾人が現世に執着する以上、生活の情味が吾人に不思議な影響を與へつゝあるは事實である。又生活の情味が吾人に取つて捨てがたい味ひある事も事實である。されど此等生活の情味が、果たして五十年の生命を托するに足るの價値あるものであらうか。人生は畢竟現に吾人が經驗しつゝある味ひだけのものに過ぎずして、其の以上に何等の價値も無いものであらうか。人間の一生は、蜉蝣の生活にまさること唯一歩に過ぎざるものであらうか。此の種の疑問は、無涯限に吾人を苦める。

飜つて思ふに、人間の一生は、矢張人間の一生である、其れより少なくもなければ、又多くもない。吾人は此の一生の裡に安心を求めなければならない。隨つてまた吾人は、現世が與ふるさま〴〵な情趣の裡に中心の滿足を求めなければならない。朝に道を聞いて夕に死すとも悔ゆるなき底の大情味を現世の裡に求めなければならない。吾人が一生は、彼のゲーテがファウストの一生のごとく、死すとも悔ゆるなき大情味の追求又追求かも知れない。幾たびか蹉躓し、幾たびか失敗し、幾たびか邪路に踏み入り、幾たびか深淵に沈む底の努力又努力の旅路であるかも知れない。生活の情味にもはや何等の感興も覺えない者は、我等の關す

る所にあらず、苟も尙其の不可思議な味ひに生を戀ふる者は此の不可思議な味ひの裡に、吾人が生命を托するに、足るの大情趣を求めなければならない。

斯くの如く現實の生活と現實の情趣とに固く執着しつゝあるとき、吾人は尙最後の惡夢に襲はれる。現世の情味は、畢竟夢のごとく幻のごとき情味にして、吾人は更に眞實な更に確實な大情味を味ふべきではあるまいか。現實主義の精神と並んで、ロマンチックな精神は、遂に吾人に已みがたい。吾人は夢幻を轉じて眞實に化さなければならない。宗教的安心は如何にしても吾人に已みがたい。

文藝上の二問題

上田萬年

一は生田葵山の「都會」の發賣禁止問題、一はオペラの興行問題之なり、第一の自然派小說の禁止に就いては、予は小說そのものを研究し居らざる故、それが果して禁止を値するや否やは具體的に言ふ能はず、されどその禁止する手續、若くは禁止そのものが、小說に對する影響の上に見ても、多少意見を發表したしと思ふものなり、行政上或る小說が害ありと認めて禁止するは差支なき事なれど、その認め方の如何樣なるか、認むる人の誰なるかは、頗る研究すべき問題ならんと信ず、又禁止するに就きても、その禁止の方法不公平なるに於ては甚だ喜ぶべきことならずと信ず、今日さる方面の禁止は、警視廳若くは警保局と稱するところの屬吏が事に當り居れり、又屬吏に非ずとするも比較的小說、或は美術上に鑒識力の乏しき行政官諸氏が、その任に當り居るは明らかに言ひ得るところなりと信ず、而して吾人は文藝上の問題が此等の人々により、解釋せらるるを以て甚だ覺束なしと考ふるものなり、世界の一等國を以て居り、東洋の文明國を以て任ずる日本の如きに在つては如何にするも斯かる爭の起る場合に、學者、文士、美術家、若くは出版者の如きもの

の一團體、即ち一委員會を組織して、其處にて公平なる處置を取らせまほしと信ずるものなり、されば之は單に吾人の理想に止まり、實際には容易に行はれずとせば、吾人は少くとも左る希望だけを有するものといはん、

今の政府當局者は、何が故に現在の眇たる一作者の小説のみに苦心し、監督するか、古來有名なる作者の作物に向つて相當の處置をなさゞるか、德川時代のものにても、吾人の見るところを以てすれば、今日の自然派小説の如きもの決して少からずと信ず、加之、皇室に對して不敬に亙る如き記事あるものも、現に賣買せられ居り若くは新に飜刻せられ居るなり、何故に新刊書のみに酷にして舊刊書若くは飜刻書に對しては寛なるか、又他の一方にては今日の新聞を見るが可ならん、今日の新聞には頗る驚く可き記事の記載あり、雜報に於ても、小説に於ても、廣告に於ても頗る風俗壞亂を以て評し去らるべきもの多きが如し、少くとも予一個人の立脚地より言へば、凡庸なる小説よりは尙ほ强き印象を與ふるものありと信ず、それ等をば何故に相當の取締をなさゞるか、當局者は曰ふ、新聞には法律ある故容易に手を觸れ難し、故にその必要を認むるも之を實行する方法は甚だ困難なりと、然らば單行本としての小説に對してのみ獨り酷にして、斷片として新聞に出づる小説には甚だ寛なりと言はざるべからず、こは甚だ矛盾せる處置なりと思惟す、恰も裸體の彫刻物若くは繪畫の美術展覽會等に出づる時には、內務省にては之を禁止するに文部省にては公然許すといふと同じく、甚だ矛盾の次第なりと信ず、一國の政治の方針は果して何處に在るか、少しも知るべからず、それは內務と文部との衝突なるも、之は同一內務省內にて、猶ほ新聞と雜誌との取扱方に左る懸隔を生ずるもの甚だ意を得ざる次第なりとす、元來虛心平氣にて言へば、吾人は實際次の如き意見を有す、

小説の如きものに多少の缺點ありとするも、その小說にして直に忘れられ了るべきものか、或は全く世間にて等閑に附すといふが如きもののならば、此種のもの

は當局者が左迄に苦心して、敢て禁止するの必要あらじと思ふ、禁止するが爲に却つて世間の注意を惹き、購買者の數を増すが如き處置は、手段として甚だ拙惡なるものなり、想ふに新聞の如きも、その記事は單にその日々々々のものにして長く印象を止めざるが故に、政府は幾分他よりも寛大の處置を取り居るものにあらざるか、氣宇を持すること廣大ならばそれにても亦支障なしと信ず、兎に角予は此問題に關しては、今後前述し置きたる委員會の組織を是非共成立せしめたしと考ふるものなり、

右は單に社會に害毒を流すか流さぬかの問題を解決するのみの委員會なれども同時に國家は小說、脚本若くはその他の出版物に於て、特に社會に稗益を與ふべき好著述に對し、それを奬勵すべき方法を設けられたしと思ふ、此事は寧ろ文部大臣の權能に屬すべきもの、例へば學士會院の如き處にて、その責に任じて可ならんと信ず、尙ほ此上にも種々の方法あるべしと思ふも此處には言はず、

第二のオペラ問題に就いては、聞くところに據れば音樂學校にても是非行ひたしとの希望なりしに拘らず、文部省にて許可せざるが爲に遂に泣寢入となりしものなりとの事なり、その曲はと問へばオルフヰイスなり、その演手は音樂學校の敎師が主となり、生徒がコーラスを歌ふとの事なりき、予は之を禁止すべき何等の理由をも認めざるなり、唯下馬評の傳ふる所によれば曰く、オペラの如きものの日本の社會に大流行を來すに至らんか、淫靡或は奢侈の風の非常に增長するに至るべく、所謂ハイカラ式若くは歐化主義が甚だ急激の度にて進まんことを恐る、これその興行を控えしめたる所以なりと、此下馬評若し信ずべくんば、吾人はその禁止の精神に對しては善意に解するを躊躇せざるも、その音樂に就いて餘りに無學に餘りに沒常識なるの一事に對しては、之を憫笑するを妨げざるなり、明治政府の、若くは明治の上流社會の他に對する行爲と對照して甚しく疑惑の念無からざるを得ず、例へば美術學校の西洋畫の部にては、現に裸體美人をモデル

として使用し、教師生徒共に何等の怪むことなく、研究に從事し居るにはあらざるか、學校として見たらんには音樂學校のオペラの如きは、遙にそれ等よりも威情を害せざるものとなして可なるべく、その故にさる企ても起りたることならんと思ふ、又現に官私立の學校にて茶番若くは芝居を演ずるが如きは、今日既に普通に行はれ居るところならずや、茶番若くは芝居に比すればオペラの方遙に高尚なりとは吾人の考ふる所、當局者は果して如何に處置する考なりや、それもオペラにても、ドンジュアン若くはカルメンと言ふが如き、單に話の上にて聞き文章の上に就いてのみ見ば、聊か如何と傾かるゝ點もあるなり、左る種類のものともあらば、音樂を解せざる人がその事實上よりのみ立論して不可なりと斷ぜんことも、その人のみに就いて言はば強ち無理ならずと恕するも可ならん、されど然らざる曲、例へばベトーヴエンのフイデリオの如きは如何、烈婦が一身を犠牲に供してその良人を助くと言ふが如き、左る忠孝義烈のものに對しても、單にオペラなるが故に不可なりといはんか、此の如きは如何樣に是非すべき、殆んど話にもならざるなり、只愚物の議論とのみ評せざるを得ざるべきなり、元來音樂はその聲樂なるにせよ器樂なるにせよ、教ふる時には部分部分を教ふるも、大成する時には一個の全部を成すを知らざるべからず、例へば日本の長歌の如き、それが單に歌ふのみに止まざらんか、眞にそれを解釋せんには、歌に伴ふ舞踏もあり、せりふの文句もあるとを理解せざるべからず、勸進帳が勸進帳として面白きは、始めて舞臺に現るゝ長歌の歌のみにあらず、笛も入り鼓も入り、役者が色々臺詞を使ふ、舞踏をなす等、その各部の意氣込の凡て一致したる上に存す、オペラも亦之と同樣にて、その上には獨唱もあれば合唱もあるなり、管絃樂も伴ふなり、而して美はそれ等の各部分が能く相一致する上に存するものなり、オペラの性質や此の如し、それを興行して生徒に見せ、或は社會の公衆に見するも何の不可なる事かあらん、然るに非常に害あるが如く思ふは、殆んど音樂の知識を有せざるものと

言はざるべからず。

元來斯の如きものは、單に今日の社會に就いて言ふも行政官のみに一任すること能はざる所にして、同じく政府は學者にせよ技術者にせよ、或は教育者にせよ、左る種類の人々を集めて行政官の相談相手とし、斯くて事務を取り行くことが最も社會に對して健全なる方法なると同時に、又親切なる措置なりと信ず、若し奢侈の風を增長すとか、或は歐化主義を進むとの點より言はゞ、總理大臣の夜會に喜劇をなすと言ふが如きも、甚だ宜からざることかも知れず、又總理大臣が俳優を招きて酒宴を開くが如きも之を道學者よりして言はしめば甚だ褒められざることに相違なし、一方には斯ゝる潮流あるにも拘らず、左る方面は觀過し置き、正當なる方法にて正當なる事業をするものに對し、此の如き筋違なる干涉を試むるは甚だ矛盾の事なるが如くに感ぜらる、左れど之は全く下馬評によりて評論したるもの、事實の眞相を知れるにはあらざるが故に、若し誤解等ありとせば偏に推恕を請ふこととすべし（談話を筆記し特に校閲を經たるものなり）

無記名投票、大選擧區、選擧權擴張

安部磯雄

先般擧行せられたる總選擧に於て、言論てふ武器のみを以て當選したる人は少くなかつた。有體に言へば今回の總選擧程候補者が多く金錢を使つたことはあるまい。同時に今回の如く貧乏候補者が選擧人の同情を得たことはあるまいと思ふ。吾人は墮落せる政治界に於て多少の光明を認むることの出來たのを深く喜ぶのである。然し金力に賴りて投票を買收せんと試みたる人より見れば今日の選擧法は頗る彼に不利益なることを悟つたに相違ない。彼は黄金や贈物を以て選擧者を誘ひ、甚しきに至りては承諾書なるものをも強請したのである。斯くて彼は必ず多數を以て當選すべきを豫

想したるに拘はらず、開票の結果彼が味方と信じ居たる選擧人の半數は彼を棄てゝ他に赴きたるを見たのであるから、彼は自らを責むるよりも先づ選擧人の不德を責むることになるのである。これに反して藏原惟郭氏の如きは慥に豫想以上の投票を得て居る。同氏の語る所に依れば氏が大丈夫と信じて居たのは千四百票位のものらしかつた。然も開票の結果三千票以上を得たではないか。これに依りて見れば表面藏原氏に同情を寄することの出來ざりし人々にて心中陰に氏を推擧せしもの、少からざりしことを想察することが出來る。果して然らば無記名投票は選擧人の節操を傷くるものといふべきであらうか。昨年の議會にも無記名を記名とし、大選擧區を小選擧區とするの議出て、衆議院はこれを可決し、貴族院は之を否決したのである。想ふに政友會所屬の議員は今年も亦これを議會に提出するに相違ない。余は此問題が我政治界の運命に關係する所重且つ大なるを信ずるが故に、聊か卑見を陳べて我國民に訴へたいのである。

若し單に政治學上の議論として考ふれば無記名と記名とは各一長一短ありて容易に其優劣を定むることは出來ない。然し吾人が考へたいと思ふのは政治界の現狀に對して何れが最も適當なるかといふことである。切言すれば政治の腐敗を救ふに何れの方法がより多く有効なるかといふのである。記名投票を主張する人は單に理想といふことのみを考へて居るのであるから、其立論の高尙にして奇拔なるは言ふまでもないけれども、實際の事情に適中せぬ所がある。今簡單に彼等の論ずる所を陳べて見よう。抑も吾人の代表者を選擧することは國家の公事であるから、公明正大なる方法を採るべきは勿論である。無記名制度を採れば選擧人が責任を感ずる心は自ら減少し、終に無能なる候補者に投票することをも恥辱と思はざるに至るが故に、選擧者をして責任ある投票を爲さしむるには記名投票に賴るの外はない。亦今回の選擧に現はれたる投票僞造事件の如きも全く無記名投票の結果であつて、記名制度の下に在つては斯る罪惡の行はるゝ餘地がないといふ

のである。勿論吾人は理想として記名投票に賛成することを躊躇しない。若し何人も全く自由意志に依りて投票することが出來るならば、記名投票は實に男らしき方法であると言はねばならぬ。然れども今日完全に自由意志を以て投票し得る人が幾何あるであらうか。現社會に於て獨立の經營を爲しつゝある人は極めて少く、多くは他人に雇はれて生活の途を得つゝあるのだ。雇人は果して雇主の依托を斥くるだけの勇氣を有して居るだらうか。或人は雇人の意氣地なきを痛罵して彼は無主義無節操なりと言ふかは知らないが、實際投票位の事で自己の位置を拋棄するとは何人も容易に爲し得る所の事でない。然れども是は單に雇人の事のみではなくて、獨立の經營を爲せる者にも適用することが出來る。人氣を資本とせる商買人の如きは其重なる得意客の依囑を斥くることに大なる困難を感ずるに相違ない。然るに候補者はあらゆる緣故を通ふして其投票を懇請するのであるから、强大なる自由意志と生活の安全を有するにあらざれば、終に情實に服するに至るは明なることである。吾人は今日の如き社會に於て記名投票を用ふることは決して策の得たるものでないことを思ふ。

前回の總選擧に於て島田三郎氏が加藤高明氏と橫濱に於て候補者を爭ひし時の如き、加藤氏は富豪岩崎の後援に依り橫濱市の實業家を藥籠中のものとなし、金錢の力を借りて市民に投票を强請したではないか。橫濱の實業家は三菱を畏れて陽に加藤氏を助くるが如く見へたのであるが、開票の結果は矢張島田氏の勝利となつた。誰かこれを見て橫濱市民を臆病と呼び變節と嘲るものがあらうか。吾人は市民を責むるよりも、寧ろ强力を以て市民の投票を奪はんとしたる無法者を責むるのが適當であると思ふ。若し無記名制度が行はれて居ないならば今回の總選擧に於て藏原惟郭氏も高木正年氏も當選することはなかつたであらう。

故に吾人は次の如き斷案を下すことが出來る。凡そ無記名制度に賛成する所のものは必ず言論に依り若くは比較的正當なる手段に依りて當選したるものであ

る。之に反して記名制度を贊成するものは金力により若くは不正手段を用ゐて當選し或は落選したるものてある。彼の金力を借りて運動したる候補者が選擧人の變節を責め、彼等を以て二重にも三重賄賂を取る者なりと嘲けるのは滑稽も亦甚しと言はねばならぬ。彼等に果して選擧人の不德を責むる權利があるか。若し選擧人中に賄賂の二重取りする者ありとすれば、彼等をして斯く墮落せしめたる者は不埒なる候補者彼自身てはないか。吾人は學理上無記名と記名の優劣を定むることは容易に出來ないと思ふけれども、今日に於て記名制を主張するものは不正の徒であり、無記名制に贊成するものは正義の人てあると斷定することが出來る。吾人は今年の議會に於て此問題の提出せらるゝに當り何人が無記名制に反對し何人がこれに贊成するかに注意せねばならぬ。

無記名制の必要なることは單に今日のみてはない。將來選擧權が益擴張せらるゝに至れば其必要は一層增加し來るのてある。彼の泰西諸國に於けるが如く我國の勞働者が投票權を得るに至るとするも、若し記名制の行はるゝ場合に於ては、彼等の多數は必ず雇主の意志を承けて投票するに相違ない。斯くては折角の選擧權擴張も全く無意味に終るてはないか。故に吾人は將來を豫想して益無記名制の必要を叫ばざるを得ない。

記名制より生ずる弊害は金力及び腕力の跋扈てある。今回の選擧に於てすら腕力を以て强迫したるの例が少くない。然れども其範圍は極めて狹小にして、單に表面に立ちて奔走したる運動家が反對黨の爲に强迫せられたるに過ぎなかつた。一般の選擧人は無記名制の下に保護せられて居たのだから、斯る災難を蒙ることもなかつたのてある。若し一朝記名制を用ふることになれば其結果は如何てあるか、候補者は必ず金力を以て選擧者を誘ひ、倘ほ應ぜざれば腕力を用ゐて强迫するに相違ない。此時に當りては選擧者は一時を糊塗するために善い加減の返答を爲す譯にゆかぬ。彼にして表面甲候補者に約束しながら實際乙候補者に投票するが如きことあらんか、彼は後日壯士の爲に少からぬ禍を蒙るの恐がある。故に我國に於て記名制を行ふ曉

には先づ壯士を多く買收したる者が當選することゝなる。候補者の人格や學識の如きは決して勝利を得るの要素ではない。

政治界の腐敗に就きては何人も心を痛めて居るのであるが、如何にしてこれを矯正すべきかに就きては其意見必ずしも一でない。或人は先づ人心を改善すべしといひ、或人は制度の改革を以て急務なりと考へて居る。吾人は勿論人心の改善に重きを置くものであるけれども、制度の改革は目下の急を救ふに一層容易にして且つ有効なることを信ずるのである。然らば如何なることが政治界の腐敗を救ふ所の捷徑であるか。吾人は玆に三個の要件を提出したい。即ち無記名投票、大選擧區、選擧權擴張である。前二者は既に我國に於て實行せられ居る所のものであるから、吾人はこれを新案として提出するのではない。唯此二要件を破棄せんとするの決心が我衆議院に現はれて居るのであるから、吾人は豫めこれに向つて警戒を加へねばならぬと思ふのである。金力を以て政治界を腐敗せしめんとするのは最も忌むべき弊害であるが、無記名制と大選擧區制の下に於ては黃金も充分に其威力を逞ふすることが出來ない。若し此二制度にして永く繼續することあらば、總選擧の行はるゝ毎に漸次其弊害を改むるに至るであらうと思ふ。吾人は記名制と小選擧區制とを主唱する政治家を以て我政治界の前途を誤るものなりと斷定するのである。

無記名制と大選擧區制が黃金の魔力を減ずる所以は玆に詳論するの必要はあるまい。大選擧區は單に選擧人の數を增加するのみでなく、選擧區域を廣くするのであるから、候補者が金力と訪問とを以て當選を期することは容易の事でない。彼は勢ひ己れの品性と學識とを後援とし、言論の手段に依りて戰はねばならぬのである。されば制度の改革は黃金の力を減少することを目的とするのが最も適當であらう。然らば吾人は第三の要件として選擧權の擴張を提出したい。吾人は勿論丁年以上の人が權利として選擧權を要求し得べきを信ずるのであるけれども、單に政治界の腐敗を矯正す

る一手段として考ふるも選擧權の擴張は頗る利益あること、思ふ。候補者は二千若くは三千の選擧人を買收することは出來るかも知れんが、一萬乃至二萬といふ選擧人を動かすには言論に頼る外はない。然らば如何なる程度にまで選擧權を擴張すべきであるか。吾人の理想が普通選擧にあるべきは勿論であるが、必ずしも急遽の改革を爲すには及ばない。一歩を進めば慥に其だけの利益はある。吾人は一時も早く其一歩を進めたいのである。

答問二則

新渡戸稻造

(一)

○舊幕時代及び明治初年の頃には少年子弟に四書五經殊に論語などを讀ませたものである。又西洋では今でも家庭に於てバイブルを讀ませる。少年の頭腦は單純であるから固より是等の書に書いてある深遠なる教訓を充分に味ふる丈けの力はない。然しながら無意識的に注ぎ込まれた思想は時として非常に大いなる力を有する。他日世路の艱難に遭遇し、一大事に逢會した時に少年の際に教はつた片言隻句がふと胸に浮んで、之を解決し去るの道を與ふるが如きとがなからうか、現今の青年は其少年時代に多くか丶る種類の道德書を教はつて居らぬ。イロハニホヘトや、ハ、ハナ、ナシ、ウマ、から習ひ初めて、稍々文字を解するに至ても、巖谷小波のお伽噺位を讀んで居る。學校で修身や倫理を教はつても多くは理智の上の修養で、根本的の道義を注入する如き道德書は讀んで居らぬ。現代の青年が兎角煩悶勝ちでデカダン式で大事に逢會する毎に意氣沮喪して華嚴や淺間に迷ひ込むといふやうな事も、いろいろな他の原因もあらうが、一つは中心に力ある信念、道義心等のない爲めでなからうか。今は正さに少年子弟が讀むべき道德書を要求して居る時代ではなからうか。之を作る必要はなからうか。

○右の如き質問に對して私の答は簡單である。今の時代は確かにかゝる書物を要求して居るに違ひない。私は餘り漢學などをやらぬ男であるが、それでも少さい時に讀んだ論語の言葉などが時々憶ひ起されて益を得る時もあるやうに思ふ。かさういふ書物は作る事が出來るものかどうか、それが疑問である。一體世の中の人を教訓してやらうなどゝ思うて書いた書物が果して世の中を教ふるに足るものかどうか。凡て教訓はいはざらんと欲するも、教へざらんと欲するも、抑ふること能はずして自然にいひ且つ教ふる如きものにあらざれば眞に力あるものは出來ぬものと思ふ。教は總てパーソナリチーと相俟つ。人物出でざれば何事も出來ぬ。殊に貴問の如き教訓書は人物の如何によつて世に對する力が違ふ。役所や委員などの手ではさういふ本は決して出來ぬ。論語でもバイブルでも皆孔子と基督とかいふエライ人物が、或場合と或人に向つていはざらんと欲し、教へざらんと欲しても、いはざるべからず、教へざるべからざる場合に發したる言葉であるから、言々句々悉く人事に適中し力あるのである。あれが若し孔子や基督が委員長となつて、十哲や十二使徒が委員となつて編纂したものであつたら果してあゝいふものが出來たかどうか疑はしい。兎角一世を指導するやうな大人物が出來て、其人が自己中心の要求によつて、世に教訓を垂れるといふやうな事にならなければ所詮さういふ書物は得られまいと思ふ。又殊に日本人はなか〳〵現代の人物に許さない奴で、吾々の知て居る人でもあの人ならばと思ふ人があつても、世間では彼是と難癖をつけて容易に心服しない。矢張り棺を蓋うて後世評が定まるといふ事になる。要するに貴問の如き教訓書は現代の要求して居るものに相違ないが、作らんとして作るべからざるものであるといふことに歸着する。

（二）

○現代の青年は昔の時代の青年に比べると一般に天下とか國家とかいふ觀念が薄いやうである。只々自分さへよければ他人はどうでもよい。といふやうな個人

主義が流行して居るやうに見受ける。之れは誠に憂ふべき現象でないか。

○との質問に對して、私は天下とか國家とかいふことを餘り口にせぬやうになつたのを喜ぶのである。私の考では今の世の中に一番に必要な事は健全なる個人の發達であると考へる。人間は社會的動物であつて孤獨の生活を送り得るものでないから健全なるといふ言葉の中には無論社會との關係も含まれて居るが、個人の發達といふことが第一番の必要な事と思ふ。自分の一身のことも、一家の事も始末をすることが出來ないものがどうして天下國家の事を始末し得るものか。天下とか國家とか口にするものを見るに概して頭腦は多くは空虛である。今日そんな事を口にする手合は多く古の豪傑流の人に多い。大手を振て肩で風を切て歩行くといふやうな連中に多い。さういふもの丶多くは大抵學問などはよく出來ない。柔道などをやる者に對して從來私は尊敬を拂つて居たが、近來尊敬の度が減じた擊劒の道德的作用に對しても私は今は疑を抱いて來た。昔の物の分らぬ町人や籠舁共を相手にでもするなら、威張つても隨分効能もあらうが、數年の義務教育を受けて居る今の人間に對しては全く何等の効能もない一體國を誤るものは多く疎大な空乏な頭の豪傑連―天下國家などゝ放言して家の暮向きの事も碌に知らないといふやうなものに多い。私は今は實業奬勵といふ事を一番の急務と思ふ。鋤を持て居れば相當と思ふ奴が自然主義を唱へたり、田舍の村長も勤まらない奴が大臣になりたがつたりするから日本は駄目なのである。先づ着實に己れ獨を愼み一身を修め、一家を立てることを考へるのが最も必要な事である。一身を立て、一家を立てることが出來れば立派な人間である。此立派な人間によつて出來て居る天下國家は必ずよい。世に或は實業家を攻擊して彼等は自家の利益が第一の目的て國家などは第二第三である。かゝるものが威張るやうになれば國家の不利益であるといふ人がある。然し私はさうは思はん。國家が彼等を虐待し若くは軍人のみ威張り散らすといふやうな世の中になつたら彼等は

どんな事もするかもしれんが、國家が彼等を御するの道を誤らずば決して彼等は國の害となる者でない。物は心配をすれば限りがない。若し實業家が利益の爲めに國家の害を顧みぬといふなら、軍人も時として自家の名譽又は勳章の爲めに無謀の戰爭をしたくなることがないであらうか。そんな事を恐れたら世の事は何一つ出來るものでない。此頃私は農業に關する祭を知り度いと思つて禮記を二度繰り返して讀んだ。處が其結論として禮といふことはつまり、二人以上の人間が交際をする時に、お互の感情を和らげ、社會的生活を愉快にするといふ事に外ならないといふ事を得た。私は天下國家を口にする人の多くなることを欲せずして、寧ろ個人の發達を計り、而して社會に處するに禮を以てする人の多からんことを望むのである。君の心配さるゝ愛國心に就いて私も十餘年前「極東」と云ふ雜誌に英文で書いて置いた事があるが其の後デモラン氏の「大國民」を讀んで、一層私の所信が固く成つた、即ち世に流布する愛國心なる文字は種々の感情や利益功名心が雜つて居るので、是れを類別すれば妙なものも澤山出來て來る、個人の名利を犧牲にする底の精神あつて初めて眞の愛國心が表はれるに、犧牲にすべき、換言すれば、祖國の爲めに捧ぐべき、君主の殿前に奉納すべき名も利もなき者の愛國心は隨分怪しきものだ。故に私の現今青年に望む事は國の譽となる樣な玉を磨け君の御用に立つ樣な財を積め、吾邦の一番弱き點即ち財力及び德力を開發する事を日々努めて、何時でも御用があつたなら「吾此所に在り」と時勢の要求、君の御呼出に應ずる丈けの覺悟あるを期し度い、是れが私の信ずる愛國心だ。



現在に於ける海外一切の状勢殊に我國と緊密の關係ある清米獨等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し江湖の參考に供す

職工の見たる米國人（中）

東京府立工藝學校長　今　景彦

私は或る人の紹介に依つてペンシルベニャ大學にアートデパメントの教授ドーソンと云ふ人を尋ねた時に某先生の部屋が分らぬので校内をうろ付いて尋ねて居りました時に、一人の男が大きな包を肩にしてやつて來たから、私は其の人に道を問ふたのである、すると此人が自分と一緒に來いと云ふから、私は其後ろに尾いて行くと、間もなくドーソン先生の部屋でした、さうして私はドーソン先生に面會して、一通りの挨拶を濟ましたらドーソン先生は、今大包を肩にして來た人を指して紹介する樣、此方は

アートデパートメントの科長

ですと私は今の今まで御用商人か何かとのみ思ふて居た其人が私の尋ねたアートデパートメントの科長だと云ふことを聞いて、實は驚いたのである。その大包といふは、丁度其時其室の中間に黒幕を張るべき必要があり、それを科長先生が途中から購入し、自分で之を擔いで學校に持つて來たのであつたと、後で私は知ることが出來たので二度の驚ろきをしたのである、總てが此やうに彼の國民は學生と云はず、學校長と云はず、大學教授と云はず、勞働的であると云ふことは、日本人の眼から見ると不思議のやうに思はれるのであるが、米國人は斯樣に勞働を眞に愛する思想を有して働いて居るのである、羨望の至りではあるまいか、是れ私が亞米利加人を偉大なる職工と云ふ理由の一つである、第二には

米國人は腕自慢である

彼の國民の自負する所は深遠なる學理の研究ではな

く唯實用である、彼の國民の標榜して居る所のものは考へるてはなく成すてある、理屈てはなく腕てある、而して彼は其腕に於ては常に世界一を以て任じて居る私の多く見た所の方面は工場及び工業に屬する學校でありますが、其到る所に於て私は世界一なる語を聞かされたのてあります、ボールドウィンの工場に往けば其て支配人はロコモテーブの多くの數を製作する者に於て、我が社會は世界一てあると自慢をする、ブラウンシャープの工場に往けば精良の機械製作に於て我が社は世界一てあると誇る、ブラットホイトニーの工場に往けば英國の機械は機械に非ずと嘲つて居る、ウォルサムの時計工場に往けば、廉にして且つ良好なる時計を最も多く世間に供給する點に於て、我が社は世界一てあると號して居る、ピッツバーグに往けば、製鐵に於ては世界一てあると號して居る、プルマンカーの工場に往けば客車の製造に於ては我が社が世界一てあると稱して居る、斯くして是等の諸工場は徒らに世界一なる言葉を弄するにはあらて、確にそれ〳〵皆世界一たるの自信を有して居る、否な啻に其自信を有して居るのみならず、事實に於て世界一たるものが少なくない、此腕自慢は獨り是等の工場内に認むるばかりてなく米國到る所に之を見出すのてある、彼の大建築、大鐵橋、地下鐵道、電氣の應用等、皆悉く腕自慢の表彰物てある、シカゴの博覽會、聖路易の博覽會も皆是れ彼の腕自慢を示す爲の芝居に過ぎなかつたのてある、日本の職工が小さき腕自慢をするのに比べ見れば其遺口の宏大なるに驚ろかなければならぬ、而して此腕自慢、否腕自慢を爲し得るだけの資格を有すると云ふことは米國民に取つては極めて必要の事と看做され居るかの疑ひがある、何故なれば現に人を教育する各學校が此腕自慢を爲し能ふ資格を生徒に與へむとして努めつゝあるからてある、

ウースターの工業學校

は自から號して、實用的の教育を爲す爲に、學校に工場を設けたのは自分が元祖てあると同時に、實用的教育を施す上に於ては米國一てあると明言して居る、私が此學校を見た時に、此學校と全然教育の主義を異にし而も相互ひに鎬を削つて居るマサチユーセット工業學校に對する批評を同校長に求めた所が、校長は襟を正しうして言ふには、彼れマサチユーセット工業學校は、我輩の信ずる事を信じ能はぬものてあると云ひ

放つた、又私は此學校の實習の敎授細目を貰はむとして校長に依賴した時に、校長の答へが面白い、曰く我が校の敎授事項は日に〳〵新たなるものであるから、彼れマサチユーセット工業學校及び其他の學校の如く印刷された一定の敎授細目を有つて居るやうな愚なことをして居るものではないと、之を聞いた私はウースター工業學校の自信力の强大なるに驚いたのである、殊に日本のやうな形式法規慣例等に依つて動いて居る敎育者の頭腦から見ると非常に突飛な學校であると感じられるのである、然るに之に反して前申した

マサチユーセット工業學校

に往つて見ると、其敎育の意見は全然ウスター工業學校と反對である、而して又彼は曰く、我々の信ずる處は彼れウースター工業學校の信じ能はぬ處であると冷笑して居る、さうして同校の敎授細目の如きものは實に整然として一糸紊れずと云ふまでに、硏究されたものだ、私は二十弗を拂つて同校一切の實習敎授細目を購入して來た次第であるが、斯樣に敎育の主義形式の相異なる二つの學校ではあれど、茲に注意せねばならぬ點は、此二つの學校は何れも皆亞米利加の工業界に取つて非常に有用な人物を養成しつゝあると云ふ一事である、其卒業生が實際界に歡迎さるゝ有樣は共に同一である、之に依りて見ると同校の腕自慢は共に皆價のある腕自慢である、斯る腕自慢は米國の何れの學校にも認められる、小學より大學に至るまで之を認むるのである、是が實に米國の敎育の非常に活氣を有つて進步しつゝある所以で、又腕自慢を爲し得る國民を造りつゝある原因と思はれる、此點に於ては日本の多數の敎育者の如くに、徒らに議論のみ多くして實行の伴はざる、或は理屈を捏廻して工夫倒れになるが如き或は多くの學說に溺れて一の實行的自信力なきが如き或は法令規則に拘泥して千篇一律の形式敎育を爲すが如きに比し其敎化の著大なる所以を知ることが出來る

私は

一人の老熟なる職工

を知つて居りますが、彼が或る物を造らむとして之を考案するには、常に夜間に於てするのである、而して翌日一旦其製作に着手すれば他人が如何に其考案に對して批評するも少しも顧る事はない、さうして、出來上りを見て下さいといふ、さあ完成したとなると彼は

之を人に示して、是は如何でありますと、言ふ、見る人其作品の精良なるに感歎せざるものはないのであります、此良職工の言へる「出來上りを見て下さい」の一語の中には如何に自信力が籠つて居るか、又其完成の後に「是は如何であります」と云ふ其一語の中には如何に彼の腕自慢が籠つて居るか、私の言ふ米國民の腕自慢とは即ち此意味に於ける腕自慢である、何人も事を爲さむとするには此氣慨が望ましいのであります

米國民は日給取り主義

である、宵越しの金を使はぬ、彼の國民は勞働を愛する故によく働く、さうして勞銀は之に伴ふて來るものだと云ふ確信から働いて居る、其日〱に己れの仕事の爲にベストを盡すならば、勞銀は益々多かるべきことを信じて居る、彼は從來二日で爲し得た仕事を若しも一日で爲し得たならば、其日給の倍となることを信じて居る、一時間に二つ造つたものを六つ造ることが出來たならば三倍の賃銀を得られることをも信じて居る、良きことをすれば良き報酬を受けらるべきことを信じて居る、勉强すれば試驗に及第し得る事を信じて居る、多くの人の爲に働けば代議士になり得ることも信じて居る、一國の爲に働らくならば大統領にもなり得ることを信じて居る、故に彼れ米國民は如何にして金を得べきか、如何にして試驗に及第し得べきか如何にして代議士となり得べきか、如何にして大領統となり得べきかと云ふが如き、賭博的のことは、彼れ國民の爲し得ざる所である、即ち働けば報酬は必ず來るべきもの、必ず取るべきものと信じて居る、人或は米國人を拜金主義と云ふが是は誤解であると思はれる、何となれば前に述べた如く彼は拜勞働主義である、彼れ米國人の氣質は我邦に於ける職工氣質のやうに又江戸ッ子のやうに宵越しの金を使はぬと云ふ麗はしき氣性を有つて居る、しかし其宵越しの金と云ふは、江戸っ兒の宵越しの金の如くに今日取つた金を今日の中に使ひ果して仕舞ふを云ふてなく、彼は一生の間に取つた金を一生の間に使ひ果して仕舞ふと云ふのであるから宵越しの金を使はぬと云ふ其考へに至つては江戸っ兒と同一であるが、唯米國人のは宵の時間が長いのである、元來今日取つた金を今日使ひ盡し得ると云ふことは、明日新たに金を取り得ると云ふことを意味して居るものであるからして、亞米利加人が其の一生の間に取つた金を己れが一生の間に使ひ盡して仕舞ふと云ふ

ことは、己れの子孫が獨立自活を爲し得ると云ふ事を意味してをるのだ

カーネギー

は申すまでもなく、彼が一生の間に取つた金を彼の一生の間に最も有効に使用せむ爲め、其使用法に付いて世界に向つて懸賞問題を出したと云ふ位だ、其結果としてピッツバーグに於ける彼の工業學校、圖書館、博物館何れも巨大の金を支出しつゝある有樣は實に壯觀と云はねばならぬ、其他カーネギーの圖書館なるものは亞米利の各地に認められるのである、獨りカーネギーに止らず、彼の國民が大學其他各種の學校に對し盛んに寄附金を投ずるが如きは、コーネル大學、コロンビヤ大學其他の各大學に於ける建築物の總てが、それぞれ富豪の寄附に依つて成立ち居るは申すまでもなく一婦人の資産を抛つて女學校を造り、或は一世の心血を注いで集め得た美術品を死に臨みて擧げて之を大學等に寄附しそのために出來た美術館などのあるに依つて能く知れることである、之れが私の米國人を指して背越の金を遣はぬ國民であると云ふた所以であります

詩人コッペ

河合門外漢

プルュドム逝きて未だ半歳と經たぬ。佛國文壇は、又去る五月を以て、當代唯一の人氣詩人として知られたフランソワ、コッペを失つた。

十九世紀の後半に前古未曾有の隆盛を極めた佛國文界は近年名家が漸次に凋落して、加ふるに作家は今や各自の好む處に從つて別々に向つて居るので、當年の氣運はなく、稍々停滯といふ狀態で居る。けれども劇界には尙近代の名家たるロスタンヤサルヅウがあり、又數年前に「決闘」の一篇に一飛躍を試みたラヴダンもあつて、皆當時世界第一流の作劇家たるに耻ぢない。其他ブリユー、エルヴヰユもある。併し詩界に於てはメーテルリンク、モレアス、ローデンハッフ、ヴエルヘーレンあるけれども、多數は寧ろ「コスモポリタン」詩人で、當代の大家として特筆すべき有望の詩人はエレジアの女婿レニエ丶あるのみである。此時に當つて斯界の重鎭コッペを失つたのは更に一層の寂寥を增す感がする。

フランソワ、コッペは千八百四十二年に巴里に生れ

た、幼少の時に巴里の中流以下の社會を見たのは、後年彼が其獨特の長技を示すに大に利益を與へたと見へる。始めはバルナシア派に屬し、最もルコント、ド、リールに私淑して居つて、一千八百六十六年に出した其處女作「ル、リリケール」は實に、ド、リールに献じてある。處女作以後に於ける氏の著は非常に多數のもので詩に於て五十近く、劇詩が十六程、散文の著作も亦十六程ある。其詩集、詩の最も人口に膾炙して居るのは「アンチミチ」(千八百六十年)「ラ、グレーヴ。デ、フォジュロン」(千八百六十九年)「レ、ザムブル」(千八百七十二年)「プロナード、エ、アンテリュール」(千八百七十二年)「ポエジー」(千八百七十九年)「コント、アン、ヴュール」(千八百八十一——七年)等である。劇詩に筆を染めたのは「ル、パッサン」(千八百六十九年)が初度で、之にはサラ、ベルナール孃が出て、彼の名が世間に知られ出したのも此作からである。其他の劇では「ルュチエ、ド、クレモーン」(千八百七十六年)「セヴロ、トレエイ」(千八百八十三年)「ジャコビート」(千八百八十五年)「プール、ラ、クーロンヌ」(日本譯王冠)(千八百九十五年)等が名あるもの。其小說中の傑作は千八百九十六年に出た「ラ、ボンヌ、スーフランス」である。

コッペが學士會々員に撰擧せられたのは千八百八十四年で、其後も余輩の記憶によると此千九百年頃まで筆を絕たなかつたが、彼の傑作は皆中年以後に多い樣である。

彼は詩人たると同時に、作劇家としても盛名を博した。特に其劇詩中の一部は彼の最大傑作と稱されて居る。けれども、彼の劇は皆十九世紀中葉より盛んになつた對話の法によらず、傳來の習慣に從つて韻文である。之を見ると、彼は作劇家でなく、詩人として論ずるが適當である。最も同じ作家のロスタン抔も其流儀で、特に名作「シラノ、ド、ベルジュラック」の如きはシラノ時代の言葉、シラノの文體、言語を其儘に見るやうに韻文で書いてあるが、彼は純然たる作劇家である余輩がコッペを詩人といふのは、其立脚地が詩人で、其劇も敍情劇(リリカル)であるからである。

コッペは詩人として非常の評判を博した。其人氣(ポピユラリテ)の大なる事ユーゴーに次ぐ有樣で、特に晩年幾多の老大家が漸次に逝つた後は、當代第一とまで稱せられて居つた。此點に於ては今のサルヅウ抔も及ばぬ處、彼の作が此の如く好評なるは種々原因あるだらうが、左の事實は特に著しく見えるもの、

一、彼の作は其材も性質も極めて平凡な普通なものて一種特別の部類をなして居る事、

二、此材を詩化するに驚くべき才能を有して居る事、

若一、取材によつて詩の優劣が定まるものとすればコッペは最も平凡な詩人である。ユーゴーの壯大、ルコンド、ド、リールの深邃、プリュドンムの哲學のやうなものは彼の作には少しもない、又ミュッセの熱情、詩想、ヴヰニーの深い空想もない。

けれどもコッペには他の企て及ばない獨特の妙枝がある。彼はパルナシアン派に屬するけれど、別に技工的に走らず、寫實、敍事、哀調、比喩、諷刺、自由自在に出て來て、何の苦痛、困難の跡をも示さず、詩調に於ける他人の難點とする處を、彼は却て容易になし得るとの風がある。又言葉で表示の出來ぬ感情は彼は其獨特の韻の活用、變化で示して、言語以外の意味を與へ、其趣向と詩脚の進行が相待て自然に音樂の調を整へて順次に佳境に入る樣になつて居る。

此長技ある彼は其材料を他と全く異つた方面から採つた。丁度ルコント、ド、リールが佛教、東洋の事を材にした樣に、彼は下級社會、小兒、勞働者、職工、書工、下級官吏、小商人、田舍人、言はゞ此方面の總てを見、大なる野心、慾望もない人々の事を書いたもの、一家團欒の間に爐を圍んで樂むといふ風のものである。で彼の優美に平穩の感情と同情、詩想は是等の瑣細な事を美化したから其感動力が讀者一般の容易に及んで愛好する處となつたので、此長技のない幾多の詩人が彼を眞似て失敗したのも此故彼の作にラマルチンの「湖(ルラック)」又はユーゴーの作に往々見るやうな感情が到底見出されぬのも亦此故である。

コッペの特長として尙一つ其作に著しく顯はれて居るのは、短篇小說家に必要な、小話の敍事に巧みな事て、之も特に平凡人に關する短話を語るにある。例を擧げて見れば、「レ、ザムブル」の中でも佳篇と目せらるゝ「子」又は「小乾物屋」である。「子」は一人の婦人が其情夫の死後に生れた兒を携へて巴里に來て貧窮の生活をなしながら、兒を學校にやる、其兒は學校でも俊才の如き成績で居つたのが、一日病床の母に其社會上の位地、出產の事抔を明されて、遂に平凡の人となり、唯生活の爲めに位地を得ん事を望むやうになり、小音樂者となつて一生下宿屋で獨身で貧乏に暮らすといふ事。で何の奇も趣向もない。又「乾物屋」は田舍の小乾

物屋が兒を欲しがるけれども、妻は之を厭つて、其間に齢は經る、兒は生れず、名譽心もなければ、希望もなく、近隣の小供等が駄菓子を買ひに來ると、代價も取らずに呉れてやるので隣人等は狂人だと言ふも、自分は喜んで居るといふ話である。

　唯之れ丈の話、詩としては隨分疑問の材料が彼の筆にかゝると――やゝ心理的解剖を缺くけれども――ミーターもあり、綾もある一種輕妙な詩となるのである。彼が近代稀に見るの寫實詩人と言はれるのも此種の材料を精撰した結果であらう。

　要するにコッペが詩人として驚くべき好評を以て一般愛讀者の歡迎を受けたのも前述の長技が各調和して發揮されたからで、之に彼の穩和な人生觀と多大の同情が充ちて居つたからである。雄大な想像力、創作力はなかつたけれど、豐富な敍事的詩想があつて、他の開かぬ方面に一路を開いて進み、人を魔する筆力を示したからである。

列國近事一班

如楓庵

●墺獨兩帝の會見　墺帝フランシス、ジョセフ陛下の治世六十年祭は五月七日を以て維府に開かれたり、獨帝は遙に伯林より來り會して親しく墺帝陛下の健康を祝したりしが、墺帝は之をメルドリングの停車場まで出迎ひ、維府の宮殿に先導せさせ給ひたり、墺帝は自國固有の正服を召させられ、獨帝は軍服嚴かめしき出立にて、並に久し振りの握手をなさせ給ひたりし事なれば維府市民の歡迎は、改めて言ふも愚かなる事なるが、タイムス通信員は之を以て獨帝が獨逸を盟主とする排露西亞中央三列國の結合を再び新にせんとするにある事は信ずるに難からずとなせり、之れ或は然らんも、維府に於ける獨逸味方の新聞紙は之れ實は墺帝が其帝位繼承者の撰定に就いて獨帝の意見を聞かんが爲めなりとも云ふ、墺國臣民の大部分は獨逸人族にして、スラヴ族は之に比して格別の勢力を有するにあらざれば、果して帝位繼承者が問題となりたりとせば、フランシス、ファーヂナンド大公の如きは最も有數の候補者として兩帝の話頭に上りし事なるべしと云ふ

●印度青年と革命學校　印度の近情は最も危機に瀕しつゝあり、年々開催せらるべき印度國民大會の有志及び其他教育あり位地を有する印度人等の頻りに印度人の自治權及び排英心の煽動に努めつゝあるに、一方に於て、英本國の施政上の酷迫は、依然として改まらざるより之に對する怨嗟の聲は、ペンシャーブ東ベンガル地方を中心として廣く各地方に起るに至り、印度事務大臣は更に嚴重なる手加減を施して、彼

等の諸集會を禁壓する事となりしが、カルカッタ市の英國警吏は、正に露國大學騷動の飛火とも云ふべき、印度の各階級を通じて最も有力なる味方を有する徒黨の一大陰謀を暴露したり、即ち革命黨の志士等極て秘密に一大學を建て、此處に決死の青年を收容して、印度自治に關する必要なる智識、及び爆裂火薬の製造、其使用法を敎へ、全印度を通じて各郡に二名づゝの卒業生を配布し、時機の到るを見、一擧して印度を印度人の手に奪ひ返さんとする、最も大袈裟なる陰謀なりしが、此程カルカッタに於ける一夕の集會に於て、端なく、英國警吏の觀破する處となり去る九日主なる同志三十二人縛に就きたり、彼等は貯藏せる火薬を出し、少しも臆する色なく其實を答へて、是れ實に血あり淚ある印度人の正に爲すべからざる最良最善の企謀なりと絶叫せりと云ふ

●英國政府と印度國境騷動　五月早々英國はモーマンド族及び阿富汗人の印度侵入の報を得て仰天せり、一萬三千の阿富汗人國境を超えて、印度に侵入せりとの報、一度倫敦に傳へらるゝやコンソル公債大崩落をなし、市況頗る不穩の傾きあり、ウエコック將軍が直に守備大隊を率ゐてペシャワーに向ひ、彼等を擊退せるも阿富汗王は是等暴民の侵入に對し、何等介意する處なく、冷然として袖手傍觀し居るば、英露協約と何等かの關係あるにあらずやと不審を起す者あるに至り、議會は之を以て政府の辯明を要求せり、英政府は之に關し阿富汗王イミールに抗議を申込みたるに、イミールは漸く英領印度に侵入せる阿富汗人に速に引還すべきを命じ、地方官憲に向ても、彼等を制止すべき命令書を發したり、英政府は英露協約は決して阿富汗王の感情を害はず、別に何等の重大なる政治的意味を有するにあらずと、議會に於て明言せるも、其眞相なりとて「スペクテーター」の言ふ處に依れば英露協約に對する不滿もあり又今一ッの原因は、最も英國嫌ひなる王弟の差圖にもよるなりと云へば、印度の國境騷動は當今益々頻繁となるに至るべしと云ふ

●露國の新亞細亞經營　露國は鐵道外債三十億留を有し、年々一億三千万留の利子を拂ひつゝ、一方に於ては三億の缺陷を塡補しつゝあるにも拘はらず、今日又再び黑龍江鐵道延長二千〇四十二露里の敷設案を立て、本年の議會に提出する事となり、四月十四日一〇一に對する二一二の大多數を以て國民議會をも通過せしが、五月二十六日の上院委員會に於て贊否兩派の大論議を紛起せしめたり、露國政府の意向は之を四ヶ年に然かも絶對に外人の力を藉らず主として露國人の勞役に俟ちて之を完成せしむる事、若し之にて不足を感ずる時は、一は警備の一端ともなるを以て、工兵大隊を派遣すべしとの事になりしが、委員會にては、反對側より最も有力なる駁擊を被り、遂に藏相の出馬を見るに至りたり、藏相は「黑龍江鐵道敷設費及び西比利亞線復軌工事は平時に於て最も必要なる露國の身構ひなり」と論じ「其費用としては四億弗の公債を發行して、半は內國より半は外國より募るべし」と云ひ「過去兩三年來露國の財政は固より困難なる位地にありしも、敢て不確實なるものにあらず、議會が政府の新事實案に無意味の干涉をなさゞる限り、政府の歲入は悲觀すべきものにあらず」と說明せしが、ウエッテ伯は反對側を代表して「鐵道敷設は露國の財政に堪ゆべからざる重荷なり、敷設費としては過小に計上するも、少なくとも、五億留を要すべく、然かも露國の勞働者のみを以てしては、四ヶ年內に完成せんとの說は、到底不可能の事に屬す、黑龍江一帶の地が露國の手を離れて、日淸人の手に歸したる今日材料の供給等も勢ひ外國商人の手より仰がざるべからず、所詮徒に國費を以て生活する無能の官公吏を養ふに過ぎず、國民はそれ以外に何等得る處もなかるべし云々」と頗る痛切に論ぜしが、結局修正說出て今は其一部の敷設に止め、他は機を見て、之を決定する事となり、十四に

對する二十七の大多數を以て可決確定せり、黒龍江鐵道敷設案は、決して今日に始まりしにあらず、現帝ニコラス二世が一八九一年皇太子として、東洋を漫遊せられし際、定められし豫定線にして、其後幾度かの實地踏査を經し後遂に漸く案となりて、本年の議場に現はるゝに至りし者にして、謂はゞ露國の例の新亞細亞經營とも見るべきものなりと云ふ

●獨逸と米國仲裁條約の否認　日本も他國に倣ひ遂に米國と仲裁條約を締結し、續いて特許商標版權同盟條約なる者を締結し、過般來の外電に見ゆる如く、高平公使との間に調印濟みとなりたりとの事なるが、近着「モーニング、ポスト」華盛頓通信は驚くべき報知を傳へたり曰く「獨逸政府は米國が他列國と結びたるが如き仲裁條約を米國と締結する事を拒絶したり」と、獨逸は米國に接近して、なるべく親善なる關係を持續せんとしつゝあるだけに、此報知は極めて著しき者ならずんばあらず、之れ獨逸が主義に於て仲裁裁判に反對なるを意味する者にして、吾人は遺憾ながら獨逸の眞意が此處にある事を信ぜんと欲す「スペクテーター」は之を見て、吾人は英獨の關係が益々良好ならん事を希望するも、一度何等かの國際問題起るに際せば、唯一無二の仲裁々判として、海軍力に訴へざるべからざる覺悟あるを要す」と、斷言せり、

●米國と國富保護會議　米國大統領ロ氏は下院の反對を恐れず、斷然天然の國富保護に決し、廣く全米國の各州知事各地方官を白宮殿上に會して、其方法を議せしめたり、森林、水利等の自然の利益及び便宜等を一私人の專有濫用に歸せしむるは、之れ實に國富を枯渇するものなし、大統領は之を防遏せんが爲め、現在より遙に大なる權利を下院に要求すべしと云ひ、下院の激烈なる反對に出遭ふべきも之れ國家の利益にして之を爲すは愛國の義務なれば、諸君も奮て政府の意に背かざらんことを期せられたしと述べたり

●露國新任駐日大使と批難　去る三日元老院議官マレウスキー、マレウッチ氏駐日露國大使に新任せられたりとの報ありしが、氏に對する批難の頗る興味ある者あり、アレキシーフ以下極東に關係を有する者は、悉く氏を以て極東に無知なる最も不適當の人物にして、日露漁業條約を締結せし外何等外交上の經驗を有せざる者として氏の赴任を危みたりしが、更に最も皮肉なる攻擊は氏が波蘭人なりとの事なり由來露國の官僚政府は官公職共に多くは露人の手にあらずして其大部分は獨逸人族の手に歸し殊に露人と稱せらるゝ者の中には波蘭人なる獅子身中の虫とも云ふべき者ありて常に他より忌憚せらる、近着の「ノーヴエヴレミヤ」は露國が內治外交共に振はざるは露國內外の官吏軍人等が全く是等外人出身者なるが故にして彼等が露國の利益に冷淡なるが故なり、日露戰爭の大敗の如き全く純露人にあらざる波蘭人獨逸人族が多數入り込みて之に携はりたるが故なりと論じたりしが、マレウッチ新任大使に取りては隨分手痛き攻擊と云ふべし

●白耳義議會とコンゴー自由國合併問題　此程ブラッセルの議會にては社會黨の首領ヴアンダルヴエー氏頗る慷慨悲壯の長廣舌を振つて非合併派の氣焰を高めたり彼は其政友の何人とも全然其見地を異にし如何なる條件如何なる利害を問はずコンゴー自由國の合併は不可なりと主張するにありコンゴー自由國を白耳義の主權の下に合併するは徒に白耳義の財政を紊亂せしめ諸般の改革を益々困難ならしむるのみならず、之れ實に人道に背くものなり。若し之を斷行するに於ては白耳義國王陛下は奈翁の如く英國議會より人道の敵なりとの決議を受くるの時來るべしと痛論せしが、此議論は頗る議場を動かしたり由來コンゴー自由國合併問題は目下最も興味ある、最も困難なる國際問題の一にして、白耳義の議會は之が爲に紛糾して底止する處を知らず、贊成側の意見と

ては要するに取るべき時に取らざれば容易に尺寸の土地も得べきにあらず此際コンゴー自由國の合併は白耳義の國是としては最も急務とせざるべからずと云ふにあり今や社會黨の勢力は中々に加はり來りて動もすれば政府側を凌駕せんとする程なるを以て其勝利の歸する處何れにあるべきや未だ遽に斷じ難し五月二十六日附の倫敦通信に依れば過般議會半數改選の結果社會黨は新に五名を加へ多數黨たる舊敎派は四名を失ひたるより白耳義議會の色別をすれば總員數百六十六人中舊敎派八十七、自由黨四十二、社會黨三十六、及び基督敎派一名にして、舊敎派と社會黨派との勢力の消長は直に該問題の成否に關係すべき者たるなり要するに該問題の前途は頗る多事多難なりと云ふべく政府黨が飽迄も多數を制し、一方に於て英國が之れに不滿を抱く事なしとするも、白耳義政府が之を直轄すべきか、議會が之を監督すべきか、又皇室御料との關係は如何之のみは既決の問題なりと雖も猶ほ種々の不平暗鬪ありて來る意外の邊に及さんとするものの如くなれば該問題の解決は容易ならずと云ふべし

●西班牙に於ける無政府黨員の巢窟　先年アルホンソ二世の御慶事の際、親しく之を拜觀せし者、今日湧くが如き市民の喜悅が、彼を弔ふ涙の聲と變ずるも遠きにあらざるべしとて、西班牙に於ける無政府黨員の頗る恐るべき者なる事を豫言せし者ありしが、近來葡王の暗殺以後西班牙政府は大に此方面に意を注ぐに至りたり、同國に於ける無政府黨員の巢窟とも云ふべき地二ヶ所あり、一はグラナダにして他はカタロニアなり、兩者共に全然其性質を異にす、アンダルシアの無政府黨員は最も危期に在る者にして激動し易きも、カタストロニアの黨員は稍溫和にして理性的なり、前者に比して教育もあり、能く組織も整ひ居り首府マドリッドに於ける革命志士は概れ此のカタスロニア人なりとす。之れ該地方は西班牙國中最も高燥なる處に位し、且つ外國に接するが故に人智も他地方より發達し、政府の壓制を感ずる事甚だ大なる者あるを以てなり、無政府黨員の首領をロレンゾーと呼び、今年六十有二に達したる偉大夫たり其半生は獄中にあり半生は巴里に流されて殆ど無爲に終りしが其意氣猶未だ衰へず自費を以て多くの家屋を建て之を貧民に與へ學校を設立して其兒童を教育しつゝあり



現代人物評論(六)

小杉天外論

△小杉君の作物

田山花袋

○今日(五月二十一日)の「讀賣新聞」に小栗君が小杉君を評して居るが、其一節に「氏の長所は事實あつた樣に自然に運んで行く樣に見せる處にある」と書いてあるが、之れは確かに當つた批評であらうと思ふ。然し僕の最も小杉君に慊らざる所は、此自然らしく、事實らしく見せるといふ事――實際と違ひ又は實際になかつた事をあつたらしく見せるといふ事である。或實際の事から選擇を加へて、都合のよい處を拔き來て、一篇を組立てる。組立てはよく出來ても餘り脚色があり過ぎて却て生氣ないやうに思ふ。此やり方は獨逸の自然派の勃興以前の作家、ハイゼなどに酷似して居る。面白く、巧みに組立てゝあるが實際と照らし合はして見れば造つた所、削つた所、足した所が多いやうに思ふ。日本では柳浪君なども矢張り同じ行き方と思ふ。

○背景とか周圍の事情とかを寫す技量に於ては小杉君は餘程進んで居るやうに思ふ。又會話なども確かに旨い。然し人物の書き方に至てはどうも一面的で、深く全體を描いて居ないやうに思ふ。例へば小杉君の書く青年は如何にも青年らしい青年で、老人は如何にも老人らしい老人である。「コブシ」の主人公も誠に青年らしい青年である。然し實際を見ると、大人でも小兒らしい事をする事があり、又小兒でも大人らしい事をする事もある。だから生きた眞實の人間を書かうとするには只一面ばかりては足らないと思ふ。「コブシ」の豪農などは徹頭徹尾豪農らしく書いてあるが、豪農をよく觀察したら、實際あれとは甚だ違つた生活をして居るだらうと思ふ。所詮選擇主義では生きた實際のも

のを書き得まいと思ふ。

○小杉君の藝術は一口にいふと外面藝術といへるだらうが、藝術としては內面藝術よりは或は進んだものか知らんといふ疑問もある。內面藝術て行くと、どうしても自分の影が知らず識らず入つて來る。僕の「一兵卒」なてもそれだ。て近來は外面藝術の方が進步した行き方てないかとも思つて居る。が然しこれは只疑問として居るのみてある。

○小杉君の寫實主義はゾラなどとは大變違ふやうてある。ゾラの主義は主義としては兎に角見た儘を書くのだと宣言して居るが、小杉君のは實らしく寫すといふ事を寫實主義といふて居る樣だ。

○議論といふものは一寸聞くと大變違ふやうに見ゆるものても詮じ詰めて見ると、多くは極めて些細な微妙な差異になつて了ふものてある。然し此些細な微妙な差異が作物にあらはるゝ時になれば大變な相違になつて來ると思ふ。何時か小杉君と實際と自然といふ議論をした事があつたが、これが實際か自然かと一々事實に當つて見たら二者の相違は定めて少しであらうが、心の行き方の少しの差違は作物となつては餘程違ふものが出來やうと思ふ。後藤君の如きは何時も一にあらざらば二といふやうな談論をせらるゝが、あゝいふ風にかゝられては實に弱はる。議論の差は少しだが其結果の違ひが甚だ大なることを見なければならぬ。

○小杉君の作物では「初姿」だとか「はやり唄」などいふ初めから單行本として出したものに却てよいものがあるやうに思ふ。小說家としていつたら小杉君の方が或は小栗君よりもエライかも知れぬ。尤も小栗君は文章が大變旨いのに加へて、時として赤裸々の自己を描き出す所があつて、實に非常によい事があるが、小杉君には此赤裸々の人間を描くといふやうな事はない。大底皆こしらへた人物であつて、此點は遙かに小栗君に劣るかと思ふ、別に纏まつて考へて居る事もないから、こんな切れ〳〵なお話で御免を蒙る事にする。

△未だ會はぬ人なり

青果生

○小杉天外氏は秋田の人、秋田は奥州でも田舎なり。仙臺者の僕だつて小説家になれぬ筈は無いと、醫學校時代の僕は能くそんな事を考へて自ら慰め勵まして居た。その頃の文壇、特に小説は都人士、準都人士獨占の姿にて、田舎者と云へば極端に排斥されたものだ。「東京語もロクに書けぬ癖に。」など云ふ批評は好く聞いて居た。

○天外氏の寫眞を見ると、直ぐ掬汀氏、橘香氏を想ふ。又、銀月氏有美氏の寫眞には、即ちに宙外氏金風氏の寫眞を想ふ。蓋し秋田人の二系統を代表する型の顔立なればなり。同縣出身の舊友、舊知己、大底はこの二つのタイプの何れかに屬して居る。

○天外氏には未だ一度も遇ふた事がない。三四度その機會に接しながら、不思議と何か故障が出來て、その意を遂げないのだ。この二三日前も國木田收二君と共に、わざ／＼小田原まで訪ねて會ふ事を得なかつた。

○天外氏の肺病は地震で癒つたと聞いた。本當か何うかは知らぬ。

○親友草野柴二は天外氏の愛讀者であつた。鑑賞力に乏しかつた僕はこの人に勵まされ勸められて初めて『ひだり繩』を讀んだ。十年以上も前の事だ。その頃の僕は小波氏の『友禪ぞめ』以上の傑作は天下に無きものと、正直信じて居た。

○僕は誰かに天外氏は剛岸濶歩の人と聞いて居た。嘗て早稲田文學に破戒を評せる談片に見て益々その然かるを信じて居た。後ち白鳥氏に、正直な親切な人と敎へられた。然し何方かと云ふと、僕は正直な親切な天外氏よりも剛岸尊大なる天外氏を見たいと願つて居る。

○天外氏は慥かに日本文壇に一線劃を劃した人である。寡くとも初めてゾライズムを唱導した人である。僕は先輩なしとする今の文壇を喜ばない、無論別問題

である。

○コブシの馬のくだりは今に忘れぬ。

○小說家小杉天外氏の外に、紳士小杉爲蔵氏あるを忘る可らず。僕はその點に於ても天外氏を尊敬する。

○天外は文章の舊るき型を破りて、新しき型をつくつた人である。風葉先生も青春執筆當時、天外君は文章家であると、熟々感服して居た。

○天外氏を云へば必らず風葉先生を云ふ。天外と風葉、まるで競馬々のやうに取組ませるは惡るい事だ。爲方が無い事としても惡るい事だ。

○天外氏の筆跡を見ると。僕は舊友白鳥某君を想ふソックリその儘である。今は布哇の領事館に居るさうだ。

○僕はこの以上に天外氏を知らぬ。折角のお尋ねゆゑこれだけ申上げる也。（六月十九日、相州茅ヶ崎館にて）

△小杉天外氏

德田秋江

先達ての『讀賣新聞』（六月十四日）日曜談叢に斯ういふことが書いてあつた。

二葉亭氏の送別會席上で小杉天外氏は坪內博士に向ひ「私は全力を小說に注いでゐますが、世間が皆文學の爲の文學を卑むやうになつて私一人時代おくれのやうで心細い、文學者が文學を生命としてもいけないんでせうか」と眞摯なる口調で質問してゐた。博士は「無論それで結構です」と答へたやうだ

私もあの席には臨んだが、つい耳にしなかつたけれど正宗君でも傍に居て聞いたのと見える。

天外氏の面目は右の單簡な會話にも躍如として表はれてゐる。氏に此の眞面目と正直と勇氣と。無邪氣（自己の天職に對して）と而して煩悶と反省とあり、氏は尙ほ決して〳〵老いずと言つて可いのである。

此度は氏も随分長く東京に滯在して居らるゝやう

てあるが、氏は其の期間を嘗て一日たりとも徒には過さず、或は先輩知人の門を叩き、或は新傾向を代表する文士と新に交りを訂し、常に氏が特得の熱心なる藝術論を吹掛けて自己の開發と創作の工夫とに思ひを凝らして居られるやうである（居るやうである、と書いても好いけれど、私は人が斯樣に一事に熱中せる態を見ては、覺えず、其の事尊さの念が、湧いて、敬語を使はざるを得ないのである。熱心ほど人をして感發せしむるものはない。）

努力ほど强いものはない。それに就いて天外氏が私に與へた印象を手短に考へて見ませう。

紅葉露伴全盛時代ほど、其れ以外の文壇的勢力を排斥した時代はなかつた。之には必ずしも意識して排斥したのではなかつたらうが、つまり紅葉氏等の勢力がエラかつたのである。が、三十二三年頃氏等の創作が段々稀れになつて來た時分に當つて、天外氏は獨り——全く獨り——殆んど。脇眼もフラずに創作に熱中してゐた。私などは其の時分から天外氏の作は何うも一種の趣味——詳しく言へば面倒だらうが、まあ一口に斯う言つて置かう——に乏しいやうで、餘り乘氣て讀みはしなかつたが、何しろ其の引續いて氏の精力の盛んなるには蔭ながら常に感嘆してゐました。長篇の單行本を追掛け〳〵連發した勢ひといふものは、實に素晴らしいものである。紅露柳等諸氏の作が曉の星影のやうに薄れ行く時代に當つて、天外氏の事業は先づ量に於て一時期紅葉胃病時代の中心點をなしてゐる。此の多量といふことは、當時の氏に誰れしも許す處であつたらうと思ふ。が、さて其の質といふ點に到つては隨分疑問を抱かれてゐた。氏の作風には所謂硯友社風の味がない。それが多くの人の氏に對して感ずる不足で、あつた。が、今日になつて見るとよく長短が分るやうな心地がする、——して見れば私ども矢張り見識が時代の外に出てないのだから——つまり氏の作は氏以前の作に比べて、遙かに文章（技巧）を斥けてゐる。描寫が直截になつてゐる。尤も言ひ表はし方が簡單とは言へぬが、つまり事實に接近したとは言へる。それから

内容即ち創作の對象に關する見方が氏以前に比べて遙かに自然になつて來た。紅葉(露伴は勿論)氏にはあつたやうな道德を無視する傾向をも帶びて來た。描寫が直截になつたのと、內容に對する見方が自然になつて來たとの二つは或る意味に於て氏の作が氏以前の作に比べて下品になつたとも言へば言はれる。之れが今日の自然主義に對しても用ゐらるゝ評語の一つである。

例へば同じく濃艶な事を描いても紅葉氏のは、擽ぐるやうな、面白がらすやうな、德川文學が持つた上品を持ち傳へた。天外氏にはそれがない。尤も茲にも一人柳浪氏といふがあつて、隨分紅葉氏と違つた下品な肉慾をも描いたが、併し柳浪氏のと、天外氏のとを雜つと區別して言へば、柳浪氏のは概して其の下品な肉慾乃至行動をする當事者が、下等社會に多い。天外氏のは必ずしもさうでない。天外氏の人物は多く中等社會以上の人間である。一口に敎育あり道德あり羞耻ある社會に多い。私は此の點に於て旣に不言不語の間に兩者に著しき區別あるを見る。柳浪氏は好んで人間の劣情弱點を描破しながら、それを社會の中上流に發見せずして下流に發見した――或は發見したと思つたのかも知れぬ。天外氏は之れに反して敎育あり道德あるべき筈の社會が必ずしも其の注文通りに行くものでないと見た。柳浪氏は敎化と道德とが上流には大底行はれてゐるものと、まあ信じたものらしい形跡がある。天外氏はドッコイさういふやうに容易く行くものでないと見た。柳浪氏は敎化の力を或る程度まで信じたらしい。天外氏は皮肉に、さうは信じなかつたやうである。此の意味に於て天外氏は兎も角も今日の最新の自然派傾向の作者等は、世上の門外漢が非難するやうに、彼等は決して道德を破壞しやうとするのではない、『或道德の力は乏しいものだなあ』と、寧ろ歎聲を洩らしながら、其の證據を實際に示してゐるのだと辯護しやうと思ふ。

之れを切實に意識して來たのは、今日の新傾向の中に認めるので、天外氏には意識の苦痛といふものが自己の胸には或は感じなかつたかも知れぬ。けれども少

くとも人爲の敎化よりも、人間の本性の勢力の方が强い人間の本性は敎化の力を無視するまでに放縱のものであるといふ事實を半無意識に發見した一人であるとは言へようと思ふ。尤も其の發見した事實の意味を主にした作はない。それが半無意識の故である。氏以後にこそ珍らしくはないが、氏以前の作家にはこれが殆ど絶無と言つて可い。

人間の本性を見るの淺薄と深刻との區別は、氏を標準にして、恰も當時の文壇の一方に榮えた家庭小說—健全小說派の德富蘆花氏中村春雨氏等の作と比較して見ても面白い。それに就いて一寸聯想して、天外氏のエライ點は、氏がそれらの健全派に少しも動かされなかつた自信である。氏は流行を追ふて、自己を二三にする人ではない、少くとも流行を咀嚼し消化し篤と勘考した上でなければ、流行を攝取せぬといふ風がある。自己を動搖させないで、而かも人生に正直な人は何時まで經つても相應に貫徹力のあるものを作り得る。國木田獨步氏などは其の好い實例である。

さて話が頗る多岐に分れたが、此の邊で一つ先へ引總べれば、天外氏は同時共存(今でも同時共存だが、同時共榮の意)の蘆花春雨の道德標榜派諸氏に比べれば勿論、人間の本性を見るに、深刻の度に於ては遙かに優り、之れも少し以前の柳浪氏に比べて、敎化の行はれざる範圍を廣く見た點、換言すれば、習慣道德の力の弱さを知つた點に於て一層近代的に近づいた。も少し遠き以前の紅葉氏に比べては更らに距離が遠くなつてゐる。

私はチヽムサく作物の實例は引證しませぬが、氏の私に與へた印象の概略はこんなもので、皆樣先刻御承知の事實と思ふ。

私は天外氏と同時共榮乃至其の以前の諸作家と比べて見ましたが、其の以後即ち藤村獨步花袋諸氏と比べることは省きませう。

向上と努力の精神に富んだ天外氏を最新自然派の諸家と比べて、私が見ただけの天外氏の將來を占つても好いが、氏は今盛んに煩悶中である。

過般島村抱月が、『二六文藝』に書いた。天外氏がゾラの事實を事實とする作風を去つて、トルストイ一流の事實と自己とを繋がんとする作風に赴かうとする、といふ、氏に取つての新工夫は將來何ういふやうに發展するであらう乎。

私はこれでもう話は止さうと思ふが、最後に一口申したいのは、之れは天外氏にのみ希望するのではない。餘りに上面の舊套の自己の面目を保たうとするのは、決して近代的空氣を呑吐するに便利な方法ではない。近頃花袋氏は特に面目を破らうとする勢ひが見える。『文章世界』(六月號)に出てゐる長谷川二葉亭氏の『予が半生の懺悔』あの態度を加味し來るのが必要ではあるまいかと生意氣ながら、私は信じます。既に天外氏くらゐの程度に自己に對する正直と反省と、及び創作に對する熱心と煩悶とあれば、まだ〳〵其の歩武を進める餘地は十分あらうと思ふ。(六月十八日)

△天外君

雪生

天外君は餘りに評判に傾聽し過ぎる人の樣に思ふ、勿論批評家の惡評をも氣にするが、それよりも讀者の嗜好に投じたか否かに更に多く氣をもむ。それが必しも惡いこととてはない、否々當今の樣に樂屋落流行の文藝界には結構なこととてはあるが、少し氣をもみ過ぎる、的を探りすぎるといふ嫌はあるまいか。魔風戀風は少くも作者の狙つた所へは當つたが、外れ矢の多いことも夥しい。

氏の寫實主義も久しいものだが、それが現今の自然派の樣な無構造、無中心主義ではなくて、矢張りドラマチックな構造のある、大團圓のあるものを書きながら、屢々不必要な長々しい叙景のあるのは感心しない。主要な人物を點出する時には何時も〳〵、その舞臺その背景を綿密に書くのが癖の樣で、說話のムーブメントが屢々中止する、何だか能の前シテが甚だ長いとい

ふ樣な感がある。僕の平生感じてゐる缺點をあげるとからだ。だが、とにかく會話の巧な、敍景の鮮明な點では、當代の第一人であらう。

△小杉天外に就きて

大町桂月

折角の御頼なれど、正直に白狀す、余は小杉天外を論ぜむには、殆んど材料を有し居らざる也。

最近、中央公論に出でたる天外の『校長の二子』は讀みたるならむ。せめて、それに就いてなりとも、何か評論せよとや。實は、それも讀んで居らざる也。

毎號寄贈して居ることとなれば、願くは、一寸讀んで呉れよとや。申譯なし。貸して呉れよとて來るもの多く、今は、手もとにはあらざる也。

さらば、重ねて贈らむとや。さうまで言はるれば、致し方無し。讀み申さむ、讀みて何か書き申さむ。

かくて、われは、『校長の二子』を讀みたり。部分部分には、氣の利きたる會話あり、末梢的にもだゆる分と、戀にもだゆる子と、一燈を共にして旅行するあたり、捉へ所は面白けれど、一種の型に囚へられて、活きて居らず、しんみりと胸にこたへず、今の流行語にて云へば、觸れて居らざる也。同じく相並べる秋聲、青果、花袋、白鳥、風葉の諸作に比べて、成程、自然派の物與は、尤も千萬なりと思ひぬ。青果の『生れざりしならば』、秋聲の『二老婆』、花袋の『祖父母』など、味へば味ふ程、深みありて、痛切也。余は、この方の書きぶりに、興味を感ずる也。文藝の粋は、具體にあり、抽象的の空論に非ず。今もなほ自然派の論爭は盛なれども、論よりは證據、かゝる作物を所謂自然派なるものゝ文學とすれば、自然派の前途は、それ多望なる哉。

聞く、天外は寫實を以て標榜すと。われ迂にして、天外の傑作と稱せらるゝ『魔風戀風』を讀まず、『コーシ』を讀まず。即ち、余は、天外を評論するの資格なきもの也。單に『校長の二子』に就いて云へば、余は、さへ

ばり感服せざる也。思ふに、天外は、長篇に長じて、短篇に短なるか。もしくは、また、この作は、ほんの一時のなぐり書に過ぎざるか。

『反古袋』の出でしは、今より十三四年前、即ち明治二十八九年頃なりけむ。當時、齋藤綠雨の名、既にあらはれて、天外の名、未だあらはれず。この書には、綠雨の短篇一つと天外の短篇三つ四つありたるやうに記憶す。天外は綠雨に對して師弟の關係ありしや、否やを知らず。綠雨に引立てられしならむと想像せられたり、綠雨は先輩にして、天外は後輩也。われに、もとより强を挫き弱を助くるの俠氣は無し。たゞ一種の意地惡き性癖あり。既に文壇に盛名ある者は之を抑へ、名なきものは、其長所を見付出して世にあらはしたしと思ひしこと、今も或は、其痕跡あるべし。反古袋時代に於ける天外は、諷刺家なりき。之を綠雨に比するに、綠雨は諷刺家といふ程の事なく、ほんの皮肉屋也。戯作者氣質を脱せず、眼孔狹小に失す。天外は、やゝ大也。慷慨の志士らしき俤見えたり、少なくとも、綠雨は女性的にして、天外は男性的也。文章は如何にといふに、われは、いたく綠雨の文才に感服し居りたれど、文才をはなれては、大に天外が氣に入りたり。而して天外は未だ名無し。是に於て、大に天外をあげて綠雨をおとしたり。其文を帝國文學に出しけるに、恰も綠雨の寄稿も出で居りしかば、綠雨は『めざまし草』か何かにて、余に對して、いやみを言ひたりしやう也。

當年の諷刺家たる天外が、寫實家となりしは、所謂君子の豹變にや。されど、余は、天外の寫實の底には、やはり諷刺がひそみ居らずやと想像せらる。然り、想像也。いよ〳〵斷定を下さむには、十年間の天外の諸作を讀破せざるべからざることなれば、後日に讓るべし。されど、想像を助くる事實なしとせず、現に『校長の二子』も、冷かにして、溫味なし。今一歩進まば、諷刺小說ともなるべし。又、この頃、文章世界に於ける天外の言の中に、『作家は觀察するには醒めて居らざるべからず、筆を下す際には、醉はざるべからず』の

語あり。この語にも、一理あり。されど、これ今の所謂諷刺家の態度也。こゝに、寫實の如何を詳論するの遑なし。諷刺ならば、醒めて觀察し、醒めて書きて可也。されど、醉うて觀察するにあらずんば眞の寫實は出來るものに非ず。醉ふとは、冷かに見ざる也、同情する也。然かも己れに類するものにのみならず、あらゆるもの、己れに類せざるもの、進んで己れの敵にまでも、ひろく同情してこそ、眞の實がわかるものなれ。醒めて居りては、皮相はわかれど、眞相はわからず。冷かにして溫味なし。形骸はありて、生命は無し。これが寫實小說ならば、寫實小說は、今の新聞の三面と何ぞ擇ばむや。

今の自然派の諸家は、醉うて觀察し、醉うて筆とるやう也。故に溫みあり、生命あり、深みもあり。その代りに狹き也。獨步の作、殊に溫味多し。天外たるもの、醉うて觀察するの趣を解せずば其作は、常に冷かなるべく、眞に人を動かすこと能はざるべし。

△小杉天外論

白雲子

○新らしい傾向を開拓しやうとする努力、一面から云へば一般思想界の進步に遲れまいとする努力。一度自己の執るべき進路を見出すや一意其にのみ一切の熱力を傾倒してまた他を顧みない熱誠眞摯の態度。從つて必ずしも佳作のみを出さないまでも拙惡見るに足らざる程の作を出さないこと。比較的短篇作家の多い時代にあつて多く長篇を作ること。更に一步を進めて其の作物の內容的方面を觀れば、多く長篇を作るが故に全體の構想脚色の上に、他の企及すべからざる長所を有すること。從つて兎に角讀者に面白く讀ませること其の構想脚色を活すために、描寫會話の上に云ふべからざる妙所を具へて居ること

○天外の長所とも云ふべき點を、强ひて數へ立てれば、大概前に云つた位のものであらう。此の位のことは、多少名のある乃至は見込のある作家の備ふる長所

だ、別に業々しく數へ立てるがものは無いと云へば其迄だ。其の短所は後に擧げる。

○三十三四五年頃は、我文壇の非常に活動した時代、進歩した時代であつた。柳浪其の他硯友社連に獨占せられて居た文壇が、所謂當時の新進作家の新らしき努力によつて、更新せられた時代であつた。「無花果」や「不如歸」や所謂光明小說、換言すれば一般思想界の發醒につれて、作家の抱く理想乃至思想の上に根本的の變化を來し、引いて其の新思想が作物の上に顯はれた時代であつた。

○而して天外は、以前の「改良若殿」時代、故綠雨の感化を脫して、新たに彼の所謂寫實主義を標榜して、「初姿」「はやり歌」其の他を公にし、一般文壇の飛躍に遲れまいと志した。而して見事に成功した。爾來今日に至るまで彼は其の主義によつて幾多の述作を公にしたが、公平に云つた處で、其の孰れを見ても箸にも棒にもかゝらぬ程の駄作は無かつた。

○從來の彼の作を見ると、先づ第一に氣の付くのは、其の構想脚色の巧みなことてある。苟も長篇と云ふ以上、如何に無脚色を主張する人々と雖も、或る程度まて構想上の脚色的技巧を許すだらうと思ふ。否、其を許すことは必ずしも彼等の主張と兩立するの餘地を持つて居ないことはないと信ずる。更に其の描寫會話に至つては、もとより一種天外式の型に入つた嫌はあるにもせよ、彼の構想を遣る上に於いて、十二分の成功を收め得たと思ふ。隨分思切つた空想的なことをも、事實らしく讀せ得る點に於いて、彼の技倆の非凡なることは、充分窺知られる。

○次に彼の取材の方面を窺ふと、隨分多方面に涉つて居る。が、其の人物は其等の社會を代表すべく餘りに空想的である。社會を代表させると云ふ言葉が當つて居なければ、其等の社會に呼吸し生存する人物とは受取られない程、假想的だと云つて置く。而かも其が極あまく出來上つて居る。飯を食はないで生きて居る人物に出來て居る。此が天外の作物全體を通じて、唯上面の面白味許りあつて、我々の胸に切實な感じを與へ

得ない所以、如何にも淺薄て、女小供の慰み物らしく感ぜらる所以である。つまり彼の作の缺點は人生乃至は生活を度外に置いて居る點に、作物としての最も重大な缺點を持つて居る。

○天外は女性を寫すことにかけては、娘と年増とを問はず一種獨特の手腕を持つて居る。彼の作が常に色情戀愛等の方面に限られ、而して其點に於いて成功する所以である。

○近來自然主義の勃興と共に、文壇は一大革新を遂げた。と同時に天外は曾つて「初姿」時代の努力を更に新に試みやうとして、先づ其の主張とするところを「校長の二子」によつて社會に問うた。然るに餘り世評は善くなかつた。併し兎に角其の若々しい意氣込丈けは何處までも買つてやらねばならん。自分は「校長の二子」を以つて、彼が轉化の過渡に於ける作物として、暫く敬意を以つて迎へやうと思ふ。今にして此の方面に於ける天外にケチを付けるのは少し疾り過る氣味がある。

○殊に彼は久しく長篇に筆を執り、且つ新聞小說に力を入れて居たゞけに、殆んど其に囚へられたと云つても可い程一種の型に入つて居る。此の型を破るのは誰にした處て到底一朝一夕に出來ることでは無い。後藤宙外が非自然主義を唱へて作をするのとは、大分趣を異にして居る。例の「靜苦動苦」を見ると、宙外は矢張り從來の宙外の作風に從つて行かうとするものらしいが天外のは出來可くんば全く從來の圈外に脫却しやうと努力して居るさまが見られる。此の點に於いて天外は偉い。

○「校長の二子」には何處となく舊俳優が新劇を演じた趣がある。此彼が全く舊套を擺脫せんとする努力を示したものである。或人は天外宜しく從來の天外たるべし、徒らに他を眞似るべからずと云ふ。併し自分は那麼ケチなことは云はない。宜しく進んで大に新たなる方面を開拓すべし。徒らに引込思案ばかりして居て若い者の活動を罵るのは意氣地がない、卑怯だ、男子のすることではない。

○先づ第一に天外に勸めたいのは、從來と異つて、生きた社會、生きた社會の生活に、頭腦を觸れさせ、飯を食つて生きて居る人物を描かんことに苦心することである。形式は或は脫却することが出來るかも知れん。而し內容の改良がなくては、折角の努力も何の意味も無いものになつて了ふ。

○必ずしも短篇を作る必要はない。君は宜しく君の長ずるところの長篇に向つて其の新らしき努力を傾注するが可い。短篇作家は多い。而して彼等すら既にぽつぽつ長篇に手を着けやうとして居るではないか。

○君に一策を勸める。前に云つたやうに君の構想脚色上の手腕は、殆んど當代に比肩すべきものが無いと云つても可い程だ。此を利用して今後大に脚本の方に向つては如何であらう。更に君には會話と云ふ得意の武器もある。見給へ、本郷座や東京座あたりの出物を全然ものになつて居ないではないか。此の際少しく手腕さへあれば、天下のこと朝餐前に成るの有樣だ。恐らく此の方面に君の新らしい努力を注いだ方が、注ぎばえがあるに相違ない。而して我藝壇も其によつて得るところ極めて多いと信ずる。

○妄評多罪

△小杉天外氏

守田有秋

◎小杉天外私が小杉天外氏の名を知るに至つたのは明治廿八年二月廿日の二六新報紙上に於て、『村の名物』を讀んでからの事である、無論其以前に於て天外氏の作物は已に世に公にされて居たには相違ないが、年少なる自分の其を知らう筈はない。恰度當時二六新聞には、故齋藤綠雨氏が居られたので、天外氏の作物は、綠雨氏の手を經て、編輯長福田和五郎氏まで提出せられた、無論編輯長に於て其に異存のあらう筈もなく、氏の作物は直ちに連載せられた。是れ氏が所謂『新聞小說』なるものに筆を染められた最初の作であつたらう。處が、此の小說は、新聞物としては、全然失敗

の作てあつた。其は當時氏が、綠雨氏の文章を非常に模倣して居られたからてある、三十回程連載せられたが、一向に事件が進まぬ、無益ぬ駄洒落や、譯も解らぬ小理屈が、到處に揑ね廻してあるので、事象の變化を望む年少な自分の樣な讀者には、何等の興趣をも與へ無かつた。是は、後日再び『文藝俱樂部』に掲載された樣てあつたが讀む氣は仕無つた。

◎是より以前、即ち廿六年二月に、氏は綠雨氏と合著て、『反古袋』と云ふ著を公に仕て居る、其の書には卷末に綠雨氏が『賣花翁』と云ふ一篇を添えて居る外は、悉く、氏の小品を集めたものである、卷頭に收められた『醉骨錄』は、飜案物らしく思はれるが、兎に角、氏獨特の筆を以て書かれたもので、全く綠雨氏を模倣したらしく思はれぬ。一種の幼稚な戀物語てあるが、當時にあつては、さして拙劣ものでは無つたらしい。此の外『反古袋』には『哲學家』及び『五ッ紋』を收めて居る、双方共に言文一致で書たものだが、今より見れば至極幼稚なものである。

◎其後、廿九年頃の事であつた、自分の學友が、神田美土代町邊りの或下宿屋に居たので、自分は始終遊びに行つて居た。すると一日友人が、何かの話の末に『君、此處に、小杉天外と云ふ小說家が下宿して居るよ』と云ふ、自分は、尠からず其に好奇心を持た、『う爾うか、一體何を仕て居る』、自分が恁う反問すると、友は、『却々勉强家だよ、每日每日、一生懸命に書いて居るよ、それでも、隨分苦しいんだらうと思ふよ』

爾來、天外氏の名は、自分の頭に、一種の言ひ知らぬ印象を與へた、而して氏を通じて、文學者なるものゝ生涯の、實に多艱多難なるものであるを、實際に深く感じた、自分は其の後數年にして、天外氏が『初姿』を公にして、文名嘖々として、中央文壇に歌はるゝを知つた時、人事ながら、一種の愉快を覺えたのである

卅年二月、春陽堂發行の『五色筆』の中に收められた『かけ皿日記』の如き、恐らく、彼の下宿屋時代の作物であつたらう。此の時は、以前より見れば、稍々寫實的描寫に熟達した形跡を見る事が出來る、然し、

思ひ切つて、幼稚な、つまらぬ物であつた。

◎戰爭後は、氏の作にも、一二戰爭に關係した作物もあつた樣だが、何れも失敗に終つたらしい、殊に、或作の如きは、當時公にされた柳浪氏の『七騎落』に類似して居るとかで、評家に批難されたものもあつた。然し兎に角、此の時代は氏の最も煩悶し、且つ努力して居た時で、其の後『蛇いちご』を出版するに至るまでは、其の長き苦鬪と、煩悶を繼續したものらしい。『蛇いちご』は、氏が寫實主義に轉化した最初の代表的作物かと思ふ、氏は其の序文に於て次の樣な意味の事を言て居る。

長い間私の頭腦を支配して居た主權者たる理想が倒れて仕舞つた、此の作は精神的革命の結果、初めて生れたものである云々、

氏は此の作に於て、氏の所謂寫實主義を努めて表はさんとした。兎に角舊來の作物より見れば全く面目を一新して居る。此の作中に表はれた女主人公お京は、後年公にされた『はやり唄』の女主人と、異巧同型の人の樣だ。

◎『初姿』を公にして以來、氏は當時の新進作家中に嶄然頭角を表はし、一躍して大家の班に列するに至つた、氏が多年の努力は茲に初めて天下に認められたと云ふ可きである。

『初姿』に於て、天下の視聽を峙たしめたことは、氏が、大膽にも強姦の悲劇を作中に描寫した事である、是れ實に、理想派の作家などを驚倒せしめた一事で、所謂氏の寫實主義なるものは、此の作に依て、より明白に暴露せらるゝに至つたのである。兎に角、純主觀より離れて、純客觀に重きを置く可く、文壇の傾向を轉化せしめた作物が、過去十數年間の中にありとすれば、此の作の如き其の隨一であらう。

後年公にされた『戀と戀』『にせ紫』の二篇は、此の『初姿』の續篇とも思はれ可きもので、悲慘なる女主人公の運命が、到所に點綴されて居る。然し『初姿』より『にせ紫』の公けにされる迄には、數年が經過して居るので、其の間には、長足なる時勢の推移、時代の

進歩があつたので、兩者を比較して見ると、氏の作風にも、思想にも大部進歩のあつた樣に想はれるが、然し、氏の寫實主義てふ立脚地のみは依然として動かなかつた。

◎『初姿』に次て、『女夫星』や『はやり唄』や『新學士』『新夫人』等が、接踵して出版された、一作の出づる毎に氏の名聲は隆々として登つて行く。而して、『魔風戀風』に至つて、一世の名聲を、殆ど氏一身に蒐むるの概を示した。曾ては大家として、先聲として、風上に立つて居た紅葉も水蔭も柳浪も眉山も、一時は此の文壇の孤將軍の爲めに、抑し隱された了つたかの樣な觀を呈した。無論、此の間に蘆花氏が、『黑潮』を公にして、多少の名聲を收めたとは言ひながら、此の文壇の流行兒に、其れ位の事が、抑も何であらうか。氏は次で卅七年の十月より、二六新聞に『にせ紫』を連載し初めた、新聞小說として、此の作が成功せしや否やは疑問であるが、兎に角『魔風』以後の大作として、識者間には認められた。是を要するに、氏が、硯友社諸氏に關與せず、率先して寫實主義の旗幟を翻したたげ、氏の作品が、硯友社諸氏の作品より淸新なるものとして、一般に認識せられたことは、確かなる事實である、と同時に、氏が、一時文壇の流行兒として歡迎せらるゝに至つた原因も亦茲に在つたと云ふ事を推知するに難くはあるまい。

◎氏が最近の大作は、言ふ迄もなく『コブシ』である、是は前後三年の間『讀賣』紙上に連載されたもので、自ら一代の大作なりとして許して居るものである是に依て是迄の氏の作風なり態度なりは、遺憾なく窺知することが出來る。氏が今後或は如何に變化するとも、是迄の努力に依て得た文壇に於ける氏の名聲なり地位なりは、此の大作『コブシ』ある以上は決して失はれ可きものではあるまい。

然し、氏が『コブシ』を連載せる間に、日本の文壇は一大革進の機運に到達した、其は、文壇に於ける自然主義の勃興である。此の機運に乘じて打て出てたる作家は、容赦もなく舊きものを破壞して、兎にも角に

も、一新生面を文壇に劃するに至つた。

書齊に閉ぢ籠つて『社會』を知ら無つた氏は、文壇の形勢が斯く迄急速に變轉しやうとは思は無つた、曾ては衆人に先んじて新らしさを唱へた氏も、今や、少しく立ち遲れの氣味となつて、後に殘さるるに至つた。氏が果して、從前の態度を持して、飽迄寫實主義を標榜して行くか、或は、飜然として、舊來の態度を改め自然主義の諸氏と提携して進むか否かは目下の處疑問である。最近に本誌に表はれた『校長の二子』の如き稍々自然主義に傾かんとせるが如き形跡を示して居るが、餘りに誇張的な書き振りなので、却て失敗に終て了つた。けれども、氏が、あの調子でまともに進んだならば、當然自然主義に來る可きものであらうと思ふ。篇中に表はれた主人公の新吾の如き、確に自然派の諸氏の描寫せるものと、著しき類似の點を持て居る。

◎然し元來氏は自ら標榜して寫實主義と自稱して居るけれども、其は、氏が舊來の純主觀を疎んじて、客觀に重きを置くに至つた事と、描寫の方法形式に寫實主義を踏用したのみの事で、決して洋文學に於ける寫實主義と同一視す可きものでないのであるから、取材の點に於ては、純然たる寫實主義の作家の作品とは異る處のものがある。何うしても幾干か、不自由な處因はれたる處は、其の何れの作中に於ても認むる事が出來ると思ふ、要するに氏は表現の寫實のみを事として、取材の寫實と云ふ事に重きを置かなかつたのであるから、日本文壇に新生面を開いたとは云ひながら、尚ほ、靴を隔てゝ痒くの思ひがある、何うしても今一歩を進めねば、新時代の要求に應ずる事は出來ないかと思ふ。

然し自分は一言して置き度い。其は氏が自ら進て、媒介者となつて、舊來のローマン派や、理想派の日本文學を、自然主義にまで嫁せしめて呉れられた事である、即ち、自ら卒先して、過渡期の代表者として立たれた事である、此の點に於て、吾人は永く氏の功績を記憶せねばならぬ。

氏自身に就ては、前言ふ如く今何事をも言ひ得ぬ、

兎に角、氏は目下の處、日本文壇のXである。

△小杉天外氏

德田秋聲

▲天外氏は何と云つても、僕が最も好きな作家の一人である、作物も無論好きであるが、天外氏の人物が一層好きである。作物に對する自信の厚いこと、藝術に對する向上一路の念、是等も素より好きな一つの分子であるが、自分は其よりも天外氏の人物が好きてある。

▲顏を見ても、印象の極めて分明した、幽鬱と云つたやうな分子の少しもない人であるとほりに、氣象や性質も飽くまでアブライトで、感情も純で、と云つて少しも粗野なところはなく、充分レフアインされた紳士である、それて好惡は別として、我々仲間には希らしい貴族趣味を帶びてゐるのも心持が好い。江戸趣味もある。

▲氏には名人肌と云つたやうな處が甚だ多い。作物も無論さうであるが、氏の座談を聞いたものは、誰しも其の眼光の一種奇警な點のあるのを知つてゐるだらう。人生問題とか哲學だとか、藝術論だとか、さう云ふやうな纒まつた話を、組織的に說くよりも、ヒヨイ〱何か言つてゐる間に、氏の名人的氣分が折々發露して來る。平生或る深さまで人生を見てもゐるし、考へてもゐられると云ふとは膝を接して話を交へてゐる時に尤も能く解る。

▲氏の寫實には自分は少し飽足らぬ點がないでもない。例へば氏がゾラの作物を讀んで、あすこが巧いとか、此處が巧妙だとか言はれるのを詮議してみるとそれは多くはゾラの伎巧上の優れた部分々々を指して言はれるやうて、ゾラ自身の寫實其物の全體、藝術に對する立場と云ふやうなものを、廣く深く味はれぬやうな氣味がないでもない。氏のは何處までも形式から入つた寫實主義と云ふとも出來やう。素より遺傳と云ふやうなものや、肉と云ふやうなものに就いては、研

究もされてゐるやうだし、作物の上にも現はれてゐるやうであるが、それも何となくソラにカブれたやうな點があつて、其のカブれたが根底から來てゐないやうな氣もする。

▲人物を描くにしても、ひどく非寫實のヿが多い。古い紅葉先生流の寫實ならば、素より其でも好いが、氏の寫實はいくらか西洋の新らしい寫實即ちナチラリストの其から來てゐるのとすれば飽足りない節がある「へび苺」だとか、「はやり唄」だとか「初姿」だとか云ふやうな物には、此の新寫實の生氣が溌溂としてゐたやうで、氏は此等の作でもつて、寫實派に一新紀元を劃した人であるが、「魔風戀風」や「コブシ」は餘り感服しない。殊に「コブシ」の政雄や多賀子が、寧ろ一種の英雄のやうに、舊式な型へはめられて、描いてあつて、一面の弱點や何かを冷靜に描いてないのは、何だか古い寫實の其に逆戻りしたやうな氣がする。

▲氏には描寫の非凡な才がある。「コブシ」の厩の處あれが氏が此種の筆の殆ど極致に達したもので、よし其が部分的美であるにしても讀んでゐて藝術的感興の絶頂に達したもの丶やうに思はれる。厩の句が未だに鼻に殘つてゐるやうな氣がする。あんな調子で若も一篇を貫くヿが出來たならば、外のヿは左に右、描寫だけて、もう立派な完全な作と云ふヿが出來るだらう。

▲或人は、天外氏は今自身の立場を疑ひ出してゐると云ふやうなヿを言つた。或は然うかも知れぬ。然し天外氏の天分は厚い、自信も深い。根底から飜へされて了ふやうな人では決してない。今度の實業小說と云ふやうなものは何樣なものだか知らぬが、自分は餘り多くの期待を置かぬ。氏が一廻轉するには、今少し長い時間を要するであらう。少し長くとも、遂に轉廻する人である。

△小杉天外論

樗陰生

○日清戰爭より日露戰爭に至るまでの文壇―詳しく

いへば紅露全盛時代より自然派勃興に至るまでの文壇に於て其中心たりしフイギユアを求むれば疑もなく小杉天外氏也。

○若し小杉天外論と題して、明治二十八九年乃至三十八九年の文壇を論じ、前は紅露全盛時代との關係を論じ、後は自然派勃興時代との交渉を極めたらば優に一冊の書を造り得べし。

○小杉天外氏を論ずるには少くとも必らず廣津柳浪氏と小栗風葉氏を引合に出さざるべからず。

○天外氏は柳浪氏に啓發せられし處少からざるべく風葉氏は天外氏に暗示されたる事少からざるべし。

○柳浪は蓋し天才の人歟。氏の描寫の技術は勞せずして事物を讀者の眼前に活躍せしむるに足る。此點に於て明治の小說壇氏の如き才分を有したる人なし。只氏や怠たるに荒めるものか其天才を充分に發揮せずして衰退したるの觀あり。天外氏も固より天才なきにあらざるべきも、天分は或は柳浪氏の下にあるべきを思ふ。只氏の藝術に對する献身的奮勵、熱烈なる努力は氏の技術をして驚くべき進歩をなさしめ、結果より見れば柳浪氏に比して遙かに巧妙に、遙かに完備せる作品をなさしめたる也。

○天外氏が寫實主義を標榜する以前の作物にも可なりに面白きもの多し。「改良若殿」の諷刺、「卒塔婆記」の熱烈、「蝶ちやん」の飄逸の如きは今尚忘るゝ能はざる所也。蓋し氏は熱情の人、よく怒りよく泣く。寫實主義を標榜する以前の作が殆んど主觀的感情的のものなりしも怪むに足らず。かゝる主觀的、感情的の人が寫實主義を唱導して、純客觀の價値を說き排主觀の叫びを擧げたるは、餘程大いなる變化にして、氏は其頭腦を變換するについて、全く生命懸けの苦痛を甞めたりといふも蓋し誇張の言ならざるべし。

○氏の美論、乃至創作論は極めて簡單なる丈け甚だ明瞭なるに似たれども、實は其れ丈け議論を容るゝの餘地あるが如し。氏はよく描かれたるもの即ち美也といひ、實際あるが如く實らしく寫すのが寫實也といひ作者の空想界に讀者を遊ばしむるのが詩人の天職也と

もいふが、一應最もに聞えて實はなか〳〵に議論すべきこと多し。殊に空想と寫實との關係の如きは言葉の意義を定めたる上ならでは最も誤解され易きことゝ思ふ。

○氏の最も優れたる所は間接描寫法にあり、作者直接に説明の筆を着けずして篇中人物の言行をして自然に其内部關係を明瞭ならしめ行く手際、心惡き程巧み也。「あだ情け」に於て武太郎の煩悶を寫すに下女の女主人に物語る言葉を以てせる如き其一例也。現代の人は總て自ら考へ、自ら見出し、自ら悟ることを好む。作者直接の説明を聞くよりも間接描寫の中より讀者自ら内部の消息を發見するは、讀者にとつて一層大いなる滿足を與ふ。

○氏の描寫は常に活現し活躍す。一々の動作言行悉く耳に聞え、眼に映ず。此點に於て海内獨歩也。而して其然る所以のもの、會話の間に動作を挿敍し、會話と動作と合體して紙上にあらはるゝが爲め也。

○昨年までの氏は自尊心極めて強く、一切の文士殆んど眼中になかりき。近來稍自己の足らざる所、缺けたる所にも氣付きて、弘く他人の説も參考にせんとするの態度になれるが如し。

○然し氏は何處までも聞くよりも語り、從ふよりも從はしむる人也。只自己の説を吐き盡せる後に、「然しどうでせうか、私はさう考へますが」といふ一語を附加するに至りたるは確かに多少の變化也。

○自覺は極めてよき事なるべし。然し世には寧ろ熱狂的に自信力旺盛なる時却て大いなる仕事をなし、自覺すると共に活動力稍々鈍る人も少しとせず。我天外氏は決してかゝる種類の人ならざらんことを望む。

○八九月頃より「讀賣」に書く實業小説の成功不成功は天外氏にとつて一大事なるべきを思ふ。獨り人氣のみの問題にあらず、天外氏自身の心理に於ても極めて大いなる影響を與ふべきを思ふ。吾人は呉れ〴〵も此作の大いに成功せんことを祈る。

○「魔風戀風」天外を誤るとは予の特説也。餘り世間にワイ〳〵いはれて、よく賣れて、お金が澤山とれた

ものだから、新聞小說の旨味が分り、どうしても筆が俗受けになつた傾あり。尤も技術は「コプシ」まで漸々進みたるに相違なきも、作全體としては予は「魔風戀風」以前の單行本「蛇いちご」「ひだり繩」「初姿」「女夫星」「はやり唄」等をとる。

○「新學士」と「新夫人」は是非共高田と河合に演じて貰ひたし。恐らく小說中あれほど劇に一殊に高田と河合にシツクリ合ふものなかるべし。然るに劇にはどうしてもならぬ「魔風戀風」などが却て芝居にされたり。俳優とか見物などは馬鹿〳〵しき程眼がなきもの也。

○天外氏は文士としての品格を重んずる人也。餘りに感情の激しきに驅られて往々極端に怒り、又は人と衝突する事あれども、卑劣なること、奸謟なる事等は斷じてなさぬ人也。文士中の紳士を以て目すべし。氏亦感情の爲めに矯激の行爲あるを自覺するも、自ら慰めていふ「感情は僕等の唯一の財產だからな」と。

○天外氏其作「緣不緣」の三崎座に演じられたるを見、時々淚を垂れて感動し、感動激しきに至れば時々我を忘れて拍手す。

○天外氏容貌甚だ若く、女の子往々十位も下に見る事あり、かゝる時氏は大に喜んで「奢らう〳〵」と本氣になつていふ。

○天外氏の容貌何となく尾崎行雄氏と似たり。其自信の强き所、品格を重んずる所、潔癖なる所まで似たるは不思議也。

○天外氏の作物は歷史的に見ては固より非常なる意味を有し、又絕對的の價値よりいふも長く文壇の佳作たるを失はず。若し描寫の技術よりいはゞ氏は確かに空前の作家にして、後來の作家を啓發すること少からざるべし。況んや氏、春秋に富み、元氣旺盛に、向上心あり、執着心あり、藝術を愛するの念は他の作家を凌ぐ。氏の將來は今Xなるも必らずや或新たなるものを產み出すべきを信ず。

○天外氏は校正甚だ嚴重にして六校七校までもとる若し校正しても〳〵間違あるが如き時は紙の傍に「て

んな風で校正が出來るか」など丶書く。自分の作の一字一句を注意するの念の厚きことは余の知れる限りに於ては天外氏と風葉氏の二人を推す。獨歩氏の如きはルビーは雜誌屋任せにて折々ひどい誤あり、それを本にする時も又訂正もせずといふ打ちやり放し也。天外風葉の二氏の如きは全く面目を異にす。

○天外氏はあらゆる作に向て全力を傾注す。出來不出來はあるにしても氏は決してゴマカして書くことはなし。故に氏の作に全く見るに足らざるものは一篇もなし。此點風葉氏と非常なるコントラストをなす。風葉氏は駄作もやり、又代作までさせて平氣で居るが、天外氏はさういふ眞似は出來ぬ人也。然し近來の風葉氏は大いに眞面目になり、よく〳〵金にでも困つた時でなければ、甚だ名を愛しみ、作を惜むが如し。

○天外氏は他人の作を讀みて多く或部分の描寫、或部分の觀察等を語る。是れ蓋し藝術を愛するもの丶見方にして、余等も亦作を讀みて氏と同じ傾向あるを思ふ。設く全體を見るものと互に一得一失あるべし。

○天外氏の作全體を讀みて少くとも二三十枚の論文を書きたし。然し今は其暇なし。こんな下らぬ一つ書きにてお茶を濁す。

（完）

包圍されたる伊藤公（上）

黑頭巾

其一

◉公伊藤は包圍されたり。包圍は今日に始まれるにあらず、既に久しき以前より漸を以て包圍され、今や十重廿重の勢、牢として又た拔く可らず。

◉公伊藤は包圍せられたり。恰も芋蟲が蟻軍に遠巻きされたる如くに、包圍せられたり。其尨大なる軀幹は、一朝一夕に嚙み殺さる丶ことは無かるべきも、決然として圍を衝き破るの快擧に出る能はざるや勿論也

◉而して芋蟲は、地に落ちたるの場合に於て、始めて蟻軍に包圍さる丶の患あるのみなれども、公伊藤は

如何なる場合にも、如何なる時にも、つねに包圍されつゝあり。

◉加之、公伊藤の爲に尤も憂ふべき所以のものは、公を包圍しつゝあるものゝ種類の各種各樣にして、殆んど無限なるの感あること是也。

◉公の血を吸ひ、公の肉に喰ひ入り、而して公の手足を絞らんとする者、到處にこれあり。

◉公伊藤は包圍されたり。公は必ずしも正面の勁敵を恐れざるべし。然れども遠捲きに包圍しつゝあるものに對しては、公の聰明と雖も亦た爲めに鈍らざるを得ず、公の精力と雖も亦た萎靡せざるを得ざるものあり。

◉公を中心とする包圍軍の半徑は年々短縮しつゝあり。包圍の程度は、日々に緊迫を加へつゝあり。若し公にして斷然として勇氣を揮つて、以て此の怖るべき包圍軍に對抗することと無くんば、公は、まさに、彼の怪談牡丹燈籠に見へたる、怨婦の亡靈に取り付かれたる萩原新次郎の如くに、次第〳〵、精血を吸取られ、皮と骨と計りになつて、斃るゝに到るあらんことを恐るゝ也。

◉公伊藤は大政事家也。吾輩は、其の表面、光彩絢爛たる晩年に對して、永遠に光榮あらしめんことを公の爲に祈待する者也。

其二

◉公伊藤は美人に包圍せられたり。美人といふよりも、寧ろ藝妓に包圍されたり。公は恐らくは、終生、また藝妓軍の包圍を脫すること能はざる可き也。

◉彼の蠶を見ずや。營々として桑葉を食ひ盡して、得たる其の勢力を發揮して、糸を吐き、繭を造りて、自ら其の中に籠居す。其身、煮らるゝまで、遂に其の圍を出る能はず。

◉公伊藤の藝妓に於けるは、其れ猶ほ、彼の蠶の繭に於けるがごとき乎。公は半生、孜々として養ひ得たる精力を發揮して藝妓軍を組織し、自ら包圍されつゝあり。

◉公伊藤を包圍する藝妓軍の繭は、蓋し公自ら組織

せるもの也。されば公は、己が精力、能く美しき藝妓軍の繭を、自由自在に造り得るを喜びて、知らず識らず、其の製造に耽けりたる也。

◉安んぞ知らん、此の美しき繭は、やがて公が自由を奪ふの繭とならんとは、公は樂しんで、其の中央に鎮坐すれども、公は既に包圍せられたり。

◉或は言ふ、公伊藤は此の包圍を脱する能はざるを以て、勿怪の幸と爲すものなるべしと。是寧ろ酷評也

◉公伊藤と雖も、眞逆に美人を以て生命と爲す者に非ず。惟ふに、滿眼の青葉若葉、人心一新するの曉、或は秋雨秋風蕭條として、漸く肌寒を覺ゆるの夕、少なくとも一年の中、二三度は、公が獨坐、神澄むの時冷々然として覺醒の氣に接することあらん。

◉公が如き一擧一動、世界の注目を惹くの身にして此の如く、多くの時間を、婦人の爲めに割愛するの極めて愚なるを感じたる時ありしならん。

◉而して、公が嘗て反省の事實を示さゞるは、公が節制克己の力、年々消耗せると、一には性情の慾に驅らるゝとに由りて、「英雄の閒日月あるを示す」てふ自心の誘惑に打克たれて、己れ自ら己が心を欺きつゝ知らず識らず遂罪の傾向に趨りつゝある也。

◉一面より言へば、公は藝妓中毒也。アルコール中毒也。ニコンチ中毒也。

◉此の恐怖すべき中毒の病的勢力は、公の心臓を環りて、公の脳髄を環りて、緊しく包圍しつゝある也。

其三

◉公伊藤の體質は、醫師が視て以て、不可思議と爲せし所也。公は、あらゆる不規則、あらゆる不衛生を爲して、而して頑健無比なれば也。

◉侯井上馨は鐵的に堅固也と雖も、彼は世に名高き冷水浴の養生法を有す。故に世人は割合に彼の老健を怪まず。

◉聞說、侯の亡父は、實に嚴格にして、規律ある養生法を勵行せし人にして、侯は、輓近其の遺風を顯彰しつゝあるもの也と。

◉子杉聽雨軀幹雄偉、風貌堂々たり。侯井上と同庚

にして、體重は則ち廿貫を超ゑ、老健亦た相當る。

●子杉曰く、井上にして冷水を用ゐば、吾は則ち熱湯を用ひ、兩々相對して、以て冷熱の効果の優劣を事實の上に證明せんと。

●此の如くして、侯井上の冷水浴に對し、子杉は每朝熱つき風呂に入る。

●此の二人者の如きは、養生に主義あり。唯だ公伊藤や出鱈目也。極めて多く吸ゐ、多く食ひ、多く飮む起居飮食何等の規律ある無し。專ら快意を目的とす。

●伯大隈は、つねに煙草を吹かして、其の雄辯と共に、客を煙に捲くと雖も、彼は土耳其煙草を、長きサピタのパイプに刺して吸ふ。

●公山縣も亦た多煙家なれども、公は概ね敷島を吸ふを常とす。稍や感冒の氣味あるときは、則ち日本葉の梅が香を吹かすに似たり。

●侯桂は、嘗てニコチン中毒に罹れることあり。侯は粗末なるマニラ葉卷を多用し、中毒後、暫らく天狗煙草位を吸つて我慢せしことあり。

●博士和田垣謙三の好辯も亦た有名也。彼や葉卷を吹かし、英國製のキザミを大雁首のパイプに詰め込み或は板煙草を削つて吸ふ。

●池田謙三も亦た精力家の好煙家也。二六時中、舶來のキザミを水夫パイプに詰め込みては吸ひ。詰め込みては吸ふ。左右の指、爲めに紫色を帶ぶ。

●公伊藤の喫煙力に至つては、優に天下に冠絕す。公は一箱百本百五十金のハバナ葉卷を、每月五六箱以上を吸ひ盡す。

●公は談論中に吸ひ、讀書中に吸ひ、酒席に吸ひ、馬車汽車の中に吸ふ。朝起も洗面所に至るの時、則ち左手、中指と食指との間に葉卷を挿み、洗面の間は之を向ふに措き、洗ひ畢れば、之を右手に持ち換へて悠々として紫煙を吹きて去る。

●公は談論、興に乘ずるの時、即ち箱の中より五六本を拔き來り、有勢に吸ひては灰を叩く。眞白の美しき灰、小さき灰皿に山を爲す、此の如くして、公は一日の中、二三十本を吸ふ。

◉公は此の如くして、ニコチン中毒を病まずと雖も其の咽喉は、既に慢性カタールに罹り、隨つて其より腦髓に及ぼすの影響も亦少からず。

◉公の酒は、必ずしも當年の公山縣、伯大隈等に對して雄を稱するを得ずと雖も、其の濫飮强飮するを以て、一年間の酒量は莫大の高に達すべき也。

◉公が最近の二度の歐洲行の歸國後、二度ともに腦貧血を起せしは、則ちニコチン、アルコール中毒の病的勢力の現示に外ならざりし也。

◉當時、侯井上其の老いて逞ましき有腕を撫して慨嘆して曰く『近ごろ伊藤も弱くなつた』

◉公伊藤の腦貧血を起すや、彼の元氣能き、赤味を帶びたる顏は、眞蒼になりて凄味あり。之に葡萄酒を飮ましめ仰臥せしめて、頭を下げしめ、かくすること少時にして則ち恢復す。

◉公伊藤の腦貧血を起すは、病毒の包圍軍の漸く其の牙壘に肉迫しつゝあることを證明するもの也。公と雖も、老齡既に六十八歲、如何に頑健なりとも、また昔日の勇ある可らざず。彼の腦貧血の時に、瞿然として猛省の念を起さゞるは何ぞや。

◉壯年時より無節制なりし公伊藤の老年に對して節制を責むるは、稍酷なるが如しと雖も、公が老年なるが故に責むる也。

◉蓋し公伊藤、有終の美を濟さんには、一代の力を揮つて、節制し、以て病毒の包圍軍に對抗せざる可らざる也。

◉公伊藤は時々、王陽明の文集を讀み默會する所あるに似たり。これ吾輩が、親しく公に聞く所也。

◉古來、王陽明の如く、晩年の赫灼として光榮ある者は、極めて稀也。而して是一に彼が克己節制の力の効す所ならずんばあらず。

◉太陽の西海に沒せんとするや、光芒宇宙に照映して極めて美也。

◉古來有數の幸福なる政事家。公伊藤の晩年をして光輝あらしめんことを吾輩は眞個に祈る者也。

其四

●公伊藤の如き、人格と地位とを有する者に對して其の贅澤を云爲する如きは、巨大的眼孔者の言ふ所にして吾儕は取らず。

●然りと雖も、如何なる人にありても謹愼は美德也若し一點の油斷有らんには、忽ちにして、あらゆる呪咀者の爲めに包圍せらるゝに至るべし。

●京城に統監府の設置さるゝや、日本國旗を徹して統監旗を掲げ、統監は鹵簿堂々、警蹕の聲、路人を驚倒せしむ。統監としての公伊藤は輝く計り也。

●而して現内閣は、政友會の繼承者、侯西園寺に由つて組織されあるが故に、公伊藤は今や得意の秋たるべき也。

●身は海外に出でゝ、親王の待遇を受け、同主義の繼承者は政權を掌握す。藤公の全盛此の如きは、未だ嘗てあらず。

●全盛此の如くにして、公の手腕大に揮はれず、事業案外に擧らず、往々にして公の老境を論ずる者あるに至れるは、必ずしも公の老いたるには非ずして、公

が一身、病毒及び呪咀者に由つて包圍されつゝあるの結果ならずんばあらざる也。

●前内閣の全盛時に當つてや、公伊藤は大元老の空位を擁して、徒らに敬遠され、心中ひそかに悶々の情に耐へずして、或は酒を煽りて不平を漏らせしことも亦少からざりき。

●近年は大得意の運に向ひ、意氣昂然として又た杯を擧ぐ。『高樓傾盡三杯酒』の客氣微見せざるもあらず近年は公は專ら舶來の葡萄酒のみを用ゐれども、興に乘じては日本酒を煽ること亦無きにもあらず。

●公は時と場合に由りて大酒する人也。『場所飲み』を爲す人也。所謂『バナゝ』(芭蕉の實)式の酒客たる也。

●美女左右に侍し、門下の政客前に滿つ。夜深く涼しくして、問題は公が得意の立法乃至、外交談にるの時、主婦、水晶簾を捲き上げて、明月來り照らすことあらんには、公は斗酒猶ほ辭せざるの慨を生ずべし。

●公伊藤の性格は、本來極めて正直の人也、單純の人也。乘せれば隨分乘る人たる也。故に公を乘せんと欲する者、公を包圍す。

●公の京城に在るや、管仲の三歸臺と雖も顏色無かるべし。公は、つねに統監の制服を著け、大勳位の勳章を一箇、胸間に輝かし、椅子に座す。

●此の頃の暑熱となれば、京城は風蒸しあつくして而して蚊も亦多し。公は例に由りて、大勳位統監の出でたちにて、悠然として安樂椅子に倚れば、蚊遣りの小煙突の三本位は、公の前に並べられて、盛んに煙を吐く。而して侍女に裝へる、內地傳來の、公の愛妓三人、公の左右より、後ろより、名古屋團扇を揮つて、纖手以て涼しき風を公に送る。

●公は明眸皓齒に包圍せられて、京城の暑熱を涼却しつゝある也。

●大西鄉の銅像は、狗を携ふ。先年公伊藤の銅像、楠公祠畔に建てらるゝや、惡戲を畫く者あり。公伊藤猫を携ふるの圖を作る。蓋し公伊藤といへば、妓必らず伴へば也。

●吾輩豈、公の細事を筆にするを喜ぶ者ならんや。公何等の贅澤を爲すも、放縱を爲すも寧ろ公の自由に屬す。

●然れども吾帝國を代表する、大政事家の態度としては、公の近年、殊に勉强力を缺く如きは、十分に之を責めざる可らざる也。（未完）

嘉納治五郎氏と新渡戸稻造氏

（附たり岡倉覺三氏）

臨風生

つら〱今の教育界を見渡すに、當然人物を要すべき筈なるにもかゝはらず、上は文部省のお役人より下は小學校の村夫子先生に至るまで、紛々たる教育界、

多くは是れ張三李四の徒に過ぎず。一代の師表となり、新時代の青年を教導するに足るべき偉人に至りては、蓋し之を索めて、寥々晨星の觀あり。時代は人物を要求す。人物は人物なる教育家に依て養成せられざるべからず。しかも其中心となるべき學校の校長なるものに就て之を見よ。中等教育に從事するもの、多くは衰殘の形式を教育の能事と心得、事に高等教育に從ふものは。多く無能に非ずんば、老朽。之を率ゆる文部も文部、宰相多くは伴食の名あり、内外に對して威嚴なく押のきかざる、此省の如き甚しきはなし。之を如何ぞ教育の功績擧り、人物の輩出を望むべけんや。此時に當り、高等師範に嘉納氏あり、第一高等に新渡戸氏ある、異郷故人に逢ふの思なくんばあらず。

嘉納氏は國士を以て自ら居り、新渡戸氏は紳士を以て自ら任ず。故に嘉納氏は國士を作るを旨とし、新渡戸氏は紳士を作るを本意とす。嘉納氏は高等師範の壘に據れりと雖も、其根據地は寧ろ講道館にあり。新渡戸氏は第一高等に長たれども、臺灣其他の掛持ありて腰の据はらざる傾きあり。嘉納氏は親方なり、子分の養成に汲々たり。新渡戸氏は才子なり、猶ほ自家の立身出世に腐心す。

嘉納氏の器は大なり。其大は善く人を容るゝに足ると雖も、人に容れらるゝには餘りに大に失せり、是れ氏が依然として、高等師範に長となり、文部にもてあまさるゝ所以なり。氏の器を以てすれば、大臣たるに於て何かあらん。否寧ろ次官局長の器に非ずして、實は大臣の器たるなり。思ふに氏たるもの曾ては高等師範に長たるを理想ともせず、又之に甘ぜざりしなるべし。然れども氏には切ても切れぬ借金の惡縁あり。是れ氏をして其才能を之に瀝下せしめ、遂に老驥伏櫪を餘儀なくせしめ、文部の頤使に甘ぜしめたる所以なるか。斯くして今や氏は絶えて自家の榮達を求むるをなさず。自家の榮達の如きは彼に取りては一弊履に似たらんかし。是れ已むを得ざるの結果なり。然れども彼には天職あり。何ぞや、講道館の師範たること是れなり。

講道館は嘉納氏の生命にして、精神なり、高等師範の如きは、寧ろ氏の副事業として見るべし。然も氏が高等師範に於ける教育主義は講道館本位なるべけれども、今や漸くに文部省本位たらんとするの徴あり。加ふるに高等師範の職員は必ずしも講道館式にあらず。宗像其他の數氏を除きては、多くは講道館とはかけ離れて縁遠し。是れ氏の國士養成主義も高等師範には行はれざる所以なり。然も講道館に於ける直參に國士的に養成せらるべきにもかゝはらず、柔道に於てこそ覩るべきものあれ、一代の國士たるもの寧ろ甚だ乏し。唯それ其外樣の門下に至ては廣瀬氏湯淺氏の如く、不朽の盛名を竹帛に垂れ、最も善く氏が教育主義を具體的に發表したるものもなきにあらずされば、よしや氏の教育主義は意の如く高等師範に行はれずとするも、講道館は此主義の權化たるべきを思へば、又以て氏が苦心の徒勞ならざるを賀せざるべからず。

子分の爲に山積の債を厭はず、一意講道館の子弟養成に盡すに至ては、嘉納氏亦一代の俊傑たるに背かず。其鷄鳴狗盜の雄なりと云ふを休めよ。孟嘗君にして鷄鳴狗盜の雄なりとすれば、氏も亦此稱を免れざるべし。然れども孟嘗君には他人學ぶ能はざるゑらき所あり。嘉納氏にも亦主義あり主張ありて、瑣々者流の企て及ぶ能はざるものあり。たとひ、氏を窮厄の間に救ひ、縱横策を帷幄の中にめぐらす傑物の子分なしとするも、氏の爲には水火を辭せざる勇士の多々あるを見れば、嘉納氏の感化と勢力とは、決して侮るべからざるなり。近時宏文學院、否運に際會して、子分の糊口資に窮するもの少からざらんとす。氏が中等教育研究會の擧あらんとするが如きは、蓋し山窮まりて路通ぜんとするの策に非ざるなきか。

其量は天空海濶なり。貧にして猶且つ人の爲に財を投ずるの意氣あり。獨り講道館の爲に、又部下の爲に盡すあるのみならず、近時漸く文部本位に轉換する誹はありとするも、高等師範の爲に鋭意改善と擴張とを謀るに至りては、碌々たる餘子の到底夢想し能はざる所なり。高等師範の職員に多くの俊才ある既に此を多

とすべし。しかも此俊才が講道館式にあらずとするも、氏に心服するの深き、亦以て氏の感化力の大なるを見るべきなり。數年以前に設けられたる體操專修科は優に體操學校の領分を奪ふに足り、其圖畫科の或は美術學校のお株を略さんとするが如き、東京高等師範は着々として成功しつゝあるなり。昨年夏中學校長會議あるに際して高等師範は招待狀を中學校長に發して其參觀を乞へり。此日費す所數百金、盡く是れ窮餘の氏が財布より出でたりと聞くに至りては、好漢の意氣頗る欽すべきものあるにあらずや。惜むらくは高等師範出身者に此意氣あるものなく、其衣鉢を紹ぐに足るべきものなし。官立學校に於ける感化力は遂に私塾のそれに及ばざるか。

第一高等學校は木下廣次氏に依りて、先づ其校風なるものを作られ、之に次ぐに溫厚なる狩野亨吉氏の督勵を以てす。狩野氏は學者肌にしてしかも學究的ならず、仙骨を帶びて遠く俗に拔きんず。言はず敎へざるも、自ら化するの德あり。之を木下氏の積極的に比すれば、消極的の傾きはありしと雖も、氏の方針はハデにあらずして、ジミなりき。煽動的に非ずして、引緊的なりき。新渡戸氏其後を受けて、又積極的の古に復したりしやの觀あり、然れども新渡戸氏は木下氏の豪傑主義と其趣を異にす。氏の主義は紳士の養成にあり。但し其紳士養成なるものは、所謂成功者を作り成上り者を作るにあらず、當世才子を作り輕浮なる時代思潮に漂へるものを作るにあらずして、武士的紳士を作るにあるやに思はる。果して其理想を實現し得べきや否は問題なれども、氏の敎育主義は思ふに此を出でざるべし。然れども氏は樂學黨なり、嘉納氏が苦學黨なるとは異れり。氏は切れものなり、又狩野氏が內實的なるとは異る。

新渡戸氏は自己を吹聽するに長ぜり。然れども是れ必ずしも大風呂敷を廣げて名を賣らんとするにあらず。氏は安坐し考察し、徐に成り行きを見るが如き天性にあらず。仕事もしたく、演說もしたく、文章も書きたきなり。「歸雁の蘆」と云へる不得要領の題號を書

に冠して平氣なる人なり。云はゞ仕事師なり、才物なり、やり手なり。故に其學は博し然れども狩野氏の如く深きにはあらず。

新渡戸氏の人に接する城府を設けず、胸襟を披き語て倦まずと云ふ。特に面談日を設けて諸生と會談して感情の疏通をはかり、職員に對して制肘の愚をなさず之をして其能を盡さしめんとす。今の敎育家が敎育者面するものとは全然其行き方を異にす。世間と風馬牛相及ばずして、獨り狹隘なる敎育主義の下に齷齪する徒の固より眞似の出來ざる所あり。思ふに敎育をして實効あらしめんとするには職員をして居心善くせしめ、生徒をして居心善くせしむるを第一義とすべし。職員にして居心善からんか、安じて其職務に忠實なるべく、生徒にして居心善からんか、安じて其學を勵むべし。斯くの如くにして、學校騷動なるもの何の處にか發するの餘地あらんや。新渡戸氏の遣り口、最も我が意を得たり。

嘉納氏の主義は生徒を化するに於て難かるべく、新渡戸氏の主義は生徒をして謳歌せしむるに易からん。是れ主義の異同にあらずして、學校の性質の致す所なり。高等師範の生徒は老成人なり。入學以前に於て既に略々一定の型に入れり。況や學校それ自らが敎育家を作るなるに於てをや。高等學校の生徒は血氣盛りの若殿原なり。是を右すべく、左すべし。一は既成品にして、一は未成品なり。二氏感化の度合是に於て異る。

嘉納氏は一生敎育家として終るべし。希くば東京高等師範をして其特色を保存せしめよ。其主義本位を轉換して神經衰弱師範の顰に傚ふ勿れ。然れども新渡戸氏に至りては未知數なり。其利器は久しく敎育界に留るを容るさずして、後藤幕下として活動するに至るべきやも知るべからず。新渡戸氏の本意も或は彼に在りて此に在らざるに非るなきか。

今の敎育界此二人者を獲て、聊か其寂寞を破るに足れり。然れども猶ほ一の異材あるを忘るべからず。美術敎育に於ける岡倉覺三氏なり。一代の天才、空しく

俗界の容るゝ所とならず、屢々蹉跌せりと雖も、連城の璧久しく地中に埋沒すべきにあらず。今後の美術界又大に氏を要することあるべし。氏去りて既に久し今の美術學校の卒業製作を觀るもの、誰人か落日暮雲の感なからんや。美術學校は天才養成所なり、其敎育は天才敎育なるべし、斷じて凡才敎育なるべからず。嘉納氏は國士なり、故に其敎育は國士養成なり。新渡戸氏は紳士なり、故に其敎育は紳士養成なり。而して岡倉氏は天才なり、故に其敎育は又天才養成なるなり。

魚目のうち、猶ほ他に遺珠を混ずべし。然れども其見易きものを拾うて此三者を獲。乃ち以て我敎育界の珍となす。



鐵道特別會計

現内閣を苦しめつゝある政治問題の數は決して少とせざるも、中に就き最も行惱みの姿にあるものを鐵道特別會計の問題なりとす。事、一般の經濟界に影響すべき大問題たるは勿論にして、又大藏、遞信、陸軍等の互に意見の相違あるよりして見れば現内閣の運命にも關する問題なりといはざるべからず。何時も穩健着實の記述をなすを以て鳴れる『時事』は此問題を説明して曰く

鐵道會計が財政の關係に掣肘せられて常に鐵道の建設改良に消長を來

すが如き現制度を改正して全然一般歳計と分離して鐵道會計の獨立を計るべしとの建議案は昨年の衆議院を通過し政府も亦之に同意を與へたれば遞信省に於ては其後鐵道會計の獨立問題に付き種々研究調査の結果昨今漸く一種の成案を見るに至りたれども事固より大問題にして鐵道の經營に至大の關係を有するは勿論一般財政其他にも種々の關係を有する上に等しく鐵道會計獨立と云ふも其方法には種々あり一利の存すれば從て一害の伴ふの常にして是こそ萬全の良策なりとの妙案を得るに難きが故に鐵道並に財政に關係する遞信大藏陸軍の各當局者を以て組織せる同法調査會を設置して遞信省の提案に基き更に精査研究を重ぬる事となりしものなり同調査會に於ける調査の結果は愈々政府の議案として今年の議會に提出すべきものなれども遞信省の提案なるものは極めて秘密に附しあるが故に局外より其內容を確知すること能はずと雖も遞信當局者が常に鐵道會計法の改正に就き希望せる主點は即ち此改正案の中に存するものなれば此邊の事情より其內容の一斑を窺知する事能はざるにあらず其主要の事項と見るべきもの二あり一は鐵道の建設改良に要する經費即ち資本勘定に屬する資金は從來大藏省に於て募集する公債其他を以て充てたるを改めて鐵道主務者に之が調達權即ち公債募集權を與ふる事第二は鐵道の會計は資本勘定並に用材資金勘定の二法によりて收支の決算を爲したるものなれども是を改正し用材資金の會計を擴張して資本勘定と略ぼ同一のものとするか若しくは資本勘定用材資金勘定の區別を廢するか何れかの方法に依り會社若しくは商家の資本と同一なる働を爲さしむるの途を開く事是なり而して第一の事項は鐵道資金の公債募集權を遞信省に移すものなれば募集の方法並に募集額の如何に依りては一般公債に直接多大の影響を及ぼすが故に之に關する制限の程度等に就ては種々なる議論も起るべく第二の事項に就ては會計法上斯の如き資金の運用は果して行ふ事を得るや否やの法律論を先決せざるべからずして是れ亦種々の論議ある問題なりといふべし又買收鐵道會社に交附すべき公債をも鐵道公債として將來鐵道の發行する公債と同一ならしむるも亦會社獨立の一方法にして鐵道會社の株主は其然かならん事を希望し居れども遞信省の提案は買收鐵道に關する公債を一般公債と全然區別せざる事となせし代りに鐵道の收益を以て其公債に對する元利の償還に充つる事となるべし要するに鐵道會計獨立問題は單に鐵道當局たる遞信省より見るも其利害便否は容易に判斷すること能はざる程複雜の關係を有する大問題なれば調査に調査を重ぬるに非ざれば最後の解決を見ること能はざるべしと云ふ

又同じく穩健にして而かも時に警拔の論議を示す

『東京朝日』は此問題を評論して

鐵道特別會計調査なるもの組織せられ、既に一昨日を以て其一回を會合開催し、西園寺首相も出席、其目的に就て演述する所ありき。斯くて政府が今改めて鐵道會計の可否を調査するに至りたるものは、差當り銀行家の運動の爲に促されたるにも因るとならんが、元來前期議會

に於ける衆議院の建議にも基くものとす。但し鐵道は現今に於ても特別會計によりて經營せらるゝものなり。然るに今改めて之れを特別會計と爲さんと欲し、其可否に就て調査研究する所あるべしといふ。是れだけにては誠に無意味の如く聞ゆれども、而も今回の調査會は、從來の特別會計に更に一歩を進め、今後鐵道の延長改良に關しては、其資金を一般會計の供給に仰がず、鐵道の益金を以て直に之れを支辨するか、或は其益金を引當に公債を發行して、之れに充てんと欲するかに相違なし。即ち目下の特別會計に更に一歩を進めんと欲するに外ならざるべし。寧ろ鐵道の獨立經營といふを以て當れりとす。現に衆議院の建議に於て聊か其意味を看取するを得べし。而して何故從來の特別會計が不十分となり、今更之に一歩を進むるの必要を生じたるやといふに、從來の儘にては國有鐵道の擴張資金を得るに困難なるが爲なると言ふまでもなし。然れども吾人の見る所を以てすれば今一歩を進むる位にては尚姑息也。斯る姑息策にては到底十分に鐵道の擴張資金を得る能はざるべし。其理由を一言せんに、四十一年度の豫算に於ける鐵道の益金は約三千七百萬圓なり（買收鐵道の益金全部を計上す）これは鐵道廳が內地に於ける鐵道の總收入中より、營業費其他の經費を差引き、而して剩し得たる所の金額なりとす。されど此中には尚差引かざる可らざるものあり。第一は鐵道國有法に於る買收鐵道公債の利子是也。買收鐵道の公債總額は尚未定なれども、目下の處五億圓を下るとあらざるべし。其利子を年五分として二千五百萬圓。之れを差引けば殘額一千二百萬圓となる。次に買收鐵道に對する公債の外、政府は從來の國有鐵道の爲めにも、亦別に巨額の資本を放下し居れり。而して此資金中今日まで未だ償還せられざるもの、約一億二千萬圓あり。其利子を五分と見積りて六百萬圓。是亦差引かざる可らず。是れを前記の一千二百萬圓より差引けば、再殘高六百萬圓。此六百萬圓こそ目下の國有鐵道が、其收入の中より經費を支拂ひ、資本の利子を支拂ひ、其上にて剩し得たる純然たる利益金といふべきものなり。今政府が從來の鐵道特別會計に一歩を進め、其延長改良の爲に今後一切是を一般會計に及ぼさゞらしめんと欲するに就ては　種々の方法なきにあらずと雖も、要するに此六百萬圓を利用するより他に途ある可らず調査會が此六百萬圓を何如に利用せんと欲するやは未だ知る可らずと雖も若し之を以て直接に毎年の鐵道擴張費に投ぜんとならば無論不足なり。六百萬圓ぐらゐは今後每年の改良費にも足らざるべし。去れば此六百萬圓を引當に公債を募集することゝせんか。是亦多くも一億圓以上を得ること困難なるべし。此六百萬圓を擔保として外債でも起せば、或は一億圓內外の資金を得るやも知る可らずと雖も、內國債ならば七八千萬圓が關の山なるべし。現に第一回國庫債券の乘替は、八分八厘餘の高利を以て誘ひたるに拘らず、締切までの申込僅かに二千七百萬圓に過ぎざればなり。然るに鐵道の敷設改良の爲めには、少くとも每年三四千萬圓づゝの資金を要す。七八千萬圓の資本は僅かに二箇年を支ふるに足る。縱ひ一億圓を得るを假定するも、二箇年半を支ふるに

過ぎず。而して二箇年乃至二箇年半、遲くも三箇年の後には、又もや建設改良の資金に窮するに至るべし。要するに六百萬圓の純益にては、之を如何に利用するも尙不足を免れざるべし。況んや右は資本の利子は支拂ふも、元金は當分償還せざるの計算なるに於てをや。若し一般會計の目下の方針に從ひ、新舊合せて六億圓の鐵道公債を、今後三十年間に償還するものとすれば、其年額約二千萬圓となり、右の六百萬圓ては却つて一千四百萬圓の不足を見る。若又獨逸の例に倣ひ百年間に償還するものとすれば、其年額が丁度六百萬圓、右の純利は全然ゼロとなるべし。而して今後の建設改良費は一厘も出でざることとなるべし。鐵道特別會計は縱ひ一歩か進むるも、其目的を達すること極めて困難。而して鐵道の經營が右の如く困難となる所以のものは、畢竟之れを根本的に解決せずして、姑息策に出でんと欲するが爲に外ならず。吾人は之に根本的解決を與へんことを切望す。

といひ、現政府反對黨なる『東京毎日』は此案を攻擊して

鐵道問題は、今や西園寺內閣の壽命問題となれり、是れ素より新しき異象にはあらず、吾人豫言者にあらざるも、此事の必らず到來す可きは鐵道國有案提出の際明かに之を豫想して、大に抗論したりしも、西園寺內閣は好んで此の愚策を遂行し、今日に至りて自縄自縛、窮態容易に救ふ可からざるに至れり、國有案實行せられて未だ三年に滿たず、弊害は歷然として吾人の眼頭に在り、第一私設鐵道買收前後の事情より經濟界の混亂を生じ、特に價値の協定公債下附の手遲れよりして、混亂は更に歩を進めて紛雜言ふ可らざるに至り、朝野共に焦慮の苦心中に彷徨すると、第二鐵道の營業狀態寧ろ退歩の觀あると、第三鐵道の改良建設は殆んど不可能事たらむとする財政上の狀況なると、少くも此三大事實は如何に呑氣なる樂觀者と雖當惑せざるを得ざる所なり、吾人は今に及んて敢へて先見の明を誇るの痴態に出でんとするにあらず、只盲目的政治家の斯る事實を眼前に扣えながら、猶ほ且つ徒らに虛勢を張り自ら欺くを憫察せずんばあらず自ら欺くと雖一片の良心は鐵國案の創意者贊成者をして、長く其惡結果に堪へざらしむ、廿四議會の終末に及んて、鐵道特別會計案なる者の建議せられたるは、一面より見れば鐵國論者悔悟の證徵也、又一面より見れば彌縫の立策也、何れにしても鐵道國有失敗の活證據たらずんばあらず、之に就ては當時囘を重ねて本欄に論述する所ありしが、今や此建議案に基いて、政府は鐵道特別會計調查委員會なる者を作りたり、其根本動機は素より上述の原因に相違なしと見て太過ある可きに非ろも、本來會計獨立の結果は、之を豫想するに難からず、詳細の計算を玆に再掲する迄もなく、鐵道の純益金より買收鐵道の公債及び鐵道固有の資本に對する利子を差引きて其殘金を利子に充當して假りに公債を募集したりとしても、其金額多く見積りて一億圓を出でず、恐らくは七八千萬に止らん、此金のみを以てしては、僅かに三年間の建設費を補ふにも無論不足にして、會計獨立の効力は到底長く鐵道の發達を助成し得べくもあ

らざる也、吾人は既に建議案の議會に出でたる當時之を認めて不滿の聲を放てり、今日に至りても之に賛成すべき理由を發見し得難き也、而かも政府の當局者は何等かの冀望を此獨立會計案に繋ぎ、調査委員會までも設けたるは、蓋し苦し紛れの評定ならんも、恐らくは裏面の消息もあらん、人或は以て税法整理委員會の二の舞に類する者と爲し鐵道關係者及び財界有力者の壓迫に堪えず、その鋭鋒を避くる一手段にして、素より眞に獨立會計の成案を得んとするにはあらずと揣摩するも强ち空談にはあらじ、現内閣は斯の如き推測を受くる丈けの不信用は充分之を有す、亦怪しむに足らざる也、さりながら假りに成案を立つるとしても、鐵國の後始末は、之にて完成するにはあらず、差當りて公債下附問題は如何、來年度豫算に於ける鐵道事業費の組入方針は如何、政府は由來極て悠々たる調査を重ねて事局の困難を糊塗する習慣なるも、此問題に至つては何時まで悠々たる可きにあらず、悠々たらんとするも時日は之を許さゞる也、財界の苦情は益々强烈とならん、元老の壓迫も益々熱度を加へん、而して豫算の編成は日一日と差し迫りて恰かも疾風に煽られて枯草の野を燒く燒火の如く、現内閣に肉薄せん之が爲めに現内閣が致命傷を被り、或は頓死せんと云ふ風説も、全く無稽の談にあらず、而して是確かに政友會の爲めには苦痛ならんも、國民の爲めには祝福す可し、畢竟鐵道問題も全然根本治療を要とすれば也、

と論じたり。要するに此問題は目下の最重要なる政治問題なるを以て、當局者に於ても充分愼重なる調査を遂げたる上、議案として來るべき議會に提出せらるべし。吾人は隨時此消息を傳へて江湖の參考に供せんことを期す（澹蕩子）

政友會示威大會

六月十五日に開かれたる政友會大會が政治上如何なる意義を含めるや。最も政界の事情通にして兼ねて桂派の代表記者たる『國民』の門外漢は之を論じて曰く、

◎吾人は政友會の所謂る示威大會なるものに就て、最も公平なる態度を以て、觀察す可く候。彼等が今日に於て、斯る會合を必要とする理由は、何くにある乎。それ 來擧國一致を、本位として成立したる、西園寺内閣をして、純然たる政友會内閣即ち政黨内閣たらしめんとする下地に外ならず候。

◎今回の總選擧は、西園寺内閣に取りては其の性質の一大變革期に候西園寺内閣と申せば、前年も今年も、同一體に似たれども、其實は非常の變化也。切言すれば一大革命と申すも妨げなく候。元老も、中老も、實業家も、其他の國民も、最早彼等の眼中には、是なく候。彼等は此の機に乘じて、政友會を以て立ち、政友會に由りて立ち、政友會

の爲に立申す可き本色を發揮し候。

◉今回の示威的大會は、政黨內閣の旗揚げ會に候。吾人は斯く觀察するを以て、最も正鵠を得たるものと信じ候。若し然らずとせば、原君でも、松田君でも、長谷場君でも、杉田君でも、其の見當違の理由を、說明あり度候。本色を指示したりとて、別段迷惑もなかる可し。彼等若し虛心平氣ならば、他人心あり我之を忖度すと悦ぶ可く候。

◉過半數を制するが、總選擧を原君の手にてやる、唯一の目的にて有之候。然るに其ゝ目的は、幸か不幸か、相外れ申候。政友會の幹部は、二百名以上を得可しと、豫測致候得共、それは見事に相外れ申候。外れても二百に遠からずと申候得共。其實は一百八十三名と申すが、精確の數なりと承知候。

◉吾人が曾て政友會は、總選擧によりて、僅かに現狀を維持し得たりと申したるは、最も事實を穿ちたる評價と存候。然るに此の事實を誇張して、強ひて其の靈夢を現實にせんと企てたるは。如何に政略的とは申しながら、洵に以て笑止千萬と申す可く候。即ち西園寺總裁の演說が、無色、無格なるも、心底に其の弱味あるが爲めと存申候。

◉世人は今回の示威的會合なるものを以て單に黨員の景氣附けの會合と認め候。然も總選擧の結果は、兎も角も。政友會の策士等は、此の會合を以て、西園寺內閣の大革命成就を、表白するの好機會と致し居申候。

◉吾人は彼等が此の本位變革が、如何なる程度迄、實行せらる可き乎何時迄、繼續せらる可き乎を知らず。されど今回の會合には、冷靜なる政史的眼孔を以て見れば、極めて深甚の意義あることを一言致置き候。

又『東京朝日』の池邊主筆は同じく此事を論じて

一昨十五日を以て催されたる政友會新代議士大會は言はゞ過半數祭りらしく、之に依りて以て總選擧の結果を示し、且以て西園寺內閣存立の理由を明かにせんとするものなる可し。我憲法運用の實蹟に就て之を見れば、衆議院に過半數を有する政黨が必ずしも元首の信任を得るに定まれるには非ざれども、而も政府の當局者が如何なる傳統の政事系に屬するに論なく、衆議院に於て過半數の黨與を有するに非ずして、猶能く政權を支持したる者少きは、亦從來の實蹟の指數する所なり。去れば今の政府黨が從來衆議院の最大數黨たり、今過半數となるを得たる一事が、現內閣存立の一大理由たる可きこと、誰か敢て爭はんや。此時に當りて、從來現內閣の政綱政策に讚賞すること能はざりし吾人は、只現政府と其の喜びを共にし且その祭りを同くす可からざるを憾むのみ。豈他あらんや。而して吾人は更に別に現內閣に向つて聊か賀辭を呈する所なきを得ず。そは西園寺卿が其黨與を率ゐるに妙處あることを知りてなり。願ふに我日本に於て、藩閥以外、政黨を以て政府の基礎と爲し、若くは基礎と爲さんと試みたる政事家は、大隈卿の次に、伊藤卿あり。皆日本の大政治家と稱せらるゝ人なるに、前者の夭折頗る無慘、而して後者の失敗も亦憐を留めたり。中にも後者

は、今の政友會を率ゐて、而して一黨を以て當時の衆議院に過半數を占有し居て、而して之に據りて政府を支持せんと試みたると、恰も西園寺卿に似たる所あり。又日清戰後の經營を承けて、其歳計豫算の施行に大困難を有したることも、今の西園寺卿が日露戰後の經營に困頓し居ると相似たり。又輿論に謳歌せらるゝことの少きも、互に相似たり。然るに伊藤卿が貴族院に於ける其前内閣派即ち山縣派の激烈なる反對を受け、やがて其内閣の内部に破綻を生じて國務不統一の責を負ひ、忽然として敗れ退きたるに反し、西園寺卿が既に二年半間政權を保ち、今後猶その保持に易ならんとするを得るは、そもそも如何なる緣に依りて然る乎。吾人の知る所を以てすれば、是西園寺卿が一切其黨員を禁じて獵官せしめざるに因るなり、又漁利せしめざるにも因るなり（京阪電鐵に漁利せしめたる一件は有れど主として大同派に對してなりき）、而して又今の松田君原君が往時の星亨ならざるも因るなり。さらぬだに、政府黨の威張りは衆目の彈指する所と爲り易きに、加ふるに忌憚なき獵官漁利を以てせば、桂卿との提携援助を有したるにせよ、西園寺内閣が貴族院より大反對を被ぶりて、壞崩消滅し去りしや日已に久しからん、而して松田原二君と他の其同僚の折合も決して今の如くなるを得ざらん。只夫れ一切獵官せしめず、又成る可く漁利せしめず、此點が西園寺卿の德となり、又その政權支持の妙處ともなり、强味ともなる。吾人は之を認めざるを得ず。今後も此點に於ては相替はらず妙處を保ち强味を失せざる事ならんが、さて顧みるに此總選擧後に於ける現政府の政綱政策は如何、即ち天下を治むる其經綸は如何。吾人は未だ聞くを得ざるなり。今度の大會にては、目下頻りに國債整理財政整理並に行政整理等の聲の政府部内より傳はりつゝあるに際し何か之に關する新政見にても現はるゝことかと思はざるにもあらざりしが、矢張り豫期通りの默々なり。知ずや當局者の言は則ち行はる。言なきは則ち行なきなり。弱點此に在り。君人は之を指摘せざる可からず。此弱點は政府の過半數の太たしく弱き（或は過半數に達せずといふものさへあり）と共に弱し。

といへり。（佯狂子）

次號の說苑欄には

●島●村●抱●月●氏
●片●山●孤●村●氏
●佐●々●醒●雪●氏

●黑●頭●巾の卓說を收むべく、

●包圍せられたる伊藤公

も愈よ佳境に入るべく、其他尙ほ依賴中なり

次號小說豫告

題未定　田山花袋

自然派の驍將花袋氏が其大作『生』に於て一段の進境を示したるは世の熟知する所、此篇に於て又更らに如何なる一新生面を開くべきか、吾人の讀者と共に樂しみ待つ所也。

私生兒　岡本靈華

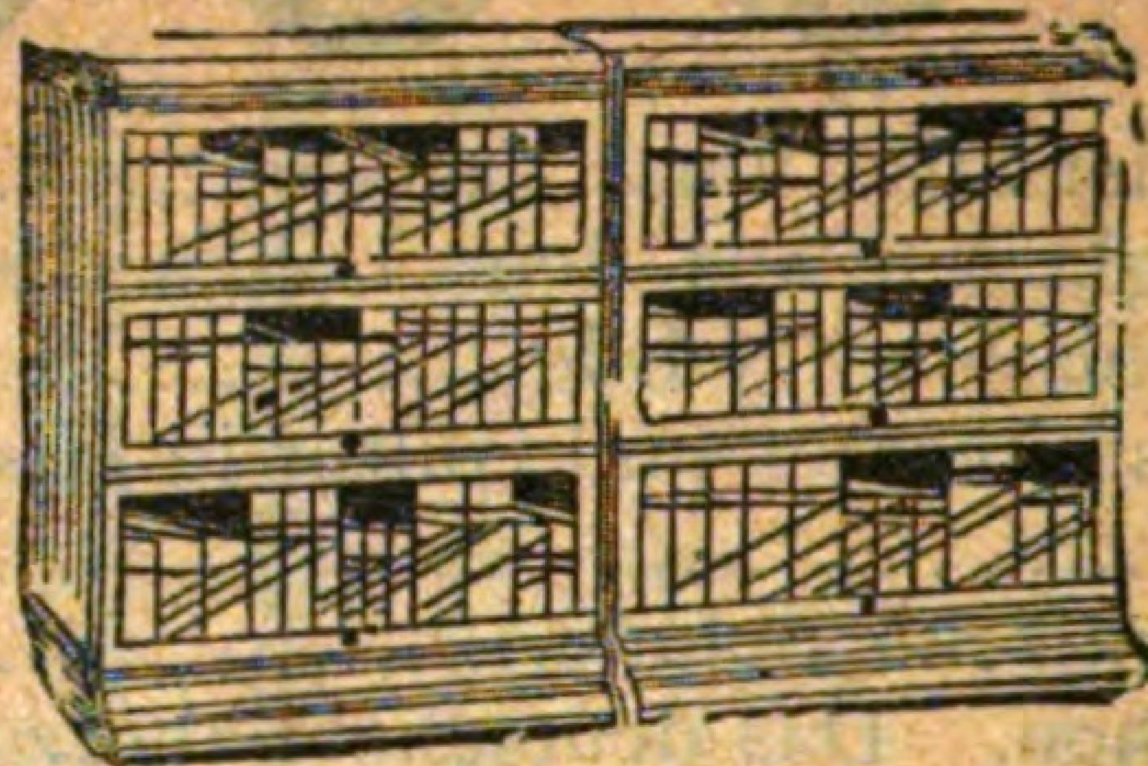
靈華氏は青果氏と並んで風葉氏の感化を受けたる最も有望なる作家と稱せられたり。而かも從來の靈華氏には左したる大作又は傑作なかりき。本篇は五十枚の長さあり、量に於て質に於て氏の作中第一の出來といふべく、次號の誌上に公にして江湖の批判を待つ。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

Shimbashido's Sectional Bookcase

（二組併列の圖）

It grows with your library



It fits any place

應接間、居間、書齋用、商店飾棚、帳簿函向、會社用、帳簿函向

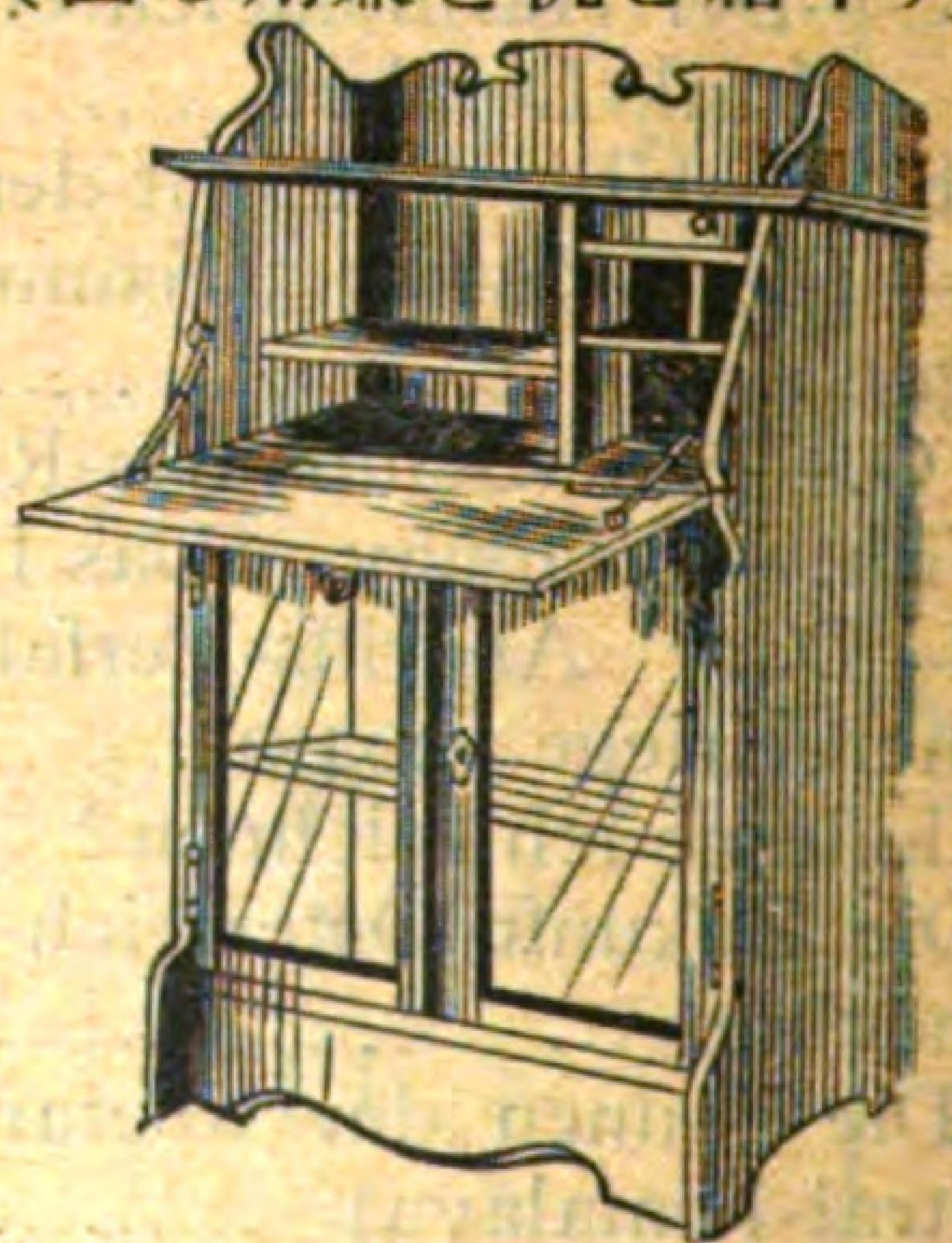
最新式 組合せ本箱 特製

●歐米諸國に大流行のセクショナル、ブック、ケースよりも數等進歩したるものにして特徴は
●材料はナラ樫を精選し
●堅牢此上なし
形狀優雅にして色彩美麗
●在來の本函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入便なり
●分解折疊自由なれば運搬自在なり
●一組の本箱は三個ッ段函を積重ね之に別にトップ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の増加に從ひ隨意に段函の數を増加し得べく、如何なる室にも適應すべし

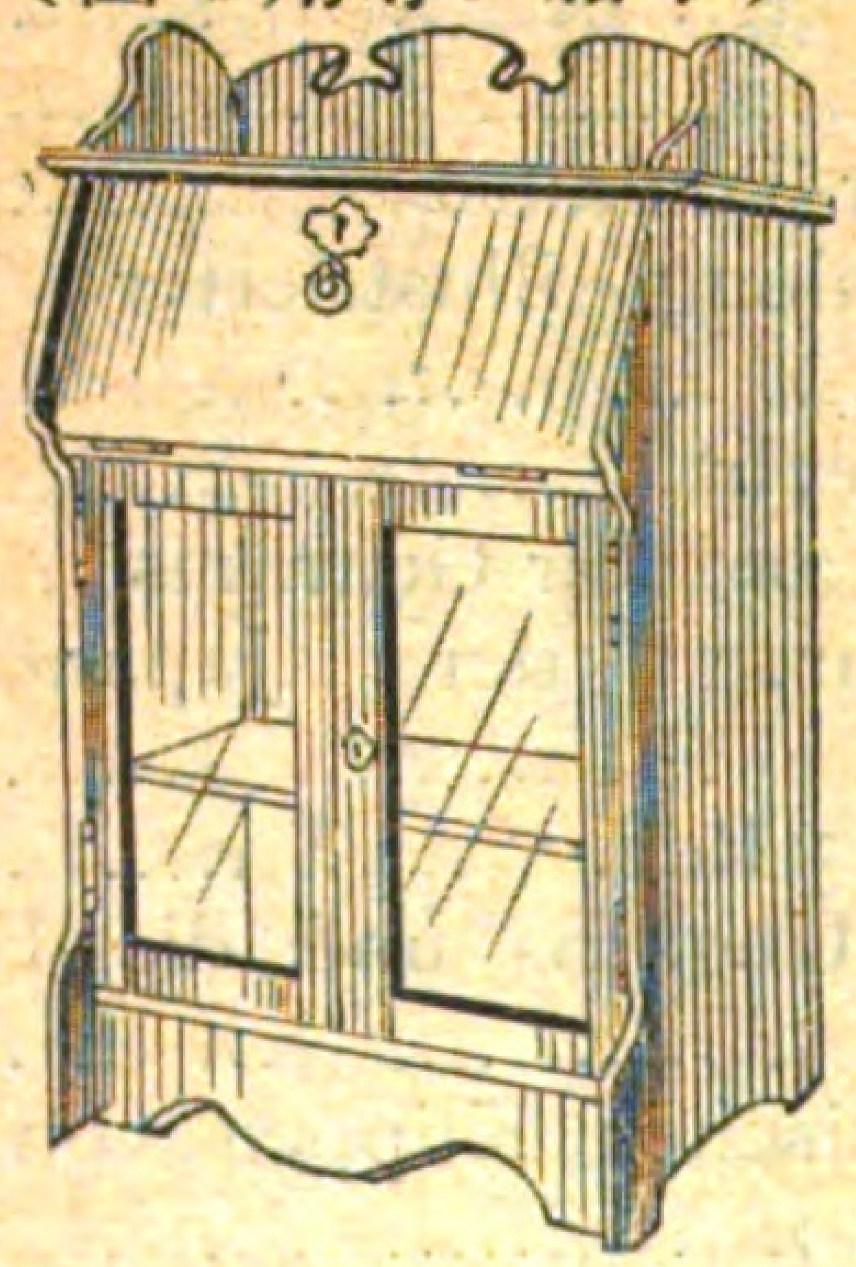
一組
總高サ三尺九寸五分奥行九寸四分間口三尺
定價金廿七圓
（荷造費共）
地方運賃御自辨

Shimbashido's ideal Desk

（本箱と机と兼用の圖）



（本箱に專用の圖）



Beauty and Convenience

Less expense

理想のデスク（本箱と机の兼用）

目下歐米諸國に於て盛に愛用せらるゝアイデイアル、デスクに弊店の實驗上種々有益なる改良を加へたる最新最良の理想的デスクにして次の特徴を備ふ

●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的なり
●上部本棚の戸は開閉自由にして、開けば机板となり、用終りて閉づれば元の戸となる故、如何に狹小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり
●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊、帳簿、書信材料其他一切のものを最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し
●實用的たると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室内裝飾具たるに足る

商店會社事務室用
紳士諸君書齋用
學生諸君勉學用

一個
高サ四尺四寸、間口二尺六寸、奥行一尺
材料シヨージ
定價金二十七圓
荷造費一圓廿錢
地方運賃御自辨

東京銀座大通新橋際 新橋堂書店 發賣
電話新橋三六七七番
振替貯金口座二百番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新著案内

Richthofen's Tagebücher aus China. 2 Bde	10.00
Roon, G.—Denkwürdigkeiten aus dem Leben des Generalfeldmarschalls Kriegsministers. 3 Bde.	12.30
Schroeder, L.—Inidens Literatur und Gultur in Historischer Entwicklung	11.00
Haym, R.—Die Romantische Schule	9.50
Weicker, H.—Kiautschou. Das deutsche Schutzgebiet in Ostarien	5.00
Francé, R. H.—Der heutige Stand der Darwin schen Fragen.	2.25
Richard Wagner sein Leben und seine Werke. Von R. Bürkner.	3.50
Bleibtreu, K.—Die "Offensiv-Invasion" gegen England	.50
Heintze, C.—Staats-Kredit	1.50
Revel, H. A.—Ihr Problem Die Geschichte des sexuellen Problems Einer.	1.00
Forke, A.—Die Völker Chinas.	.75
Haas, H.—Japanische Erzählungen und Märchen.	.30
Weininger, O.—Gedanken über Geschlechtsprobleme	.90
Georky, E.—Jenseits der Ehe	1 75
Wagner, K.—Krieg. Eine politisch-entwickelungsgeschichte Untersuchung	1.25
Beowulf.—Der deutsch-englische Krieg	1.25
Freese, H.—Bodenreform	2.50
Marquardt, R.—Der Harmonielehrer	3.75
Riemann, H.—Musik-Lexikon	7.25
Thibaut, A. F. J.—Über Reinheit der Tonkunst	2.25
Strausz, R.—Die Musik. Sammlung illustrierter Einzeldarstellungen	1.50
Gerlach, Dr. O.—Elbe-Schiffahrts-Recht	1.50
Vallentin, Wilh.—Paraguay. Das Land der Guaranis	3.50
Lüttwitz, F.—Das Angriffs-Verfahren der Japaner im ostasiatischen Kriege 1904-05	2.15
Dijck, J.—Wie lerne ich zeichnen? 3 Bde.	2.50
Viator, S.—Die Zukunft Österreich-Ungarns und die Haltung der Grossmächte.	.70
Diener, K.—Die Faunen der tibetanischen Klippen von Malla Johar (Zentral-Himalaya)	.20
Laudauer, G.—Die Revolution	.75
Henning, C. R.—Einführung in das Wesen der Musik.	.63
Weise, O.—Die deutschen Volkstämme und Landschaften.	.63
Sanders, D.—Geschichte der Deutschen Literatur.	1.25

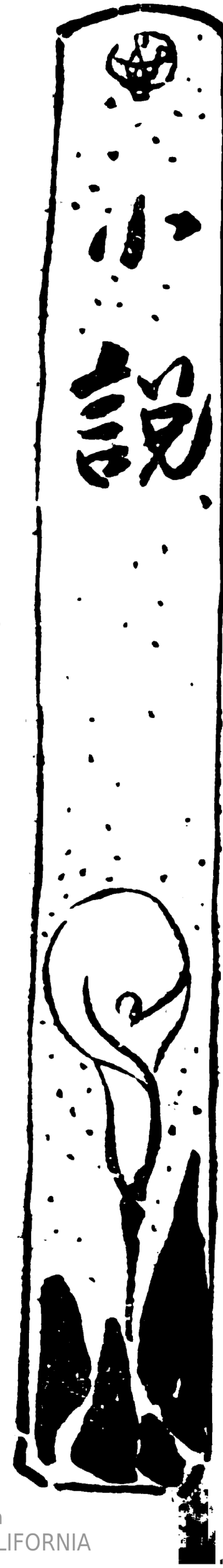
京都支店 郵便振替 貯金口座 九八七番

東京●大阪●京都

丸善株式會社

東京本社 貯金口座 第五番

大阪支店 郵便振替 貯金口座 第七四番



知己の一人

眞山青果

一

昨年の十二月、それも餘程押詰つての事である。ある雨の夕暮、僕は新年物の仕事に追はれて、何か短篇の小說を懸命に書いて居るところへ、友人のS君が一人の脊の圖抜けて高い青年を連れて來た。

その青年の噂はかねて聞いて居る。田岡某と云ふ北海道出の青年だ。可也筆も立つ頭も好い。第一今時の書生輩に似合はず、抱負も大きく、態度のコセ付かぬところも氣に入つた。仕立れば屹度ものになる、應分の世話はして見る積りとの事であつた。

「これが田岡だ、御覽の通りの野人だ、何分宜しく頼む。」と、S君は僕に引合はせる。

「僕は田岡です。」と、青年はその高い頭を些いと下げた。口に唾の溜つたやうな云方の男である。

S君は尻の長い人、それに仕事は今日が日限、旁々迷惑にも思つたけれど、何うせ為方がないと諦め

て、有合物を肴にビールなぞ抜かせた。北國から到來の烏賊の黑づくりも持出したが、S君はたゞ一箸嘗めたゞけ、色合に恐れて又と手も着けなかつた。田岡生は浸物でも食むやうに、ペロリ〳〵とそれをやつて居る。

「好く食べるね、僕にや何うしても手が出ない。」とS君は驚いて見る。

「旨くはないが、靴墨のやうで色が好いぢやないですか。」

「さう云ふ蠻人だもの、邊陲の奴は何うしても違ふよ。」

「僕は何うてアイヌだ。」と、カラ〳〵笑つて、矢張り喰べて居る。

田岡生は小倉袴の兩肱を張つて、瘦せた肩をグツト怒らせて居る。俗に云ふ堅瘦せの堅々と引締つて、色も黑いが、脊が圖拔けて高いので、僧服のやうにダラシなく胸元がはだかつて、手足の大きいのが無樣なほど目に立つ。窄け顏の骨立つた顏立ち。酒は多く行かぬと見えて、二三杯のビールに最う眞赤——紫氣の光る眞赤になつて、狹い神經質の顳顬に靜脈を紆らして居る。耳でも不自由で無いかと思ふほど、平常はポカンと口を開いて、ニヤリ〳〵と僕等の話を聞いて居る。そして、話出す時の癖で、眼鏡の上からその大きな充血した目て、横樣に先づヂロリと相手の顏を見たものだ。尊大と云ふよりも、寧ろ、厭味な目付である。僕は最初から氣に食はなかつた。

「些つとも興みませんね、僕等だけ喋つて居る。君の氣焰も伺ひませう。」と僕はその膝前のコツプに注いだ。

「え、僕は、酒は……。」と、それでもコップをグツト呷つて、尘勢が堅くなる。

「酒は不可ないんですか。」

「飲めば幾らでも飲めるけれど、飲んでも酔はんし、旨くも何とも無いです。」

「ぢや議論でも聞きませう、君等ぐらゐの時は盛んに意見のあるものだ、例へば文壇の事にしても。」と水を向ける。

「僕ア議論が嫌ひなんだ。藝術は議論ぢやありませんもな。」と、些か吃り口調である。

「然し作家だとつて、主張を持てぬ筈は無いでせう。主張や主義に拘束されて伸びないのは悪るいとしても、その作品に自ら或る主張の顯はれるのは、決して咎むべき事ぢや無いでせう。何うですかね。」

「僕は何うも議論は出來ない。今の作家連が議論に日を暮らすのを見ると、實に、實に、苦々しいですな。その間に書いたら何うでせう。」と、今度は自ら手を伸べて、ビールを手酌で初めた。

「然うですかね。」と僕も遂に口を噤んで了つた。

「然しね、石井君。」と、S君は僕を呼びかけて、

「あんな事を云ふが、田岡はこれて君の愛讀者なんだよ。何時かの、それ、(最後まで)なんか三度も繰返して讀んだッて話だ。」と幾らか執成振りてある。

「名譽だね、田岡君のやうな人に讀まれるのは名譽だ。」と僕は低く笑つてやつた。

「然し全く面白かつたんですもの、全くですよ、僕アあんな風の作品が大好きなんだ。」と、幾らか悦

て氣味で、又しても堅い調子になつて、「あの荒削りな、力の籠つた、そして鋭い筆付は誰にも眞似は出來ますまい、實に憎い筆だ。現代の作品は何れもメロ〳〵した、直ぐ泣き直ぐ悶ゆる、女性的のものばかりで、斯う極端まで男性の權威を發揮したものが無い、感情も自然も思想も、何れも島國的の女々しいのが多い。愚劣の極だ。そこへ行つては石井先生の作品は男性的だ。思ふに、これは、作家の多くが內地の箱庭的な天地自然にのみ跼蹐して居るからです。あゝ、そんな人達に見せたいなア北海道の自然です、原野、水流、深林、谿谷、海洋、何れを見ても偉大です、大陸的です、崇高です、森嚴です。」と言葉に躓き〳〵ながら、その吃口調で云ふ。そして、なるたけその熱氣を顏に表情しやうと勉めて居る。然し、唾液の飛ぶのは汚なかつた。

「田岡君は賞め上手だ、仲々何うして隅にや置けないよ。」と、僕は笑ひながらビールを酌してやつた。

「賞めるんぢやないです、僕ア全くあの（最後まで）の男性的な大きい所に惚れ込んで了つた。」

「だから、難有う、と僕はお禮を云つて居ます。」

「然う、然う云はれると、何だか僕が貴方に媚びて、そして作品を賞めてるやうでは工合が惡るい。僕アおべッかが大嫌ひだ。全く僕アあんな作品が大好きなんです、本當ですよ。」と、マジ〳〵と僕の顏を見て居る。

「ひどく言譯しますね。」

「本當なんです、僕アおべッかと見られるのが心外なんだ。」と、赤くなつて悄げて了つた。
「何か書かれた事がありますか、雜誌へでも出たもので。」
「いゝえ、何も別に。」と、口籠つて、「僕アこれから修養します、五年、七年、何年だつて勉强する。乾度大きな作品を書いて見せます、乾度。」と自分の掌で、自分の拳をピシ〳〵擲つて居る。如何にも興奮し切つた樣子である。

S君は最う頭をフラ〳〵させながら、「あるぢや無いか、そら××雜誌に書いた何とか云ふのがあるぢやないか。」
「あんなもの。」と、田岡は言下に卻けて、「ありや喰ふために書いたんだ、今に、今に乾度書いて驚かしますよ。」と、幾らか耻ぢる色があつた。

二

何かの機會で戀の話が出る。それにはS君が先達で、戀のデフィニションをあれのこれのと論ずる。自分に最も近くその經驗があるので、自然口に出るのであらう。詰り、斯う云ふのだ。
「戀は闘なり。互に相手の短所を握まうと闘ふのだ。卑怯なる人は、自分の弱點を示さずに、敵の短所を握らんとする。それ以外に何も、何事も無い。」と云ふ。

僕は然うぢやない。
「戀は單に遊戯だ。遊戯にも極めて危險な遊戯がある。戀はその最も危險なる遊戯、小兒の火弄りのや

うなものだ。問題として論ずれば難かしくも面倒にもなるが、事實としては極めて簡單(シンプル)な詰らぬ衝動てある。」と云ふのだ。

酒の席には戀の物語ほどさかなになるものは無い。僕とS君はその話に耽つて、何時までもその問題を論じて居た。田岡生はと見ると、これは又默つて、例の人を馬鹿にするやうな笑方て、ニヤリ〳〵と聞いて、時々眼鏡越しにヂッとわれ〳〵の顏を見較べて居た。

何時まで經つても結論はつかぬ。付かぬ筈である。僕等は戀その者を論じて居るのぢやない。たゞ互の違つた戀の經驗を較べて居るのに過ぎないのだ。多くの場合、誰にても然うだ。

「ねえ田岡、君は何う思ふ、Love is struggle. さ、これが僕年來の持說なんだ。」と、S君は田岡を味方に取つた。

「さあ、僕にや分りません、僕その者は戀の出來ない者なんだから。」

「戀が出來ないッて、馬鹿を云つてる、天下に戀の出來ない不具があるもんか。酒を飮めば醉ふ、同じ事ぢやないか。」

「所が僕はその酒にも醉ふ事が出來ない。理智に頭が醒めてるんてすな、冷たいてす、だから、酒に醉つたり、戀に醉つたりして居る人を見ると羨しい、僕もあゝなられたらばと始終思ひます。」

「尤も君ぢや相手が無いからな。」と、S君はソロ〳〵口が惡るくなる。

「相手はありますよ、今日までゞも經驗はある。然し何うしても愛する氣になれない。一度ローマンチッ

クの戀に醉つて見たいと思ふが、何うしても出來ない。全くです、頭と胸とは別です。心臓(ハート)は溫かい感情を求めながら、心は僕等にその果を取る事を許しません。實に不幸だと自分で慨いて居るのです。」

「君は幾つだね。」 僕は横合から口を入れたものだ。

「二十三です。」

「二十三にしては哲學者だ、僕等は三十を越しても未だ自分と云ふものが分らない。」

「然う云はれると何んですが、僕は何う云ふものか頭が冷たいです、反省する力が強くて困る。」

「と、自分でだけ思つてるんだらう。」 とS君も笑ふ。

「然うぢやないですよ。」 と自分も笑ひながら五分刈の頭をゴシ／＼搔廻して、「それに、僕ア始終男性の權威と云ふ事を思ふ。電車なぞて貴婦人と乘合せても、渠は女性なり、余は男性なりと思ふと、慥かに渠を引付けチヤアムし得る權威を自分は持つて居ると云ふ自信を持つてす。僕等は男性だ、愛せずにも愛せらる可きものと、固く信じます。」

「こりや驚いた、寧ろ狠に戀する貴婦人なら想像する事も出來やう。」 と、S君は無上に笑ふ。

そんな事でその日は二人歸つた。そして、歸り際に、田岡も目下糊口に窮して居る、何か適當な仕事口があつたら見付けてくれるやうにと、S君は呉々も賴んで歸つた。僕はたゞ好(よ)いほどの返事をして置いた。

三

その後田岡生には餘り逢はぬ。尤も、僕の留守へ一度來て、今度何とか云ふ文學會を起したから、是非出席してくれるやうにと言置いて行つたが、僕の性分として、多數會合の席は好まぬゆゑ、その日の會には端書を出して斷りを云ふた。後ちにその會の記事の某青年雜誌に出たのを讀んだところ、田岡生はその幹事で、大分氣焰を吐き散らして居るやうだ。

二月初め、僕は賴まれて某――茲には假りに新文藝と云ふ月刊雜誌の編輯主任となつた。さも無くてさへ怠け者の僕は、時間の制限ある刊行物の編輯に弱り切つて、誰か適當な助手をと探した結果、思ひ付いたのは田岡生の事である。で、早速S君へ手紙を出して、田岡生に來て貰ふやうに賴んだところ、S君の返事には、御好意は小生よりも謝する、早速當人に傳へて、早速伺はせる事にした。唯然し、前以てお含みを願ふ事には、餘程鞭撻して使つて下さらねば困る。あの通り、頭も出來て一種の見識もあるが、何分にも疎懶で困る、目を怠れば隨分怠けるから、その積りで居て頂きたい、との事であつた。

間も無く田岡生がやつて來た。この前の時と違つて、木綿ものながらもサッパリとした紺絣の綿入に對の羽織など着て、帶もメリンスの新しいのを締めて居た。たゞ何う云ふ者か、白キャラコの襟の付いた汗襦袢の襟を揃へて居た。早速に雜誌の用件を話すと、幸ひ暇で居るところゆゑ、出來るだけはやつて見ます、と云ふ。

「然し御案內の通り、極めて切詰めた財政の雜誌で、君に對する報酬の如きも、殆んど僕の俸給を割いて差上げるやうな次第ですから、その邊は豫め御承知を願つて置きたいと思ひます。」

「え、承知しました、僕は報酬なんて、そんな者は望みません。僕を選んで下だすつた御好意に感じても大いに働いて見ます。」
「と云つた所て、要るものは要る。露骨に云つて頂く方が好い。」
「全くです、金は全く要らないんです。」
「家からでも學資金が來るんですか。」
「云つてやれば來ます、それに伯母も下谷に居ますから、大丈夫です。」
「然うですか、ぢや遊び半分やつて見て下さい。雜誌の方が成績でも好ければ、その時は相應の報酬も上げる事にして。」
「え、何うか然うして下さい。僕は金錢の事を云ふと、實に自ら賤しむ氣がしてならんのです。」と何迄潔白な口振りてあつた。
その晩、晩酌を一緒にやりながら、偶と思付いて、今日S君から云つて寄來した、その事を話した。
「君は隨分怠ける方だつてね、雜誌の編輯には時間が大切だよ。」
「誰がそんな事云ひました、僕あ決して怠け者ぢやないです、書いてなら朝つから晩までだつて机を離れません、飯を喰べる時間も惜しい位です。」
「然うですか、そりや何より難有い、S君の手紙て見ると、恐しい怠け者のやうにあつたから。」
「Sさん?」と、僕の顔を見る目が、他の心を圖るやうに動いて、「Sさんがそんな事云つて來たんです

か、何時てす、他に何か僕の事を云つてられますか。」

「いや、別に他には。」

「僕は怠け者だつて、それだけてすか、その事の外には無いてすか。」と、些と慌てた氣色が見える。

「甚く氣にするね、何か外にも云はれて惡るい事てもあるんてすか。」

「いゝえ、何もありません、あれば僕の性格てすから皆喋つて了ひます。然し、他から彼此と忖度されてる事は好まんてすからな。」

と、話はそれだけになつた。そして、その月から雜誌の編輯に關係させる事と定めた。て、最初は先づ訪問記者、そちこちの談話筆記を集めさせ、紙數を以て原稿を買ふ事とした。と、三日ほど過ぎて、五十枚ばかりの原稿を持つて來た。人數にして六七名、その奔走ばかりても一仕事なのに、中には談話謝絶て有名な某氏や某博士の談話錄なぞもある。試みに讀んて見ると、一應の理旨は徹透して、質問振りも可也突つ込んて居る。

「何うしてこんな原稿を取つたね、特にこの××氏なぞは、容易に談話をしてくれない人だが、誰かに紹介狀ても貰つたかね。」と、訊くと、

「いゝえ、直接訪問しました。」

「好くおいそれと逢つたね。」

「逢はなければ何度ても押懸けます。逢ふと云ふまて、××博士なぞは一日に三回も行きました。」と

相變らずの無造作てある。

「亂暴だね、それぢゃ大抵あやまるよ。そして何と云つて賴むね。」

「僕はこれて喰べるんだから聞かしくれと賴みます。」

僕は相當の報酬してその原稿を貰ふ事にした。

後、S君に遇つた時、この話をするとS君は、

「それは好い鹽梅だ。然し注意してくれ給へ、中々馬鹿ぢゃない男だ、それに他から聞いた事もあるから。」

「聞いたつて何の事だね。」

「何うも何か出來てるらしい。遊びても覺えたんぢゃないかしら。」と云ふ。

「眞逆、あの男にそんな事はあるまい、第一風を見ても知れるぢゃないか。」

「さア僕も然う思ふがね。」と、煮切らぬ返事てある。

他が他を餘り信じ過ぎてるのを見ても貶したくなるもの、特に田岡生はS君の門下同樣のものだ、或はそんな點から反感を持たぬとも限らぬと。その時僕は思つた。田岡生には何も話さずに、相變らず知らぬ顏して居た。

四

田岡は好く下宿を轉ずる男てある。僕が知つて以來、三月ばかりの間に、三度も宿が變つた。今度は

矢來の三番地とかに轉じたと端書が來た。

何時か三崎と云ふ青年が來た時、これは田岡の友人で早稻田の文科大學に居る、新體詩などやる男だ、これにその話をして田岡の行狀を尋ねると、

「さア、どんな譯ですか、好く變る事は變るやうです。」

「經濟上の苦しみでもあるのかね。そんなに轉宿ばかりするやうぢや。」

「それも無論ありませう、然し。」と、その偏平ッたい顏を妙に笑つて、「その他にも何か煩悶があるてせう。」

「煩悶たつて、あの男に何があるものか、變だね。」

「變ですよ、全く。」と、ばかりで深い事は云はぬ。そして、

「兎も角一度尋ねて御覧なさい、先生なら乾度氣の付く事があるてせうよ。」とニヤ〳〵笑つて居る。

その後、二三日して、田岡は鋭い顏して僕の家を訪ねて來た。朝も可也早かつた。今起きるから待つて居給へと云ふのも聞かずに、ヅカ〳〵と僕の枕元に來て、そこに座つて了つた。

「何うしたね、馬鹿に早いぢやないか。」

「先生、僕ア斷然雜誌の方の關係を斷ちます、今日までの御好意は決して忘れません。」と、云ふ聲色まで變つて居る。餘程激して居るやうだ。

「何うしてね、突然。」と僕は半分床の上に起上つた。

「實に今の文壇は愚劣だ。小人輩の雜居だ、僕アかゝる糞尿の徒に伍する事を耻辱とします。」
「甚く激したもんだ、譯を話して見給へ。」
「何が何んでも厭てす、僕はかゝる文壇に活きる位なら、北海道に歸つて百姓します。馬を飼つて羊を飼つて、その方がどの位暢氣だか知れたもんぢやない。」
僕も些と小癪に觸つた。
「ぢや然うしたまへ、僕ア止めないから。然し、然う無闇に文壇の惡口をする事は含し給へ。僕もこれてその糞尿の徒の一人だからね。」
「いや、僕ア先生を云つたのぢや無いんだ。先生の好意は蔭でも僕始終感謝して居るんです。」
「忌憚なく僕に云はせると、君は然う文壇を罵るだけの資格はない。何故なら、君は未だ文壇の人ぢやないもの。君は何に激して云ふのか知らんけれど、これて吾々は皆眞面目に努力もし苦痛も甞めて居るんてすよ、洒落や道樂に書いてるのぢやない。それを君のやうに、然う一口に罵倒されると、全く好い心持はせんよ。」
「全く、僕、先生を罵つたのぢやない。誤解されては困ります。」
「最少し愼重の態度を執り給へ。君は餘り傍若無人過ぎる。自信あり抱負ある人は決してそんな輕卒はせん筈だ。」
「誤解だ、誤解だ、先生は僕を誤解して居るんだ。」と、田岡は膝に手を付いて、俯向いて座つて居る。

その時何氣なく見ると、開張かつた襟の下から、女着の肉色メリヤスの肌襦絆がチラツと見えた。

「妙なもの着てるね。」と云ふと、田岡は慌てゝ襟を掻合せた。

「ぢや、何うしても雜誌の方は舍すんだね。」と、暫くして尋ねると、

「え、舍します、僕は今心的革命の第一歩を踏出して居るのです。此頃熟々と眞面目の必要を感じました。僕等は全く今日まで誤つて居た、眞摯で無きア駄目だ、世界は何時も眞摯なる人の世界です。」その大きな目に涙を溜めて居る。

「然し、誰も君を不眞面目と見る人はあるまい。」

「有つても無くても、僕は誤つて居た。先生、何うか僕のこの革命を助けて下さい。僕は今の文壇に眞骨頭の男子は貴方の外には無いと崇拜して居るんだ。僕は百人の人に憎まれるより、先生一人に捨てられる事が悲しい。僕ア今實に苦しい革命の渦中に立つて居るんです。」と、ホロ〳〵涙を膝にこぼして居る。

「だから、その事實を云つて見給へ、事實を云はんぢや解らない。その上では又力にもなるさ。」

「事實てすか。」と渠は涙に汚れた顔を、拭ひもせずに正面に上げた。

「何が然う急に發心する動機になつたんだね、それ話し給へ。」

田岡は暫く押默つて、何か考へて居たやうてあつたが、やがて、「事實も何も無いんてす、唯この頃偶とした事から、生存の意義を考へたんてす。何故に生を苦しまざる可らざるか、と、そんな事まで問題

になります。」

僕は偶と思付いた事があるので、

「君、そんな事を云つて、或ひは懸てもして居るんぢやないかね。」と、尋ねて見た。すると、田岡は甚くトチつた樣子て、

「決して、決してそんな事はありません、誰がそんな事を云ひました。」

「誰も云はんけれど、そんな事ぢやないかと思つたのさ。」

「S先生てすか、三崎てすか。」

「いゝえ、誰にも聞かんよ。」

「實に渠等は小人だ、他を忖度する事も實に甚しい。」と切りに憤つては居るものゝ、その聲は甚しく慌てゝ居る。そして、僕が逵つて止めるのも聞かずに、プン〳〵憤つて歸つて行つた。

歸り際に、「先生、雜誌の關係は止しても、僕は飽迄先生の崇拜者てす。當分はお目に掛りまんけれど、何うか文壇のために自重して下さい。」と、こんな心細い事を云置いた。

その晩、直ぐ折返して、手紙が來た。吾世は寂しい、と云ふ書出しにて、文壇の狹小、偏執、欺瞞なぞを長々と咀つた文句て、要件と思はれる句は一言も無つた。そして、相變らず玆にも僕にお世辭を振掛けて居る。

「何かしてやがるな。」これ僕がこの手紙を讀んだ時、呟いた言葉である。

五

午前六時の汽車、上野に友人を送つての歸り道、偶と思付いて田岡を金助町の下宿に尋ねた。田岡の移轉癖は相變らずて、當節はその金助町に居る。別れてから二月ぐらゐになる。手紙は始終來るが、一度も逢つた事がないので。

田岡の寄宿してる家は見窄らしい煙草荒物の小店だ。ジクジク濕つたドブ板を渡つて狹い露地を入ると、勝手口があつて、そこから二階へ上るのだ。

「田岡君は居ますか。」と臺所口に居た小女に尋ねて。

「田岡さんてすか。彼在いますてせう。」とツンケンした返事である。

「寢てますか。」

「何うですかね。」

僕は腹が立つて、案内も待たずに、ガタピシする梯子段を上つた。

「田岡君。」と僕は上り段の邊て大聲に呼んだ。

薄汚れたどてらに細帶して、田岡は飛んて出た。僕の顏を見ると酷く慌てたさまて、

「や、先生。」とばかり、俄かには聲も出ない。そこへ突立つた。

二階は二間、片方は物置同樣にガラクタ道具を押込んてあつた、その奧の長四疊が田岡の室らしい。

「暫くだッたね、何うしたい。」と僕は笑顏を振向けた。

「僕この頭中に御伺しやうと思つて居たんです。」

「酷く見限られたもんだ。」

「全く僕參らうと思つて居たんです。」と、矢張りそこに突立つて居る。

「お客樣か。」と僕は小聲に聞いた。人の氣勢がしたからである。

「いゝえ、何有。」とマゴついて、「まア好しい、お入んなさい。」と、ドシ〳〵と先に入つて行く。

若い女が一人居た。牡丹色の被布をリボンで結んて、女學生風に裝ふた女が、僕の入つて行つたのに慌てゝ汚ない更紗の敷物を出してすゝめる。十八か九ぐらゐ、雀斑のある、小造りの、發育の不良らしい女てある。

僕は何と云ふ事なしに、背後から來た田岡の横腹を肱て小突いてやつた。

「いゝえ、何有。」と田岡は仕方無さゝうに高く笑つた。

女は存外世馴れて居る。初めは些いと慌てた風てあつたが、直ぐ最う馴々しく構えて、火鉢やらお茶やら、敏捷い取廻しで僕をもてなす。何々してゝよ、然うなの、斯うなの、その言葉付きの輕薄なのは厭だつた。

田岡は最う觀念の度胸を定めて、懷手のまゝ机の前にドカリと座つて、度の強い近視眼に煤ぼけて黄色い瞳子を凝つと見詰めて居た。顔が變つたと思つたら、目鏡をかけて居なかつた。

湯を取りに女の下りて行つた後で、田岡に、「何んだねあの人は、何時から居るんだ、些つとも知らな

かつた。」と問ふと、渠は唯エヘラ笑ひして何も答へぬ。そんな事は何うでも好いぢやありませんかと云つた顏付てある。
「あれが心的革命かね。」
「えゝ。」と口を開いて笑つて居る。
「君は戀の出來ん人な筈ぢやないか。」
「えゝ。」
「然し不可んぜ、大事の時だ。些と自重しなくちや。」
「僕ア最う何も云はない、結果が結果だから何を云つても信用される筈がない。」
「然し一應は僕等にも相談するのが當り前ぢやないかね。」
「然し、何うも僕にや出來ません、義務と云ふ事が激しく心に働く所以もあるでせう。どんなに苦んでも悶えても、自分て拵えた種は自分て刈らなきア承知の出來ない性分ですからなア。」と、頭をゴシゴシ掻廻して居る。
「でも然し二人ぢや生活が苦しいだらう。」
「え、苦しいてすよ。」と悄げ切つて居た。
その女が上つて來た。下の小女が失敬だとか云つてブツ〳〵云つて居る。
「勉強は出來るかね、何か書きましたか。」

「別に何も書きません。」と流石に耻ぢる色を見せて、「僕ア駄目です、何うも成功しさうがない。」

「何故。」

「何故ッて事もないが、熟々近頃悲觀する時があるですよ。」

「不可んね。」

「えゝ。」と俯向いて居る。

するとその女が横合から口を出して、

「本當に困りますのよ、近頃は妙に悲觀ばかりして、創作に怠けるんですもの。わたくし始終傍から勵まして見るんですけど、矢張り駄目なのよ。」と、厭にキチンと座り込んで、小說か芝居で覺えたやうな貴族的の口の利きやうをする。

「第一一人でこずんで居るから不可んよ。僕等の所へも些と來給へな。」

「然うなのよ、引込思案ばかりして居ちや駄目よ、矢張り些と出て活動しなくちや不可ませんの。」と、この調子だ。

僕は厭になつて、直ぐ歸つた。二三日中には乾度尋ねて來る約束である。

六

然し田岡は當分來なかつた。て、S君とも相談の上、暗にその愚痴を諷して、もとの勤勉に復るやう、手紙にてすゝめた。すると直ぐ返事を寄來した。それは、こんな意味であつた。

渠女の余を戀せるは事實なり、余の渠女を愛するも事實なり。事實なり、事實なり。されど、余はこの事に關して先生の忠告を聞かんとは思設けざりき、余には全く意外なり。何となれば、曰く、余は戀のみに活き得る男にあらざるなり。この事は先生も知らるゝ所ならんと信ず。

余には野心あり、燃ゆるが如き野心のあるあり、戀の實の如何にあまければとて、功名を棄て野心をすてゝまでその中に耽溺し得ざる余の性格は、先生も悉さに知了せらるゝ所と信ぜり。

余は、正直に云ふ、渠女の感情を弄ぶに過ぎず。唯渠女が、「私は御身を愛す。」と叫びて余の頸を抱く故に、余は拒まずしてそれに從ふのみなり。

男子の野心、これ何物にか代るべき。

余にありての戀は、鬪にもあらず、遊戯にもあらず。

たゞ一の僞なり。戀よ、僞よ。この二つは二にして一なり、一にして二なり。

この手紙をS君に見せた所、S君は甚く感情を害した樣子で、

「これだ、これだ、今の靑年の多くは總てこれだ、惡事を矜りにして居やがる。」と憤つて居た。

「小說の罪もあるね。」と僕は笑つた。

程經て、田岡は突然やつて來た。少しく思ふ所があるから、自分の過去現在に就いては何事も問ふてくれるな。自分の事は自分にする。たゞ一つ、今日來てのお願みと云ふは、この頃中から大苦心の上、一つの小說を書いた。無論短いものである。讀んで見て價ありと思はゞ僕の關係して居る雜誌へ載せてくれとの　てある。

「今持つてますか、兎に角拜見しませう。」

「これてす。」と懷から原稿を出した。二十枚ばかりの短篇だ。例の達者な惡筆で、讀めないほど亂暴に　いてある。

僕は横になつて、煙草をくゆらしながら讀んだ。

梗概を云へば斯うてある。或る學生と女學生が、偶とした關係より深くなり、女學生は遂に姙娠して了つた。て、二人は身の振方に窮して、諸方を流浪した末、ある湘南の一旅宿へ泊つた。前は直ぐ海てある。月の無い、暗の夜、二人は食後の漫步に濱邊へ出て廢船の陰に休んだ。

六月の海潮は暗にも鳴り溢れて、沖は光り浪は燐に燃えた。すると、女は急に身を顫はして一緒に死んでくれと云ふ。男には無論死ぬ氣がない。死ぬよ、死ぬよ、と云ふ口の下から遁げやう〳〵と遁げる素振が顯はれる。女はそれを見て、恨んて、泣いて、男の不實を云罵つた結果、遂に海に投じて自殺して了ふ。翌朝、男は宿の人を賴んで探しに出て、磯に打上げられて無慘なる女の屍體に泣くと云ふ筋。そして、最後の一句を、「あゝ、男には戀が無い。」と泣いた主人公の言葉に結んてある。

「何うでせう、出來は。」と田岡は待兼ねて聞く。

「正直に云ふが失敗だね、こりや處女作として君の名を署すべく餘り幼稚過ぎる。それにこの二人の對話でも見給へ、餘り淺薄過ぎるぢやないか、最少し突ッ込んで書かれさうなものだ。まるで、新派のお芝居だ。」と歯に衣せぬ所を云つた。

「然うですかね。」と大きな目を据えて、僕を見る顔には、失望の色が有々と限取つて見られた。

「餘程苦心の作かね。」

「いゝえ、そんな事もないですが、駄目ですかね、然うですかね。」と未だ思切りが付かぬ樣子である。

「君、然しこれは君の事實譚なのぢやないかね。實際にあつた話ぢやないかね。」

「然う然じやないですよ、無論空想です。」

「あの女の人は今も一所かね。」

「えゝ。」と煮切らぬ。

「實際でなければ好いが、若しそんな事があるやうだつたら氣を着け給へよ、君は今大事の身體なんだ。」

「え、眞逆に自分まで忘れやしません。」

その後、僕は田岡の消息を知らぬ。

（完）

八幡山

杉山美峰

一

「へーい、たゞ今。」

恁う女の回答がして、階段をどた〳〵と上つて來る。立た儘で障子を開けてべたりと座つた二十四五の女は。綽名を海豚と云れる丈けに、でぶ〳〵肥滿つた身體の割には莫迦に眼の小さ過ぎる、お高といふ酌婦である。

「はいお待ち遠うさま。」

と銚子を出す。ほんのりと目の縁を赤くしてぽーつと醉ふたらしい軍服姿の男、酒盃を取つて笑ひながら、

「へーい、たゞ今。そんな當番の返事があるもんか。はいつ、今持つて參ります。と恁う凛乎言ふんだ。可いか。」

「はいつ、今もて參りますっ。」

と早口に言ふと、

「うむ、好し〳〵。なか〳〵上手ぞ、それでこそ當番になれるわ、はつはゝゝゝ。」

「おほゝほゝ、甘味いてせう――ほんとに薬嚢さんは面白い人ね、相變らず……。」
「うん、お前らに褒められると己れも名譽だ、はゝはゝゝ――可めいーよのくんーしよう お股にかーけーえかな、はゝゝ醉つたぞ〱。」
「おや〱、股になんぞ掛ける勳章があつて。」
「おゝあるとも、英國にはガーター勳章というて足にさへ着ける勳章があるんだ。日等勳症というて、其形は、まあ梅の花だな、意氣ぢやないか。」
「どんな手柄をすると貰はれるの。」
「そりやあ、その、なんだ、つまりお前達の樣な、その別嬪さんと許り……だと可いんだが、汚たないぼろなんか買ふと、直きに貰ふことが出來るんだ。」
「しと馬鹿にしてるよ、このしとは――さう〱別嬪さんてばね薬嚢さん、此家へなか〱の別嬪さんが來ましたよ一昨日――招んであげやうか。」
「お情けにどうぞや呼んで下さいまし。」可笑な顔をして舌をべろりと出す、
「舌なんぞ出さなくつても好ぢやありませんか。」
「だつてさもお情けに呼んで遣はすってえやうなことをおつしやりやがるからさ。」
「然らば只今招んで遣はす。ぢやないか、おほゝほ――お粂さーん、ちよいとお銚子を一本持つて來て頂戴な――憚り樣。」と調子外れの高い聲!。自分ながら可笑しくなつたと見えて、後でくすりと笑つた

のだ。

「お榮つてえのだね、えゝ名だな、はゝはゝ」

待つて居ると、直きに來た。

「成程別嬪！こりや驚いた。」態と反り返へつて後ろへ兩手を突く、

「どうて別嬪さんてすよ、たんとお冷かしなさい。」お榮は少しつんとする。

「そんなに冷かすと群司さんに言ひ附けますよ。てげせう、ほゝほ。」お高はちよつかいを出す。

「群司さんて誰れだ、え高公。」

「群司さんて群司さんてすよ、ねえお榮さん。」

「知りませんよ……。」お榮はぽつと赧くなつた。

兵營近所の料理屋の酌婦は、大概兵隊さんを情夫に持つてゐる。藥嚢も直ぐに悟つたので、

「はゝあ解つた〳〵。そりやどこの人か。」

「近衛の軍曹さんてすよ。そりやあ好い男よ。ねえお榮さん、ほゝほゝ。」

態とお榮の顔を見る、お榮は益赧くなつて、隱くすやうに俯向くのだ。

お高は朋輩の間柄てありながらちと冷かし過ぎたと思つたらしい、氣の毒相な顔をしたが、隙さず話頭を變へて、

「藥嚢さんは日曜てえと必然東京ねえ。」

「うむ、其踊りてえと乾度此家だ。まるでお高大明神に日參のやうだ。」
「いよ、おつしやいましたね。夫れがどうして昨祭日は寄らなかつたの？。」
「うむ然う〳〵、昨日は來なかつたね、實は上野の停車場で面白い事件があつてね、つい晩くなつたものだから……。」
「面白いつて何麼こと？、又別嬪にでも引っ張られたんでせう！」
「いや――まあ――矢つ張女だね、女が居たんだよ。」
「ほゝほゝ、それご覽なさい矢つ張女でせう。」
「夫れがさ中々面白いつ、てば面白いがまあ、氣の毒な女だつたよ。」

二

けふの祭日を終日東京で遊び暮らして、午後六時信越線發車の二十分前頃、欒嚢軍曹は上野停車場へ辿り着いた、例の如く赤い顏をして大分上機嫌らしいやうだ。
賁札口は平日よりも混雜である「少し空いてから……。」と思ひながら、兎視ると直ぐ右の方の二等待合室の入口に人が黒山のやうに群れてゐる。其黒山の眞中に頻りに驛夫らしい若い男が、若い田舎娘に何か訊いて居るのである、田舎娘はしく〳〵泣きながら答へて居る、其中漸々發車時刻が迫るので、黒山は一人二人と減つて行く、近寄つて聞くと、
「その信州の善光寺にわしら兄さんが行つてゐるのでござります。」

「眞實の兄さんかえ、何してゐるのだね。」

「學校の先生してゐるのでござります。」

「其所へお前さんが行かうといふのだね、單獨でかえ、何麼要事があつて行くのだね。」

娘は言惜相な風をして默つてゐる。驛夫はけゞんな顏をして眉を顰めた、賺す樣に。

「その兄さんが病氣にでも罹つたので、夫れてお前さんが行くのかな——さうぢやない——どうも怪訝しいな、それでは何用があつて行くのだらう、さうしてひとりで……汽車賃も足りない……。」

獨語のやうに恁う言うて腕を組んで考へた、暫して覺たと謂ふやうな顏をして、

「はゝあお前さんは、鄕里を逃亡して來たのだな、然うだらうえ、さうだ——らうと思つた、單身で來たのか、二人で來たのか、情夫とでも驅落したのぢやないか、一體生れは何所だ。」

急にお役人樣が罪人の身元調でもする樣に儼と氣取つた。娘は口惜し相に涙の落つる眼で驛夫の面を瞶めながら、

「いゝえ、逃出しては來たんだけど、一人でござります。情夫となんぞ——だつ、誰れが……只お母さんがあんまり、ひど——い——ものだから……。」思ひ出すのも辛ら相に下を向いて泣くのである。

驛夫は俄に優しくなつて、

「では繼母にでも虐められると云ふ譯か、やれ〳〵可哀さうに——それで兄の所へでも逃げて行かうと言ふのだな、明つた〳〵、兄とは眞實の兄妹だと言ふたね、ふむゝゝ、て金も思ふやうに持つては來ら

れなかつた――だから汽車賃も……一體幾程持つてるのだどれ〳〵金入れを出して見な。」

娘は輕く點頭いて萎びた巾着を捧げたのだ、中には一圓紙幣一枚と銀貨銅貨取交ぜて五拾錢、外に方孔の明いたのも三つ四つ見えた。長野迄の乘車賃には猶大凡一圓程の不足である。五錢や拾錢なら補してもやらうと思つたらしいが、一圓の金額は驛夫に取つては重荷であつた。當惑相に

「こいつあ弱つてやがるな、一圓許り足り無いや。」

又も腕を組んで首を傾げた、電氣燈の靑い光りは悄然と立つ娘の蒼白い涙顏と、思案に暮れる驛夫のみすぼらしい姿を照らして一層哀れ深く周圍の人の同情を惹いた。半頃から傍に立つて話を聞いてゐた他の驛夫、

「そりや恁うするより外に仕方がないよ、其金で行得る處迄の切符を買つて、夫れてずつと長野迄行つて了ふんさ、そうして不足は長野驛から其兄の方へ取り立つて貰ふんだよ。」

恁う言うて、如何だ名案だらうといつた樣な顏をする。

「失禮だが僕が足りない丈け進げませう。」

驛夫を初め周圍の人も驚いた、視ると其人は軍人である、藥嚢であつた。一圓紙幣を驛夫に渡して、

「これでどうぞ切符を買つて遣つて呉れ給へ、夫れから少ないけれど辨當でも買つて食べて呉れ給へ。」

別に五十錢を娘に與つた。驛夫は自分が貰つたのでもある樣にほく〳〵悅びながら、

「貰つて置きな、〳〵、實にどうも難有うございます。」

一驛夫は切符を買つてやる。他驛夫は其金を巾着に押込んで確乎と娘に渡したのだ。愉快さうな顔をして藥嚢は停車場を出やうとすると、

「あ、もし〳〵。」

振返つて視ると巡査である。上野や新橋あたりの大停車場には必ず一人位ぶら〳〵して居る夫れである。ポッケットから黒い手帳を引き出しながら、

「貴方は何聯隊ですか。」

「僕の隊は聯隊ではない。」

「では、何處の隊ですか、官姓名は……。」

「聞いて如何しますか」

「いや少し必要があります。」

「僕は貴方の手帳に記られる樣な惡いことはしない。」

「惡いことてはありません、參考の爲めに聞いて置くのです。」

「何の參考ですか。」

「何の參考ても可いてせう、結局貴方の御姓名を承つて置けば好いのです、巡査なる者は只人の惡いことに許り眼を注けるが職務ぢやありませんからな。」

「左樣ですか、併しそれはちと迷惑ですな、何卒見遁がして貰いたい。」

「いや併し聞いて置きませう、一體貴方がたは憲兵に訊問れた時は無論です、が、假令巡査にても、てすな、其職掌の人に問はれた時は如何な事でも誠實に答へねばならん義務がありますぞ。」

三

「巡査の奴め到頭己れの姓名を聞いて了ひやがつた。」

「いゝぢやありませんか惡いことした譯ぢやなし……。」

「ところが、夫れ丈けならまだいゝんだ。これ見ろ這麼ものに迄に出しやがつたぜ。今朝萬世橋て買つて電車の中て見ると、出てゐるんだ、巡査の野郎彼麽ことを聞かなけりや好つたんだが……そこいらに新聞屋の探訪ても聞いてゐたと見えるんだ。」

と言ひながら都新聞を抛り出した。お高が拾ひ取るとお粂も側へ摺り寄つて、顏を並べて兩人て讀むのだ。

暫く話が途絶た。只洋燈がぢーぢーと音を立つて何か呟いて居るだけだ。藥嚢は眩し相に、赤くなつた顏を撫てゝ、

「どうも日曜には格別隊の飯櫃が厭やて堪らん、早く飯を持つて來て呉れ——あゝ大分醉つたぞ。」

「諾」とお粂は採に降りた。少焉すると、煤色の盆の上へ繰抜きの飯櫃を乘せて茶碗と杓文字を添へ、土塲を手に提げて運んて來た。輕く注いてそつと出すと、藥嚢は茶碗を採つて一口頰張りながら、一心に新聞を拾ひ讀みして居るお高に向つて、

「ところがね、おい、後がなか〳〵面白いんだ。前後の考へなしに金を與つて了つたんだらう、金人を見たら汽車賃が足りないんだ、まるで反對に成つちやつたのさ。こいつ仕舞つたと思つたが仕方がない、誰か隊の者が來たら借りてやらうと思つて、停車場の近所をぶら〳〵してゐたんだ。間の惡い時は惡いものだね、愛憎昨日に限つて一人も見えないんだ。遲くなると困る、と思ふと氣が揉めて堪らない――時計を見たら六時半だ、好し點呼迄には未だ二時間ある、いつそのこと驅け足で歸れと思つたから、山下から線路へ這入つて、それから帽子の腮紐を懸けて一二の三で驅足さ、まるで一生懸命だ、はゝあ好い面の皮よ――それでもやう〳〵間に合つたがね、身體中まるで汗びしよりよ。本當に馬鹿な目に遇つた、はゝはゝゝ。」

美味さうに飯を喫ひながら愉快相に噺すのだ。情に脆いお榮は最う先刻のいさくさも忘れて了つて、丁度自分が其主人でゞもあるやうに一喜一憂に顏色を動かして聞いてゐたが。何だか恁う、娘の行末でも氣遣ふやうに、

「其娘は如何したてせうねえ。」

「多分次の列車て行つたゞらう。」

「藥嚢さんは能く其麽ことをする人なのよ。」

とお高にしては眞面目になつて、

「夫れだから、軍曹さんや曹長さんで、まあ兵隊さんに惡く言はれない人はたんと無いのよ。だけれど

も藥嚢さん許りは此家へ遊びに來た兵隊さんでも惡く言つた人は一人もないわ。」

「さうか、そりや奢るべしだなあ。おい何か奢らんか。」

「眞實よ藥嚢さん、お世辭でも何んでもないわ。そりやあ貴方一本筋でも蔭ぢや隨分空威張してよ『あの佐藤さん知つてますか』つて、まあ佐藤さんのことを噺しするとしませう、すると『うむあの佐藤か』つて恁うよ。蔭ぢや大概の人は糞味噌だわ、けれども貴方のこと丈けは屹度藥嚢軍曹殿つて言ひますよ。隊ぢや上の人のことを殿つて附けなくちや不可ないんですつてねえ。」

殿なんぞと呼ぶのは、兵隊に慣れない人には一寸可笑しく聞えるので、お榮は「へー」と呆れてゐた。これは眞實お高の話す通りであつた。○○隊の兵卒は誰も彼も、殆んど藥嚢を父か母かの樣に慕つてゐた、藥嚢も亦兵卒を可愛がると一と通りでなかつた。「眞の血税を拂ふ者は唯兵卒あるのみだ、下士は半營業であつて、將校に至つては純然たる一の營業である。」とは始終藥嚢の口にする持論であつた。

彼れは唯々奔命に勞する兵卒の後影を見送つて獨り泣いたことが幾度もあつた。あゝ彼等だとて親もあらうし、兄弟もあらう、巨萬の富豪の子弟もあれば又双親の間の一粒種も居るであらう、今、彼等は最親最愛の骨肉と離れ、朝夕慣れた家庭を棄てゝ、此冷やかな、窮屈な生活！何の團欒も無ければ、何一つ趣味のあるではない。燒かれる樣な盛夏でも銃身の手に凍り着く樣な寒中でも、毎日々々一二一二て滿三ヶ年の疾驅鞭撻、それでやう／＼四錢の手當では一日に一個の煙草も喫へない。それも國家も爲め、陛下の御爲めならば已むを得ないとしても、然かも高位高給を得て衣暖く食甘き將校の現下と較べ

ると、實に何とした可憐の腔境であらうと。性來想ひ遣りの深い彼は、滿腔の同情を殆んど兵卒の上に灑いだのだ、であるから彼れの兵卒を遇する言動は悉く情の熱血であつた。兵卒は藥嚢に叱られると、後て嬉しくていつも泣いた。

四

兵卒には慈母の樣に思はれてゐる藥嚢であるが、將校の多くの者には毛虫の樣に嫌はれて居る。藥嚢自身も夫れは百も二百も承知である、けれども決して好かれやうとも思はないのだ。游泳術は官海に許り有るのではない、軍隊にもある。自己の幸福を計る爲には下萬人に好かれるよりは、上一人に引立られることの得策であること位は、知らぬ程の藥嚢でない。教育も普通以上に受けてゐる、憂世の辛酸も年齡の割には味つて居る。中學を卒へて高等學校の半頃、彼れに學資を貢いで呉れた彼れの恩人は頓死した、生家は固より赤貧であつた、涙を呑んで彼れは退學したのであつた。間もなく日露戰役が始まつた、少年血氣の盛な彼れは、勃々たる其敵愾の氣と、滿々たる功名を慕ふ心は、抑へ樣としても抑へきれない、戰爭熱に浮かされて前後の思慮も分別もなく、うかと現役の志願をしたのだ。軍人は磊落したものである、謹嚴活潑なものである、追從輕薄やお幇間は軍人社會には見たくも有るまいと許り思つて居た彼れ、さて愈這入つて見ると、見ると聞くとは大差ひ、巾着副官あり幇間軍醫あり、部下に鼻毛を讀まれる隊長殿あり、て、情實弊害の多いことは却つて他より甚しいこともあつた。藥嚢は又漸々陸軍が厭やになつた、いやだと思ふと益厭やだ、其間には不平も起る、感情の衝突も出來てくる、

最う〻現役の滿期が待遠うて〳〵堪らない。なにも生涯陸軍にゐやうと謂ふのではなし、將校なんぞに嫌はれたつて關ふものか。彼れは恁う太つ腹を極めて了つた、さて恁うなると拗ねたくなる、で、たまには拗ねて見る、而も其拗ね方は一通りでないのだ。

けれども藥嚢は將校の誰れにも彼れにも嫌はれてゐる譯ではない、將校でも人を視る烱眼を具有た想ひ遣りの深い人は、痛く藥嚢を信任する、斯樣な將校は又必ず兵卒の敬愛を受ける人であつて、藥嚢も亦這麼人には心から底から悦服した。藥嚢の部下は勿論のこと○中隊の兵卒は、彼れが一顰一笑に依つて如何にもなる、表面の指揮統率者は無論中隊長や彼れの上官であるが、裏面の隱然たる勢力は彼れの掌中に潛んでゐる。で、他人には全然不可能の事であつても、彼れに據つては能く爲し遂げられた、彼れにとつては容易な事でも他の者には企て能はない事もある。償勤兵――といふて一回以上刑法に問はれたことのある――惡摺れた奴なぞが泥醉して管卷く時は、誰れが何と言はうとも諾應るものではない、けれども藥嚢の一言には恐入つて恭溫しく落着く。演習の時でも作業の際でも「此處一番」と謂ふ場合や、彼れが信賴する上官の爲めには、部下を提げて其任務に身命を賭する、勝つ氣の彼れは成効ねば措かぬ。曾つて藥嚢の手を握つて淚て謝した將校もあつた。が、世の中には人はあれども人は尠しの譬の樣に、能く部下を威服せしむる將校はあつても能く部下を心服せしむる器は少ない。であるから將校側に在る藥嚢の味方は何日少ないものであつた。

心裡に這麼不平があると、一方には非常に酒量が增して來た、一舛位は平氣なものだ。けれども女色

には至つて冷淡であつた、兵營近傍の料理屋は何處も同じくお白粉べた〳〵の怪物がうぢや〳〵居る。藥嚢は酒の相手にこそ三人も五人も取捲かせて下らぬ惡戯謔をせぬでもないが、一向醜名を立てられたことはなかつた、而も藥嚢は普通よりは一段立派な男振だ。で、密かに素振を見せる女もあつたが、悟つてか悟らぬのか、諾ずるやうな風もせねば振り拂ふやうな氣色もない。蓮葉女は堪へ兼ねて正面に言寄る者もある「藥嚢さん、貴方に焦がれて死んでも好いと言ふ女があつてよ。」「馬鹿」。「可愛想だと思はなくつて。」「馬鹿つ。」「刄物持たずの人殺し！。」「馬鹿っ。」餘り執拗いと「馬鹿〳〵。」ふいと立つてさつさと歸つて了ふのだ。で、最う來ないだらうと思つてゐると、直きに又登樓つて來る、けれども前の事件は全く忘れて了つたやうに、固有の態度と異つたところは些もなかつた。

拗ね出してからの藥嚢は、餘り功名も慕はぬ代りに懲罰も餘り恐れなかつた、營倉へ這入つたことも三四度、禁足なぞは拾回以上も喰つてゐる、多くは兵卒を庇蔭い過ぎての身代りか、左もなければ拗ねた揚句上官に反抗の態度があつた位の罰科である、であるから藥嚢の入倉して居る内は同僚の兵卒も默つては見て居ない。晝は營倉の歩哨が交る〳〵鐵の格子の窓下へ來て莨に火を附けて差出すやら、無聊を慰めがてらの雜話に種々の花をさかせる。重營倉は飯に鹽許りの菜でなければならぬ筈の飯櫃の底には、牛肉が半分以上も詰めてあつたり、茶碗に注いで呉れるものは水でなければならぬ規則であるのに、呑んで見ると燗酒であつたりするのである。夜は亦週番の外將校が在營ぬので一層の騷ぎが始まるのだ、酒やビールは勿論のこと、牛鑵を持つて來る者もあればうどんを擔ぎ込む者もある。醉うて高吟

亂舞の盛な時は反つて罰人の藥嚢が他の者を制止るやうなこともある、尤も窃と外に立つて歩哨と共に週番士官を見張りする苦勞性の兵もあるのだ。が、週番將校も大概は遠慮して藥嚢の入倉中は廻つて來ないと極つてゐた、萬一咎め立てする時に非常に多數の罰人を出さねばならぬことになる故だらう。

消燈喇叭の音、細く、長く、消え入る樣に哀れに響いて、形式許りの週番士官の巡察が濟むと、重營倉の罰人が溫々と寢具を布いて、夏は蚊帳までも釣つて臥床に就く、四隅押へて兵は出て行く、時には「おい宿りに來たぞ」と這入つて來る同僚も有つた。

滿罰の朝は亦大騷!。正宗やらビールやら鑵詰堅パンなどの殘り物を悉皆搬び出さねばならないので、お迎の週番下士はいつも當番の三四人率ゐて來ないと間に合はないのだ。藥嚢は營倉へ這入る每に、御馳走の食過やら呑過で、胃を損して靑くなつては出て來るのだ。

五

二週間許り中隊に從て茨城地方へ演習に行つた藥嚢は、今夕やう〳〵歸營たのだ。

行軍の疲れ休めに一盃、集會所でやらうかとも思つたが、殺風景な男許りの面白くもない獨酌よりは……と、ぶら〳〵外出したのだが。何處へ行つても格別面白いこともなささうなので、例の梅本へすいと登つた。

「藥嚢さんの好きな座敷。」と謂ふのは、裏二階の二方に廊下の在る坪庭を瞰下す室であつて、「是非此室」と藥嚢が言ふた理由ではないが、先方が大概呑み込んでゐて何時も此室へ案內する、塞がつて居ても大

抵の客なら明けさせて此處へ入れたのだ、今晚はどんな都合があるのやら、表二階へ案内した。

お高がお誂ひを聞きに來た、「どうも暫らく……行軍にいらしったんですってねえ。」と言ふた限り、何となく落ち着かぬ風てそわ〳〵して出て行つた。平常ならばお誂ひを通すことも忘れて饒舌つてゐるのが、今日は餘程變だわい。と藥嚢は思つた。

盃盤を持つて來たのは、つひ見慣ない御飯炊らしい女である、酌をさせながら二つ三つ話しかけて見るが、一向客の應對も出來ない、先方も迷惑相に引つ込んで了ふ。後の藥嚢は手酌て飮むのだ。酒が無くなる、掌を叩くと、亦前の飯炊女だ、其のうち藥嚢も醉つて來る。這麽ことなら集會所て呑んだ方がよつぽど優しだ。と思ふとぼつぼつ管でも捲きたくなる、自暴に掌を叩くと、帳場でも氣の毒と思つたのか、女將の聲て「お手が鳴るよ、誰か行つてあげて下さいよ。」答へたのか答へないのか、藥嚢には聞えなかつた、併し誰か來るだらうと待つて居るが誰も來ない。表ては按摩の笛が聞えてゐる、夫れがだん〳〵幽かになると、例の飯炊女がやつて來た「どうもお氣の毒樣、みんな忙がしいので……。」と酌をする「どうしたんだ今晚は?。」「何だか大變に多忙しいので……。」「けれども、何方も閑して居るぢやないか。」「はあ、な、なんだか知りませんせんけども……。」と曖昧な答「高公はどうした。」「お高さんは奧の座敷へ……。」「きー公はどうした。」「きーちやんは身體が惡くて退りました。」「先達來たお榮は?。」「お榮さんも奧へ。」「誰れにても好い來いつて言へ、海豚でもなんでもかまやしない。」

藥嚢の鼻息が荒いので炊飯女は逃げる樣に去つて了ふ。今度こそ誰か來るだらうと思ひながら、一

寸時計を出し見て「最う入時だ不滿ない這麼ことなら他へ行きやあ好かつた。」

五分經つても誰も來ない、十分經つても女の來る氣色もないのだ。下物も太分荒れてゐる、徳利も手酌て五六本倒した「今晩は大分冷遇しやがつたな、手酌て呑むなら此處へは來ない――併し妙なものだ、甚麼女でも女が無くては美味くはないわ――勘定を拂つて、女將の奴一つ呵責てやらうかしら…………」

這麼ことを思ひながら、銃劍と帽子を引寄せて、今や手を拍たうとする、一瞬間、裏方の障子ががつと明いて、窓から轉がり込んだものがある。

餘り不意なので藥嚢も一時喫驚した。見るとお粂だ、倒れた限り起きて來ない。訝しいと思つて引起すと、顏色はまるて眞青て、頭髮も餘程亂れてゐる、息遣切迫しく身體をぶる／＼と震はせて、口を開くことも出來ないらしい。藥嚢は大急て盃洗の水をぐつと呑ませた。

六

お粂は少し落ち着いた、けれども猶何か氣遣はし相にちよつとの音にもびく／＼して、折々窓の方を振返る。胸の動悸て乳の邊の搖ぐのも微かに見える。藥嚢は不審相に眼をくる／＼しながら、

「ほんとに驚愕した、どうしたんだえ、一體……。」

「どうぞ藥嚢さん！、今晩丈け貴方のお傍に置いて下さい。」

「今晩丈けつて、其麼譯にも行かんよ。」

お榮は泣き出し相な顔をしておろ／＼してゐる。果ては兩袖で顔を掩つて突つ伏した。

藥嚢も氣が急く、隊へ迄の歸路は五六分しか費らないとしても、餘時は彼是十五分位しか時間がない。時計を見ては、入れたり出したりするのである、

「理由に依つては手段もあらう！、一體何をしたんだ。」

「夫れぢや藥嚢さん、貴方と一しよにつ、連れてつて……。」

「其麼ことが出來るもんか、一しよに來たつて衙門までしか來られやしないよ。」

「ぢや、私、死んじまはふ……。」

「此奴、餘つ程狂るつて居るぞ――まあさ、何んでも可いから早く譯を、簡單に言ひな、分別も出て來る。」

「今、岩淵の留さんが――私を攫へて――む無理に……」

「留さんって何だ。」

「博徒っ、博徒ですよ――だっ、誰が博徒になんぞっ……慥う見えても綺麗な身體よ、ほゝほ、博徒になんぞに勝手にされて堪るもんか ――お高さんなんかと違ふのよ――其麼者に自由にされる位なら、死じまうわ。」

丁度眼前に、當の敵手でも居る樣に、口惜相に罵るのだ。血走つた眼は涙に充ちて、下唇の肉はぴり／＼痙攣へた、

秒は時々刻々と迫つて行く。藥嚢も「可憐！」と思はぬでもないのだが、劍と帽子を引寄せながら、
「ふゝふー、其れ位のことゝ!?、お前も少女ぢやあるまいし、厭やなら厭で、飽まで振切つて了へば可いではないか、まるで、小兒見たやうな……。」
劍を握つて立ち掛けると、お粂は慌てゝ其帯皮に確乎と縋つて、
「貴方がお歸りになると又此處へ迫つて來て捉まへられます……お高っ、お高さんまで手傳ふんだもの、此間から最う〳〵……三人で毎晩毎晩、脅迫したり、騙したり……私、明朝になれば、暇を取つて歸ります……だから、今晩だけどうぞ助けて……。」
と、藥嚢の足許に泣き崩れた。
藥嚢は突っ立つた儘て身動もせずに考へてゐた。其顏は漸々赧くなつた、吐息と一しよにきり〳〵と一文字の眉を吊り上げて、
「高公っ、太い奴だなー―、好し〳〵乃公が帳場へ斷はつてやらう、其麽、無理なことがあるものかっ」
「いゑいゑ、駄目駄目ですよ、お女將さんなんぞ氣が弱くつて……相手が博徒ですもの……其麽ことで納まれば、最うとつくに……。」
急に堂と座つた藥嚢、儼と決心の色を示した顏て、
「好し〳〵乃公が引受けた――さあこれから大いに呑まふ――酒持つてこーい。お前は起たんでも好い、飯炊女が來る。」

霰のやうに手を拍つた。暫くすると廊下の障子の間から御飯炊の首が出た。

「盃盤を取り替へて酒を五六本持つて來い、肴も何か持つて來い――何でも可いわ、二三人前。夫れから帳場へ行つて、今晩は閑な樣だから繁忙なる迄、お榮は己が借り切つた――お榮は己の情婦だからて、然う言へ――おほゝゝじやない、乾度さう言つて置くんだぞ、いゝか。」

お榮は、まだ涙が乾かぬ顏で、心から嬉しさうな顏をして、

「ほゝゝ、眞實に然うだと可いけれど……。」

七

亂れた頭髮を撫附けたり、擴つた袵を合せたりして、お榮は身扮を整し終つた。

夫れを待ち兼ねた樣に、藥罐は手酌で、煽つてゐたが、ぐつと呑み干して献しながら、

「お前も今晩は呑むと好いぜ、むしやくしやした時は、ちよつと煽り附けると氣か霽れ〳〵して可いものだ、少しは呑めるのだらう。」

「えゝ、預きますわ、醉つて見ませうか。」

「うむ。一體お高の奴め、お前が厭がるのを、何故無理に其麼ことをするんだ。」

怪訝な顏して藥罐が訊くと、お榮は極無雑作に、

「いゝえ、お高さんは、その初つあんと云ふ人の情婦なんですよ。」

「はゝゝゝ、海豚め、我の隊の出口ともやつてやがるんだぜ。」

「えゝ、一人や二人てきくもんですか、何ても五六人は有るてせうよ。」

「驚いたなあ、彼麽海豚に……酔狂な奴もあつたものだ、はゝゝゝはゝゝは。てお前は……。」

「戯談ぢやありませんよ――それてね留めさんと云ふ人が、是非その私を……つて初つあんに頼むんですつて、それて初つあんがお高さんに相談したんてせう。何日てしたか、お高さんが私にいろんなことを謂ふんてすの。や、留さんは氣前が可いの、男つ振りも好いの――……私しや留さんにすれば良かつたのつて、其のうちに――五日計り前てした二人て登樓つて來ましたの――私しや其晩初めて、はゝあ成程。と思ひました。」

「其翌晩又二人て來ましてね、今度は初つあんがいろんなことを言ふんてせう。そこへお高さんがいろ〳〵と添口をするのてすよ。あんまり煩いから私しや、遊人は死んても厭やだつて、すら〳〵と言切つて遣りました――そしたら昨夕も一昨夜も來ませんの、まあ好いと思つてると、今晩は早くから登樓て來ましてね。お桀さんどうてお承知して貰はにやあ、男の顔が立たねえつて、初あん言ふんてせう。すると留さんも、己等が折角恁うして口を開いたからにやあ、どうかして貰いてえ、大の男二人がお桀の阿魔に八分されて指を啣へて引つ込んだぢやあ、見つともなくつて生きちや居れねえ、なあお桀さん命に懸けてもこりや一番諾て貰はにやなりますめえ――たつた一度……跡は綺麗に諦らめるからつて。」

卑下視んだ眼をして嘲けるやうに淋しく笑つた。

「馬鹿なねえ。私しや又一度其麽ことされて了へば、跡は……御自由てすわ。濡れぬ前こそ、ぢやあり

ませんか、一度濡れて了つたら……最う雨だつて露だつて――頸迄浸かつても同じですわ。」

薬嚢は點頭ながら一寸時計を出して見て、

「未だなか〳〵歸るまい、彼奴等氣待つてるだらう、乃公の歸るのをさ。最う恁うなつたら挺ても動かん。まあ話せ夫れからどうした。」

「何かつてえと殺すの生かすのつて。彼廢人の癖ですのねえ。殺すなら殺して下さいさあ〳〵つて身體を摺り寄せてやつたんですよ。よし覺悟しろつて、恐い劒幕で手を振揚げましたから、今殺されるのだらうと思つて目を瞑つて居ますと、そつと其手が頭へ觸つた丈けなんですよ。本統に意氣地がないんですよ。」

天井では頻りに鼠が騷いでゐる。

「何うかして逃け出さうと思つて――お銚子を取りに立たうとすると、お高さんが、お銚子なら私しつて。ふいと立つて行つて了ふ。便所へ立つと初つあんが後から附いてくる――何でも表二階の方は貴方らしい――如何かして逃げて來やうと思つても、なか〳〵先方に油斷がなくてどうすることも出來ないんでせう。其うちに初つあんがふいふと立つて廊下へ出てお高さんを手眞似で呼ぶと、お高さんも外へ出て、何かひそ〳〵話して居た樣でしたが、すーつと隣座敷を明けて、二人で這つたらしい樣子でした――變だなと思つてゐると、小さな聲で何か言ひながら、態と聞えないやうな聞えるやうに……おーいや〳〵、いくらなんでも、あんまりぢやありませんか。」

「ふゝふー、馬鹿な。」

「急に暗くなつたから、變だと、思つて、見ると留さんが洋燈を引つ込せたんでせう。おやつと思つて逃げ出さうとすると、最う出口の方に留さんが手を擴げて立つてるんですよ。無我夢中で廊下へ飛び出して、手摺へ手を掛けると、後から留さんが襟っ頸を攫んで引戻しますの。いやってえほど其手を引つ抓つて。まるで夢中で飛降りました。するとどたりっと音がして、あの突出した亞鉛葺きの屋根へ落ちてたんですよ。黑く塗つてあるから分らなかつたの――まあ善かつた。と思つた丈け、後はどうして此處へ來たのか、些ちも覺えがありませんよ。貴方に水を吞せて頂いてから、やう〳〵正氣が着きましたが、まああんな怖い所をよくまあ、どうして來たものでせう。」

八

「本當にお氣の毒樣、私のお蔭で……。」

「强情な奴等だ、大概に往生して歸りやがればいゝに――併し中々面白い、――お前もよつぽど運が好かつた。道理で先刻、ブルキ屋根の上へ猫でも落ちたやうな音がした――その留つてどんな奴かえ。」

「岩淵のほら、橋があるてせう。其側に小さなお煎餅屋があるてせう。あの家の人て、小供が二人もあるんですって。」

「うむ。あすこの奴か。色の生つ白い。うむうむ彼れなら乃公の名前を知つてる筈だ。先達其所の蕎麥屋て、彼奴の子分とか兄弟分とかを撲つてやつたよ。尤も己は和服だつた。喧嘩を賣つて來やがつたか

ら買つてやつたんだ。先方は餘程醉拂つて居たやうだけれども、面倒臭ひから撲つて蹴飛はして椽から突き落してやつたんだ。始終來ては店の者に捲き附けたり客に喧嘩を吹つ掛けたりして、仕樣がないんださうだ――すると直きに何んでも五六人は引張つて來たやうだ。表へ來て先刻の野郎出て來いつて怒鳴りやがる。實は和服は借物だし、破られると大變だから、突如着物を脫いで袴下と襯衣丈けになつて蕎麥の練棒を採つて躍び出したんだ。て、下着の縞柄で兵隊だと云ふことが分つたと見えて、遠くへ逃げて惡口を叩いて居やがるんだ。何ても留の仲間ださうだが。後で來て彼れは誰だがつて聞いたさうだ。」

「へヽヽ、道理で今晩も貴方だから手が出ないんでせう、そりやあ中々幅利かせて仕樣がないんださうてす。それに此家は女主人でせう、てんで馬鹿にしてゐて外の座敷に居てもどし／＼呼びに來るんですもの。」

「忌ま／＼しい奴等だなあ、叩きのめしてやらうかしら……。」

「お止しなさい、そりや貴方だから二人位大丈夫てせうけれども、萬一お怪我でもなさると、夫こそ私しが……。」

仰山な手附てそわ／＼しながら藥罐を止めた。滿足と安心とて、お榮はいつになく醉ふたのだ。

「諾止すよ。つまらない。」

と言葉を切つて、藥罐は一寸改まつた、

「己れは惡いことは決して言はん積りだが。是を機に、お前は此家を出たら如何か。這麼所に居たつても迚も碌なとこは有りやしないぜ――夫とも群司さんとかに別れるのが辛いかな。」

お染は恨むやうに朧とした眼で藥嚢を見据ゑて、

「いゝわ、可愛相に……お高さんが彼麼ことを言ふもんだから……實は恁うなんですよ、先達お高さんの情人と群司さんと同時に登樓つたんですよ、後であの狆がお高さんの情郎だつて、きーちやんが私に言ふたんでせう、そりやあまるで狆見た樣な顏ですよ、お負けに群司さんが好い男だから格別對象が可笑しいんでせう。お高さんの目には如何映えるだらうと思つて、群司さんを無闇に譽めて當てつこすつてやつたんですよ、そしたら私が群司さんに岡惚れしてるんだつて、來る人〳〵に吹聽するんですせう、おしまひには、本統に當方が困つちまつたわ。」

「それなら猶更らだ、歸つたら好からう。」

「えゝ歸りたいんですけれど……。」

悄れて膝の上の手を瞶めてゐる、

「矢つ張り歸りたくないと見えるな。」

「……。」

「はいゝあ、口は調法なものだ。」

嘲ける樣に笑つて藥嚢は少しつんとする。

お榮は凝乎と其顏色を瞶めてゐたが、最う眼を沾ませておど／＼しながら、

「あの歸らないと言ふ譯ぢやないけれど……。」

「いや、無理にお歸りなさいとは言はん、他人のことだもの。」

「はい、歸りますよ──けれども少し、その歸り憎くいやうな譯があつて──這麽にお世話になつた貴方だから、何も彼もみんなお話いたします、實は私は親に無斷つて這麽所へ來ましたので……。」

感慨に堪へぬと言つた風情て、

「實は私の叔父さんに馬鹿な奴がありまして、尤も義理の叔父てすけれど、夫れはそれは煩さくつて居ても起つても居られませんの。ふいと妙な氣になつて內秘で桂庵へ掛つたんてす。直きに口があつて、此家へ來ることになりましたが。肝腎な親の印がないので、そつと盜み出して、捺いて來ましたの──連れに來た人が、お金は幾程入用なのかつて言ひますから、借りなくも可いつて言ひますと、何程か借りて呉れつて言ひますの、それから五圓借りて來たんてす。此處へ來て五日許り手紙も出さずに置きましたが、母が心配すると困ると思ひましたから手紙を出しました、すると、直ぐにお迎が來たんてせう、其叔父が、夫れから散々腹耻をかゝせて、其揚句に一人で追つ返して遣つたんてす。だから今歸ると、夫れ見ろ勤まらないから歸つて來た、醜態見ろ、なんて言はれるのは極つてゐます……。」

「何んだ其麽ことか。好し／＼乃公が好いやうに手紙を書いてやらう、お母さんに直に迎へに來て下さるやうにつてお前の笑はれないやうにしてやらう。」

「えゝ、然うして下されば歸りますとも。借りたお金もちやんと仕舞つてありますから……。」

と、最う歸つたやうな氣になつて、元氣附くのだ、

「今晩書いて頂くと、明日中には着きますねえ、然うすると明後日はお母さんが飛んで來ますよ。だれが這麽ところに……ねえ貴方。」

「では愈決定つたかな。歸れ〳〵早く歸つて、最う恁う云ふ所へは、決して二度と來るんぢやないぞ。」

硯と料紙を取寄せて藥嚢は手紙を認て居る。幽かに啜り泣きが聞えるので、見ると、お榮が泣くのである。藥嚢はちよつと目色を變へたが、直ぐに其眼底から、よく〳〵嘲笑だといつた樣な色が浮んだ。

「おいつ、何を泣くんだ。」

俯向いた儘お榮はまだ嗄つてゐる。藥嚢は持つた筆を抛らうとする。お榮は猶泣噦りながら、

「もう、歸ると、おか、お顏が……。」

「誰れのさ――ふゝふー、馬鹿だなあ。」

九

夜も大分更けて來て、四隣は最う深としてゐる、唯時々階下で女將の咳拂ひが聞えるだけだ。

博徒は今歸りましたと例の飯炊女が告げて來た。去らばと藥嚢は劍を握つて立ちながら。

「ではもう大丈夫だから。確かりお前をお母さんに渡して、せめても上野の邊迄見屆けてやりたいが、さういふ譯には行くまい――身になるだらう。まあ隨分用心してお歸りよ。」

「はい、それでも一寸お母さんに逢つてやつて下さいな、いろ〳〵お禮も……。」

「いや、逢つて僕からも話して上げたいが、さうは行くまい。と思ふ――何故つてお前、はゝゝはゝゝは、澂はふか。「今鳴る喇叭は八時はん……ぢやないか。」

「あらッ、さう、然うてしたかッ」

今が今まで自分の危難に許り氣を奪られて、其れに迄考へ及ぶ餘裕は無かつた、言はれて氣附くと、うんと打倒れる程驚いて、

「あら私し、どうしよう〳〵……。」

足踏みして身を悶掻きながらお染は泣いた。藥襲も目を潤ませながら、確かとお染を抱き締めて、嗜なめる様に、

「馬鹿だなあ、何も其麼に騷ぐにや當らん、人間一人の身體には代へられない、己は覺悟してやつたことだ。心配するな〳〵、大概は大丈夫だらう！、明日になれば分るから心配せずに待つてゐろ、いゝか、いゝか。」

「私も今から貴方と行きます、兵隊屋敷へ一所に行きます、そして士官さんに會つて、今晩これこれで私を助けて下すつたのだからつて……。」

「ふゝふー、其麼こと言ふたつて駄目だよ。」

お染は急き込みながら

「何故、なぜ、遲くなる譯があつて遲くなつたのなら……。」

「駄目だよ―、假令如何な理由があらうとも、軍隊では其辯解は立つて行かんよ。」

問答は無益と振切つて、藥嚢は此家を飛び出した。

* * * * *

兵營は高臺の上に在る、其臺の一隅に八幡社が祠つてあつて、兵營とは生垣たつた一つである。こんもりとした老杉の森が麓を廻る道路の上へ掩ひ冠ぶさつて茂つてゐる、弦月は梢に宿つて崖下の田の水へ覗いて居る。瓦葺きの高い兵舍は甍を並べて建つて居るが、何處の窓からも最う一點の灯影も差さない、幾百の壯丁は今どんな夢路を廻つてゐるやら。折々微かにがちやり、がちやりと劍鞘の鳴る音がする、主は八幡山の歩哨であらう！。

「あい、大分遲刻なつた、かれこれ最う一時だらう。」

月の光に時計を透かして、

「正々堂々と衙門で名乘らう――仕方がないや。」

と呟きながら、木の下道へ差し掛ると、ぬつと暗がりから黑い物が飛び出した。

はつと思つた藥嚢、直ぐに一歩退がつて身構へると、先方はづかづかと側へ寄つた、聲を潛めて、

「藥嚢軍曹殿。」

「うむ誰れだ。」

私です、石黒です。」

「石黒が如何して這麼所へ——其麼服装して？」

「夫れより貴方こそどうなさつたのです、皆んなが非常に心配してゐますよ、中隊から四五人見張りに出て居ます。人員の屆けは異常なし。未だ巡察りません。正門からでは困りますから……ぜひどこかから……。」

「さうか、でもあんまり卑劣の樣だな——併し皆の好意も無には出來んし……よし〳〵皆に宜敷言うて呉れ、氣の毒だつたな。」

「はあ承知しました。這入り好い樣に拵へてあります。こちらへ……。」

二人の姿は森の黑闇へ隱れて了つた。

（完）



幽潭外拾篇

北原白秋

幽潭

あはれ、こはもの靜かなる幽潭の
深みの心——おもむろに瀞みて濁る
波もなき胎のにほひの水の面。
をりをり鈍き蛇のむれ首もたぐれど
いささかの音だに立てず、なべてみな
重たき腦の、幽欝の色して曇る。
さるほどに日も暮がたとなりぬれば、
あたりの樟の薄ら闇しのびにつのる
灰色の妖女の冷やきうすわらひ。
さあれど、ゆるにしづしづと髮曳きうかぶ
底ひ主面はかたく縛られて、
ただほの白き身をなかば、水よりいづる。

ややありて、息吹のゆめもやはらかに、
盲ひし空をうちあふぎ、管かたぶけて
吹きいづる石鹸の玉の泡のいろ
ひとつびとつに圓らかに紅みてのぼる、
これやかの若くいみじき血のにほひ。
かくしてものの靜やかにひとときあまり。

ふと、ひらく汀の瞳くろぐろと、
冷やにならびうかがへる妖女のつらね
肋骨の相摩るごとき笑して
灰色の髮音もなくさばくと見れば、
そこここに首もたげゆく蛇のむれ、

ああまたもとの幽欝に主消えしづむ。

かくてまた、鈍く曇れる水の面、
淘れる胎のもの孕む音ともなしに、
靜寂の深みに呻く夜の色。
ほど經て聲も消えゆけば、ああ見よ、いまし
幽潭の鈍める空にあかあかと
のぼれる玉か、數しれぬ幾千萬の新星の華。

（六月十七日作）

圓燈

薄暮の谿間の恐怖。
今宵またかなたに點る
紅の圓き燈

そを知るや、知らずや、なほも
なやましきにほひの奥に
うづくまり默むひとむれ。

眞白なるゆめの水牛、
しかはあれど、なべて盲ひし
獸らの重き起伏。

盲ひしは瞳のみかは、
ものにぶく、闇にくぐもる
もろもろのこころごころも。

かくてあな幾夜か經にし。
言いはず、かうべもあげず、
さあれども物待つごとし。

深まさる恐怖の沈默。
そのなかに今宵も消ゆる
紅の圓き燈。

（六月十七日作）

接吻の時

薄暮か、
夜のひきあけか、
晝か、はた
胎のおぼろか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩暈、
紅きおびえの接吻にひたと身顫ふ一刹那。

あな、見よ、青き大月は西よりのぼり、
あなや、また瘧病む終の顫して
東へ落つる日の光
大ぞらに星はなげかひ、
青く盲ひし水の面には藥香にほふ。
あはれ、またわが立つ野邊の草はみな色も眞蒼に
折り伏せる人の骸の夜のうめき、

人靈色の
木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。
かくて、はや落穂拾の農人が寒き瞳よ、
歡樂の穂のひとつだに殘さじと、
はた刈り入るる鎌の刃の痛き光よ、
野のすゑに獸らわらひ、
血に饐えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、
二人がほかの靈のありとあらゆるその咒咀。

朝明か、
死の薄暮か、
晝か、なほ生れもせぬ日か、
はた、いづれともあらばあれ。
われら知る赤き唇。

（六月十七日作）

尋めゆく、あゆみ

いと高くいと深くいと靜にいと蕭やげる
夜の森のかげ、暗く冷なる列のもとを、
われはあゆむ。

いと高くいと暗くいと密にいとほのかなる
細らなる赤楊の列、そのもとの底の底を
われはあゆむ。

いと高くいと深く沈みたる憂愁のもとを、
眞素肌のましろなる、衣つけぬ常若の矜もて
われはあゆむ。

赤楊のとある梢ありとしも見へぬ空のけはひ、
あはれその枝に色紅き小鳥の如も星の見ゆる。
あはれひとつ

そを見つつ秘やかに秘やかになほ秘やかに、
そことしも何時としも聽きもわかぬ髮の香をば
尋めてあゆむ。

さあれ今言いはぬ獸忍びかに蹤きぞ來ぬる。
昨日より去年より生れしより、否、前世より
蹤きか來ぬる。

かかる夜のとある梢哀れその空に星の見えつ。
紅き星紅き星ほのかにもわれは知れり、
かかるゆめを。

いと高くいと深くいと冷にいと蕭やげる
夜の森のかげ、ふとし、あな、路は落つる。
あらぬ谷間。

哀れ哀れあらぬ谷にいと暗く靈や落つる。

真素肌の悲哀よ血の香する荊棘のなかを
　いかにわけむ。
足音のす、言はぬ獸忍びかに引歸すらし。
哀れまたひとつ星、見もあへぬ闇のかなたに
　はたや消ゆる。
忽にものの呻吟、やはらなる足に觸れつつ
そこここの血の荊棘あなやその暗き底より
　赤子啼きいづ。

（六月四日作）

蜩

胸に、はた
夕日の幹に、
つと來り蜩なげく。
かなかなかなかな……かなかなかなかな……
黄金なす細き旋律
せはしげに、また、かなしげに。
かなかなかなかな……かなかなかなかな……
さあれ、また鳴きつつ熟視む、
照りも倦む思より、
梢より、
實のひとつ落ちんとするを。
かなかなかなかな……かなかなかなかな……

（六月十八日作）

赤子

赤子啼く、
急き瀬の中。

壁重き女囚の牢獄、
鐵の門、
淫慾の蛇の紋章
くわとおびえ、
水に入日に、
照りかへし、
　黄ばむひととき。
赤子啼く、
　急き瀬の中。

（六月十八日作）

夏の夜の舟

蟲啼ける。
りんりんすりりん……りんりんすりりん……
あはれわが小舟ぞくだる。
痍つけるわかうどの舟。
りんりんすりりん……りんりんすりりん……
はてもなう向ひてかすむ
白壁のほのかなる列。
そのかげを小舟はくだる、
蒸し挑む靄のふるひに。
りんりんすりりん……りんりんすりりん……
いまし、また水路のはてに、
落ちかかる
弦月あかく、
そここのくらみの奧に、
寢おびれて倦めるものごゑ。
りんりん……すりりん……

某の夏、
かかる夜の港にききし
二上の音じめはすれど、
あはれそをいづことわかむ。
あたりやや暗みふけつつ、
血のごとく
顫ふ月しろ、
沈みゆくその香のなごり。
あなしばし、靈啼きしきる。

りんりんすりりん……りんりんすりりん……
りんりんすりりん……りんりんすりりん……
りんりんすりりん……りんりんすりりん……

いつしかに眞闇のにほひ、
深みゆく恐怖につれて
はたと蟲息をひそめぬ。

蒸しあつし、また息ぐるし。
………………………

舟はなほ重たくくだる。
ふと窓に蠟の火あかり、
病人の顏ぞいてたる。
内部には時計の響。

ぎいすちよっ…………

重き咳ふたたびみたび、
眞黑なる帷は落ちぬ。
あはれ闇夜。

ぎいすちよっ…………ぎいすちよっ…………

かくてなほ小舟はくだる。
いづくにかはてなむ旅ぞ、

そも知らね、水のひとすぢ、
白壁のはてしなき夜を。

ぎいすちよっ……がちやがちや……ぎいすちよっ……

たちまちに閉の扉、
かげ暗き大黒金の壁のもと、小舟はなづむ。
あなあはれ、
ものなべて見わかぬ闇よ、
内にはた悩みか伏せる
幾百の沈黙の大牛。
最終か、恐怖の淀か、
舟はあな音なく留まる。

りんりん…………すりりん…………

否、また、おのづからなる
抵抗のすべなき力、
その水に舟押しながる。

ぎいすちよっ……ぎいすちよっ……
がちゃがちゃがちゃ……ぎいすちよっ……
がちゃがちゃがちゃ……がちゃがちゃがちゃ……
がちゃがちゃがちゃがちゃ……がちゃがちゃがちゃがちゃ……

はてもなう小舟はくだる。

（六月十九日作）

幽閉

色濁るぐらすの戸もて
封じたる、白日の日のさすひと間、
そのなかに蠟のあかりのすすりなき。

いましがた、蓋閉したる風琴の忍のうめき。
そがうへに瞳盲ひたる嬰児ぞ戯れあそぶ。
哀れさは、赤裸なる、盲なる、ひとり笑みつつ

聲たてて小さく愛しき生の臍をまさぐりぬ。
物病ましさのかぎりなる室のといきに、
をりをりは忍び入るらむ戯けたる街衢の囃子、
あはれまた嬰兒笑ふ。

ことことと、ひそかなる母のおとなひ
幾度となく戸を押せど、はては敲けど、
色濁る扉はあかず。
室の內暑く悒鬱く、またさらに嬰兒笑ふ。
かくて、はた、ぐらすのなかのすすりなき
蠟のあかりの夜を待たず盡きなむ時よ。
哀れまた母の愁の恐怖とならむそのみぎり。
あはれ、子はひたに聽き入る、
珍らなるいとも可笑しきちやるめらの外の一節。

（六月二十日作）

髑髏は熟視む

髑髏は熟視む、きゆらそおの血の酒甕の間より、
髑髏は熟視む、靈もなくただうち凹む眼して、
髑髏は熟視む、忘れたる思ひいでんとするが如、
髑髏は熟視む、寢そべりて石鹼玉吹く女が面を。

（六月十九日作）

我子の聲

われはきく、生れざる、はかりしれざる
子の聲を、泣き訴ふ赤きさけびを。
いづこにかわれはきく、見えわかぬかかる恐怖に。
かの野邊よ、信號柱は斷頭の臺とかがやき、
わか葉洩る入日を浴びてあかあかと遙に笑ひき。
汽車にしてさてはきく、轢かれゆく子らの啼聲。
はた旅の夕まぐれ、榮えのこる雲の濕に、

前世の亡き妻が墓の邊の赤埴おもひ、
かくてまた我はきく追懷の色とにほひに、
埋もれたる、はかりしれざる子の夢を胎の叫を。

歸りきてわれはきく、ひたぶるに君抱くとき、
手力のほこりも盡きて弱心なやむひととき、
たちまちに心つらぬく
赤き子の高き叫を。

（六月二十日作）

狂へる椿

ああ暮春。
なべて惱まし。
溶けゆく雲のまろがり、
大ぞらのにほひも、ゆめも。
ああ暮春。

大理石のまぶしきにほひ
幾基の墓の日向に、
照りかへし、
くわと入る光。
ものやはき眩暈の甘き恐怖よ。
あかあかと狂ひいでぬる藪椿、
自棄に熱病む靈か、枝もたわわに、
狂ひ咲き、
狂ひいでぬる赤き花、
赤き譃言。

そがかたへなる崖の上、
うち濕り、熱り、まぶしく、またねぶく
大路に淀むもののおと。
人力車夫は
ひとつらね青白の幌をならべぬ。
客を待つこころごころに。

ああ暮春。

さあれ、また、もの鈍くうちも向へる
いと高く暗き崖には、
窓もなき牢獄の壁の
長き列、はては閉せる
灰黒の重き裏門。

はたやいま落つる日ひびき、
照りあかる窪地のそらの
いづこにか、
さはひとり、
濕り吹きゆく
幼ごころの日のうれひ、
そのちやるめらの
笛の曲。
笛の曲。
かくてはた病みぬる椿、
椿、椿、狂へる椿。

(六月十五日作)

和歌　紫舟選

○　　中野紫葉

日は暮れぬ一日おさへし悲しさとよろこばしさの今胸にわく

しらざりき若き木草の地に伏して大風まてるその強さをば

われさめぬものはやさめてありけりと日の第一のかなしみにいる

子等もまた少きなげきにとらはれて師をとりまきぬ圓き瞳に

鳴りて來し聲のもろ〳〵集ひ居るこゝちに暮の

樹の陰を見る

なげきまた同じうなりぬおなじくは異ることを泣きなむとして

こゝにわれ思へりなどや憂のみ鳥等は歌ふ日のさせる野に

夜の卓のくらきを探り瓶をとる何とはしらずかかる淋しさ

○　梶原重雄

夏くればわがわかゝりし日ににつるよろこびにしも天日はてる

泣きぬれて寐入りし態(かたち)あめつちの静なるまたあはれなるかな

しづかなる夜のこゝろや死を思ふこゝろ一つのたゞ脈をうつ

風の如つとわが前にひるがへるあな冷笑のほのぐろきかげ

○　野口精一

はたやなぎ寂しく垂れてけふもまた海邊はうたに暮れてゆくかな

今はたゞ何も願はじおだやかにたゞおだやかに日は暮れてゆく

鍵もて來君がみ胸の戸をあけて中にうつれる我が影を見む

ものなべてなつかしきかな夏の朝葉ずれの中の森をあゆめば

あまたたびもとめどみたずとこしへに心の甕はうつろなりけり

悔といふ冷き石にうちむかひさすがに金槌(つち)をふりて見しかな

○　關本梁村

別れてはありし日おもひあひ見ては一語まじへずうなだれて居ぬ

あけぼのや黄金の光背にうけて君は來るなり波うち際を

闇黒の天地のなかを君といふ灯ともしてゆくわがこゝろかな

わがこゝろ君を欲りすとたゞ一語云ひ得ぬおもひ今日も暮れゆく

はてもなきみどりのなかにちひさなる星といふなる少女の群よ

よろこびにみちたる眼して夜の扉に君を描きぬ靜かなる夜や

紫の藤に雫し晴れてゆく晨の雨のうつくしきかな

○　　角田野花

よろこびのなかに住みゐてかなしみを恐れ待つまで心老いぬる

胸の海苦しう響け「我」といふ黒き冷き帆の色を見て

轣轆と車は過ぎぬ刻まれしわだちのあとは顧みもせず

かくしつゝあるをよろこびかくしつゝ過ぐるになほも心足らはず

○　　蓮半醉

雨晴れし若葉の上の白雲はうらはかなげに消えて行くかな

大海の舟の灯をつくづくとながめて居ればまなこふるほふ

ほゝ笑みのかたちも未だととのはず涙もよほす眼をいかにせむ

君か影胸にうかべはかなしみとはた悦びと手を取りきたる

○　　山村龍子

日のみちをなど歩まざる男の子てふ尊き名もつ身ならずや君

あゝ望失せにし小さき我一人住まふ國なしせまき世界よ

わが耳目たゞごとすらもいと奇しく心に告げぬよろこびの日や

○　　大友月人

かすかなる響をたてゝ我魂の滅び行くかにもののおときく

過ぎし日といまだ來ん日の中にある今日の運命をわれひとり見る

わが骸(むくろ)棺の柩にをさめられありとし覺え夜の二時をきく

○　　井淵三靈

冥滅の足跡太く輪に踏みて出れば居ると呪はれし我

薄紅の花に喰ひ入る苦蟲を見つれば心とみに騒ぎぬ

○　　大津照水

ともすれば深くもだして思路を辿るになれし此頃のわれ

我心今物の怪に追はるゝが如く不安の境をはしる

○　伏見蔦亭

君知るや枯れて幾年雨と風に朽ちこぼれゆく我おもひの樹

「あゝわが魂何を憧れ胸を離る」二日に遠ざかるよろこびを趁ひ」

○　樋渡花明

この奥に樂しき國のありとしもうら若夏の山仰ぎ見ぬ

ゆく春やせまき馬屋に眼をとぢてねてある馬を見るがおかしき

○　眞田よし子

たそがれの雨の中なる花あやめふと若き日の我れを思ひぬ

あゝ心何にとらはれこの日頃生死の中を默しつつゆく

○　太田生麥

たゞに天たゞに地なり思ふてふ時なき人の淋しからずや

○　關本きし

溫泉の街の街のはづれのささら川岸にして聞くほとゝぎすかな

○　眞々田薫

濃紫白きを中に花あやめ池の緋鯉の數ばかり咲く

○　鵜澤珪泉

苦しさをたれに傳へむ泣く人とあざける人の眞中にありて

○　篠原靜風

しか思ひしか思はれず胸みだるおよづれごとを路にきゝし日

○　佐藤琢琅

君が心ふと疑ひぬ何時の間にか二人か心相さかり居て

（應募和歌は東京市小石川區一三三尾上柴舟宛の事）



富士詣

笠に題す頂上の句や富士詣　へき
眼前に雲の巻舒や不二まふて　同
笠たゝく富士六月の霰かな　同
二合目の雨五合目の霰かな　同
富士行者女もひとり交りけり　同
雲百句錄して富士を下りけり　同
富士詣一人おくれて下りけり　同
文弱の士を卑しみぬ不盡詣　同
一莖の草を紀念や富士詣　同
富士詣白衣に朱印戴きぬ　竹枝樓
講中の旗幾ながれ富士詣　錦紗
戻り道富士を見返る馬上かな　六絲
富士詣先立つ人の誇りかな　木柏子

お頂上一句を記す扇かな　瓢骨
菅笠に夏帽交り富士詣　白匡
富士詣腰に宿名の團扇かな　僊舟
足弱の四合五勺に暮れにけり　柿鵬
富士詣二十五草鞋初めかな　大哲
汚れ無き身に咎はなし富士詣　静帆
室の戸に雲の去來や富士詣　虛人
頂上の清水に飲むや正氣散　梁村
富士詣草取る隙の五日かな　鯨舟
富士詣終へて氣安し坊どまり　刀川
がや〱と暮につく富士道者かな　麥花
一村の壯者擧りぬ富士詣　賓水
富士垢離の樹下石上の白衣かな　北窓
富士詣下界の暑さ語りけり　八王子 春洋
富士行者名を白雲と申しけり　其櫻
富士詣三々五々の下山かな　栁村
八日月お山晴れたる裾野かな　佟色
不士百句第一吟や汽車の窓　藍川
富士詣心の願ひ秘めにけり　木瓜
諸共になれぬ草鞋や富士詣　桃紅
水買ふて杖忘れけり富士詣　東京 春洋

負けぬ氣の十三の兒や富士詣　百句拙
蚤に起きて月よき夜なり富士の宿　速雀
山開き續く嬉しき日和雲　濛雨
銀明水汚濁の口をすゝぎけり　小魚
富士道者腰に合切袋かな　角人
御頂上皇御國の日の出かな　雙嶼
花染のわらじの紐や富士詣　同
漱ぐ金明水や朝日さす　天睡郎
强力の餅燒き急ぐ未明かな　同
富士詣身輕き朝の門出かな　玉雪
富士詣案内にたちし今年かな　同
法師原杖を洗ふて登山かな　草菫
繪習ふて繪心に登山思ひ立つ　同
富士道者恙もあらず歸りけり　吼天
拜領の印籠提げて富士詣　同
三度目の三人連れや富士詣　三命
村一の水振舞はん富士道者　同
岩室に山酒の醉や寝ねにけり　鬼洗
岩室に夜冷の脚のつかれかな　同
君に歌吾に句斯くて富士の旅　象骨
富士詣かけて鎌倉廻りかな　同

蘭人は眼鏡の御砂拂ひけり　同
心せく胸突八丁はかどらず　花舟
打解けし合宿の衆や富士詣　同
宿帳や同行五人富士詣　同
頂上の日本晴や富士詣　菁々
踏外づす雷も見るらめ富士詣　同
富士詣扇に印を爭ひぬ　同
乾鮭も室の騒や御山荒　太郎
目に灑ぐ銀明水や富士詣　同
講中の笠みな富士を描きけり　同
夏痩の足の細りや富士詣　烏城
十年の宿志を富士に詣てけり　同
富士詣草鞋を腰に吊しけり　同
一僕と駿河の泊り富士詣　ろく水
恐ろしき夢見しが富士晴れてあり　同
石室をぬけ出し人の謠かな　同
富士詣燒石に杖ならしけり　碧雲居
踏む岩に雲湧くお鉢めぐり哉　同
富士日記金剛杖と題しけり　同
先達のその兒も連れて登山哉　秋紅蓼
八州の暮雲を餘所に登山かな　同

富士詣百合の根堀つて戻るなり　同
富士山の絶頂に立つ此身かな　盛花
馬子唄や富士に賑ふ吉田口　同
七十の老の聲や富士詣　同
篠小屋によべの雷語りけり　同
雲はれて指點の中の三湖かな　洛燕居
馬に乗つて眠たき裾野三里かな　同
垢離とつて朝日尊く迎へけり　同
十度目の御判いたゞく白衣かな　同

本號應募者は總て七十三名、句數千三百四十三句、稍や少き方なるは課題の少しく難かりし爲めか。應募句數の多きものを擧ぐれば、菁々、北窓、百句拙、濃雨四氏の五十句づゝ、花舟、盛花二氏の四十四句づゝ、泉骨、梁村二氏の三十五句づゝ、秋紅蓼、天睡郎二氏の三十三句づゝなりとす。

募集課題
金魚　七月十五日締切
二百十日　八月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

○前號所載
屁の如の雷哉と一茶かな　は
屁の如き雷哉と一茶かな　の誤なり。

○左記の
蜂の巣に照りへかす日や潦　柳南
蜂の巣や機覗くなる窓の上　同
蜂の巣を數へ廻る廊下哉　同
蜂の巣や藪の中なる石祠　同
巣の蜂の警め貌や雨來る　同
熊蜂の大なる巣や角櫓　同
は本誌三月號に掲載すべかりしものなるが原稿淨書の際誤つて脱落したるものなることを發見したり。仍て茲に之を發表す（六月廿日選者）

「小杉天外論」につき東京市内又は各地方よりの投稿少からざりしも頁數に制限あるが爲め之を掲載する能はざりしは編者の遺憾とする所也。茲に謹んで投稿者諸氏に謝す。



社會主義者の態度

星雲子

六月二十二日山口義三氏出獄歡迎會の閉會に際し柏木團とか稱する一派の社會主義者が「無政府」「無政府共產」等の文字を白抜にしたる赤旗を押立て革命の歌を歌て通行せんとしたるを警官等に差止められ、且つ其赤旗を奪ひ取られんとするに激して、兩者の間に擲り合ひが初まり、多少の負傷者と數名の拘引者を出したる模樣也。吾人は平常社會主義に向て同情を表するものゝ一人にして、當局者が單に權力を以て之を撲滅せんとするが如きに慊らざるものなり雖も、而かも柏木團の如き矯激にして、暴に代ふるに暴を以てするが如き態度に向ては到底贊成する能はざる也。經世濟民は志士仁人にして初めて之を成すべし。巡査の頭を擲て快とするが如き人士にして奈何ぞかゝる大事を成すを得ん。モッブのなしたる事蹟は一時人目を眩すことあるべきも、到底永續すべきものにあらず。眞に力あり、動かざる事業は、穩健平正の確信に待たざる可からず。吾人は此點より見て我國の社會主義者中、山路愛山、安部磯雄の兩氏の態度に感服するもの也。下層社會の力を以て示威的改革を行ふも一種の方便に相違なきも、吾人は中流社會の覺醒と指導とによつて社會の改善を計るの捷徑なるべきを思ふ。此點又彼のヘンリー、ジョールヂの如き態度を喜ぶ。彼の柏木團の如き態度も、社會の注目を惹き、社會主義の存在を世に紹介するに於て一種の効なきにあらざるも、其注目は惡むべきものとしての注目にして、其紹介は亂暴なる者としての紹介に了らんとを恐る。吾等は社會主義を以て惡むべきものと思はず、又亂暴なるものと信ぜず

却て經濟上よりする救世の一福音にして、志士仁人の嘗さに說べく、行ふべきものなりと信ず。故に彼の枏木團の今回の如き態度に向ては甚だ慊らざるの感を抱くもの、玆に卒直に其慊らざる感を述べて、該團及び江湖有識の士に問ふ。

小說の世界

刀尺生

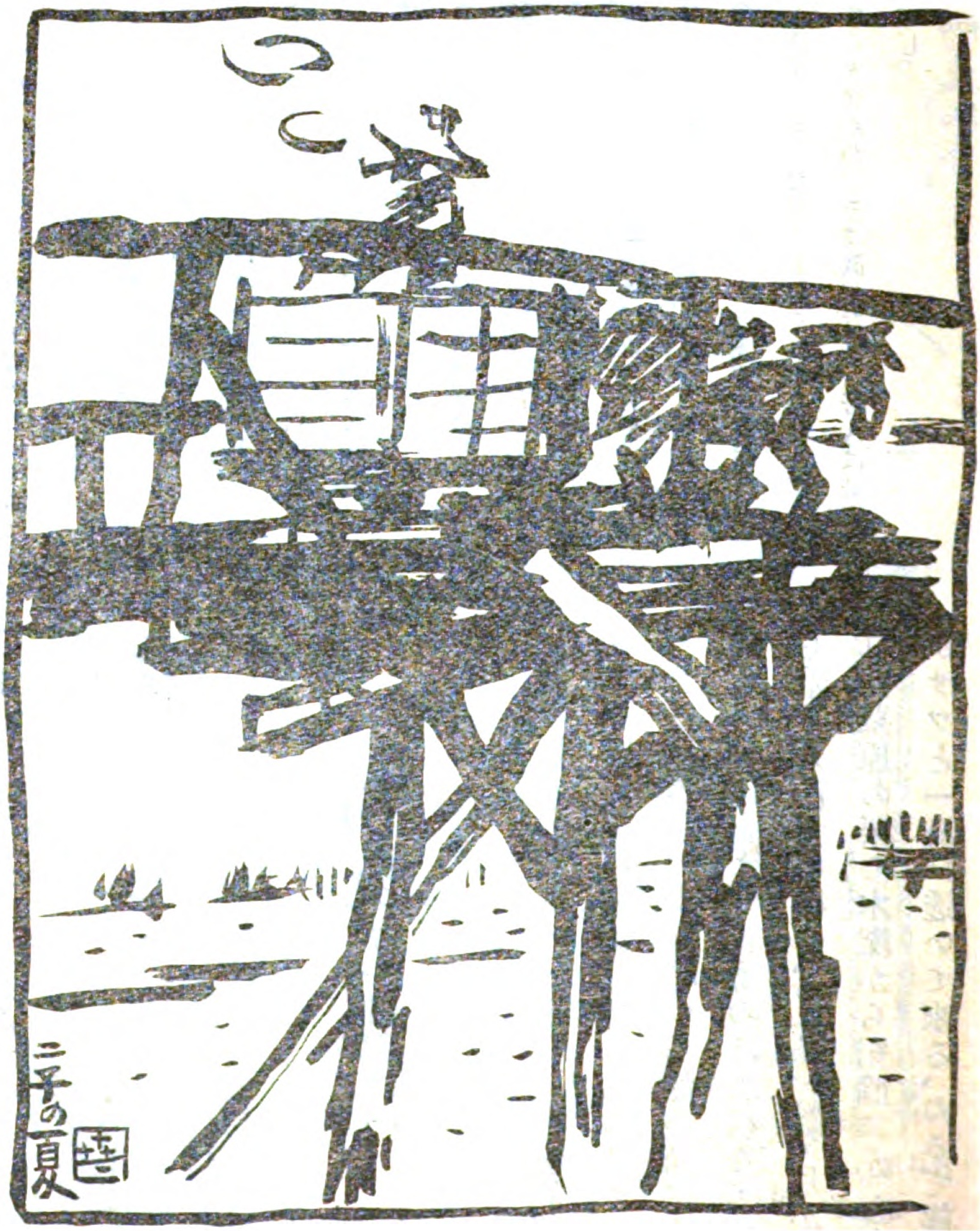
小說の世界は甚だ平穩となれり、無事となれり、强盜も無ければ殺人も無く、心中も亦甚だ少くなれり、而して今日行はるゝ小說は重に自然派のものなりと稱せらる、而してその又自然派なるものは現實描寫に熱中すと稱せらる、然らば小說は即現實の寫眞鏡とも見らるべき關係あるか、今日の小說は今日の生活の直寫とも見らるべきものなるか、之を然りとせば、而して此寫眞鏡なる小說に映ずる世界が此の如くに平穩に此の如くに無事なりとせんか、我國の現況は實に一種の理想郷に近かるべきかな、基督敎徒の祈るなる天國の降下に近かるべきかな、唯それ近しといふ、尠くも血腥き風の吹かぬ限に於て。此ゝる日出度き昭代に於ては小說の上に偉人烈婦の共に現れざるなも怪まず、國亂れて忠臣出て、家貧くして貞婦出づるの道理明かに之を證すべければなり。

されど翻つて日々の新聞紙を見れば如何、曰く藥種屋殺しの男三郎、曰く縮布屋殺しの時三郎、曰く生贈取りの勝太郎と、此等は稍古きものなり、曰く孫十郎親爺の慘殺、曰く出ッ齒龜の强姦致死、曰く新一郎なるものゝ牛込に於ける親子慘殺と、此等は最も昨今のものなり、其他一人心中二人心中、無理心中、合意心中、親子心中、朋輩心中、等心中の數も亦甚だ尠からずとす、以上は僅に都下の新聞に就いていふ、若し廣く之を樺太の端より臺灣南岬に至るまでも深く究め細かく探りて、悉く一枚の紙上に集むとせば、腥風慘雨の如何ばかり人をして酸鼻せしむるものあるべきぞ、現實の狀態は誠に此の如し、世は猶ほ理想郷に近からざるなり、天國に近かざるなりとせば、今日の小說は決して現實の寫眞鏡とは見るべからざるなり。

小說は描寫の自然を尊ぶ、言ふ迄もなく自然といへば突飛を許さゞるなり　之を以て小說が現實を願ること多きに從つて、ローマンスの寫すが如き畸形人物は小說の埒内に上るを得ずとは勿論今の世の作家の一解なるべきも、而かも現實には突飛なる人物あり、從つて突飛なる人事のあることそれ右の如きに於ては、單に現實を顧慮するが故にとの一解は甚だ根據弱きものたらざるべからず、されど解するもの或は曰はんか、さる畸形人物の現存は否定せず、而かも既に畸形と見らるる丈彼等の精神は狂的なり、狂的ならずんば新聞紙上に傳ふるが如き左る行動の演ぜらるべくもあらず、狂者や寫すべからずとにもあらざるも、而かもそれ等の心理描寫を勉めざるも亦可なりと、自殺者の殆んど凡てが必ず精神

錯亂者とのみ一抹し去らるゝ今の世の中、此の如き解も穴勝ち非理なりとは斷ぜず、されど精神病者のみ獨り自殺すべきものか、これ予の甚だ訝ろこころとなりとす。

暗雲地に着いて端なく眉山氏を文壇より奪ふ、氏の人物の他とは少しく選を異にするあり、從つて世評は無暗に氏を精神錯亂者視せざるものあれど、猶ほ爾く附會し去らんとする傾向なきにしもあらず、即ち夢中の約を現實視して筆を執れる事や、暗夜に蛛蜘の系を見咎めたる事やに豫兆を認めんとするもの是なり、眉山氏のそれは知らず、知らざるながらも以上の外、或はその因を生活難に歸せんとするあり、更に又獨歩氏の如く自己の立脚地より判斷して藝術難に歸せんとするものあるを見て、吾人は此の如くに觀ずるの餘地も亦綽々として存すべしとするなり、必ずしも精神錯亂者とせざれ狂人視せざれ。



吾人は必ずしも今の作家に向つて思想の徑路の粉料して尋ぬべからざる狂人を寫してよとは請はず、されど畸形視せらるゝ幾多新聞紙上の人物豈盡く狂人ならんや、既に狂ならざるに於ては一見甚だ尋常の人物とは鴻溝の超ゆるべからざる間隔あるものも、仔細にそれに同情して內面觀察に耽らんか、寧

ろ現實には畸形視せらるる人物にても、作者の苦心によつて作品に現れたる上には、或は吾人をして潸然として泣かしめ或は慄然として怖れしめ或は猛然として起たしむるものあるやも亦知るべからずと信ず。

描寫の自然を尊ぶといふ事は、單に自己の主觀にて隨意の人物を作り繰り、動かして、それが今日必然なる吾人の心理作用に背反し、矛盾するをも致すを戒めての事なるべし、好んで血腥き風を小說卷上に送らずもあれかし、されど肉慾描寫も嫌はれざる今日、複雜なる人生を描くに當り、その一事象として、而かも頻繁に吾人の耳孕に觸るゝ顯著なるものを迄、左迄に毛嫌する理由あらずと信ず。

今の小說中の事象は極めて平淡なり、人物は極めて平凡なり、吾人は平淡をも愛す、平凡をも愛す、されど時には上來引例したる如き念入りの惡漢や自殺者のみにはあらず、更に偉大なる人物の讀者をして襟を正さしむるが如きものゝ出現をも望む、予は此方面に於て青果氏などの思想が稍屬望すべき點を有するを認めて、竊かに快心するものなり。只それ現在に於てはその量甚だ多からず、吾人は猶ほ之を未來にかけて如何樣に發展し行くかを知らんと欲するものなり。若しそれ中島竹窩の「臺灣美人」の如きものの續出するとせんか、それは眞平なり、吾人は此提案た早速撤回するを憚らざるべし。

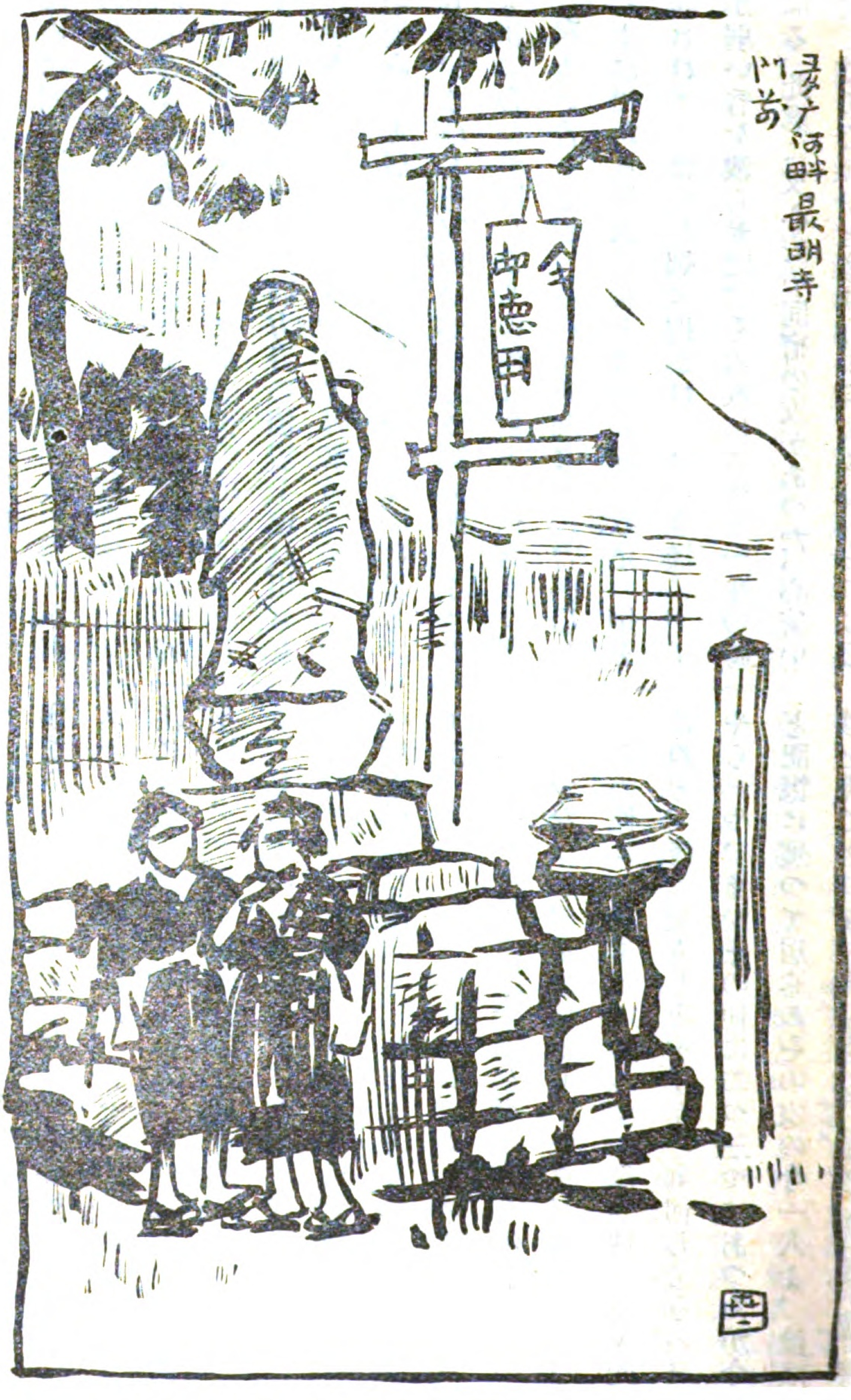


初夏の思出

城水生

通り雨の名殘りの一搖れ、根を熊笹の繁みに取卷かせて片攅がりに枝葉を伸したぬるでの老木、ハラハラハラと散る露の青翠凝つて池の面に滿つる、蟬時雨の聲もフツに止んで若葉のけはひなよめかしい上を、うら羞らふ乙女の樣な、やさしい夕月が漂ひ上れば、稍離れた墓原の栗の木深から絹篩にかゝつた樣な細かい光がサツと一流れ透いて來る、ぬるて熊笹扨ては何、あたり名も知らぬ蔦葛が絡み合ひて晝猶ほ奥の見え透かぬ叢、それ等の眞上にサラ〳〵と注いて餘光は猶ほも池

にと逃げる、池の西ざまの面には物に支えられぬ、同じ嫦娥の光がきらびやかに照り敷いて、折柄を心得し樣の河骨の花の黄色なのが掲焉に榮える、そよろ立つ水の烟が低い靄を作つて池面に黏して居る、それや此れ



やまことや此處閑寂の境地、我居る室は疊六枚の上は敷かず、床の間は片樣に傾いて置く書箱の落付き悪しく、行誡上人の和歌の一軸寂びたる中にいさゝかの趣を示すとはいへ、

一體に光線の入り樣思はしからず、何となく陰濕の氣に罩められる處といへばいへるが、さる庭園を前に受けた三尺の椽側、冷たきは風のそゝりか月の光りか將た水氣のさまよひか、何かは知らねど唯貧書生といふ生涯の心安さは、單衣一枚の臀を打ちつけに夕べの椽板に冷す、又なく床しかつた此夏の夜の追想は予をして今より四年の昔、牛込は西方寺の僑居を憶ひ出さしむるよ、年齒の行かぬ主人の尼僧、何處かに有りし世の匂ひの潜みても居る丈、まだ悟りの十分開け居るとにもあらず、されど布衣仔細がましう圓い頭に小さな瘤一つも折に合ひて賤しからぬ値はあり、何處かに澤を消した古い香もする、それが華奢な手に古團扇を扱ひ、なよび掛かる法衣の袖を拂つて靜に蚊遣の烟を惠む、蟄されては憎いが烟に捲かれて遠のき樣にブーンと、か弱い音を洩らせば、その蚊にさへも一味の詩趣が添はる、此處に又心安い同宿の友があつた、心安いと言ふ丈で敢て心合ひと迄は行かぬもよし、それは三人、今は何處の月に昔の顏を照さるることやら、その友どちは壁一重の背反に住むものながら、黄昏時には必ず予の椽側へ廻つて來る、月を浴びる池の面の閑寂を樂まうの心は同じいのだ、澁茶幾椀かを鷹揚に啜つてズラリと椽の端に並ぶ、否その中には上り込んで無作法に横樣に寐そべるもある、その友の一人よ孰れ北國生れのダツペイ辯發音甚だ興を殺ぐものはあるながらも、その友の一人よ、彼は歌聲甚だ細く、喉に宛轉の妙のある男であつた、お粗末な目を艶に窄め、外つ齒の唇を神妙に濕して、「おしよろたかしま及びはなーいーが、…………」と、間にグツクイ〻〻〻の橹聲さへ交ぜて自慢の追分節をやる、その歌の末の句は何と言つたつけ、「せめて松前江差まで」か、彼のお得意は右の他に「鳥も通はぬ八丈が島へ遣らるゝ此身は厭はねど、後に殘りし妻や子が、如何してその日を送るやら」や、またその他に二つ三つはあつたが今は殆んど記憶に殘つて居らぬその友の今一人よ、彼は詩吟に妙を得て居つた、勝是官負是賊、男兒只應レ冒二險難一と、蟋蟀の羽振り宜しく聲帶の弛張をあり〻〻と外面

に見せて、幅のある聲て絶叫する、森々たる夜氣も爲に動いて、靜まり返つた池の面に俄に縮緬皺が起らぬかとも訝られる、更に一人の友よ、之は唯品よく心樣の内はな若者て、興を覺ゆる折々フフンフフンと笑顏を作る丈が癖であつた、が趣を解することは座中の隨一てあつたらう、フフンフフンは深く歌三昧に入つた外面の表彰なので、時折出來たものを見せたこともあつた、どんなものが有つたつけ、ハテ想ひ出せない、池には尺に餘る五六寸といふ緋鯉の大きなのが居たつけ、ノッソリと荇藻の間に背鰭を浮かべると見れば、裕かに體を搖つて最後の一撥ね、尻尾に水烟を立てては破れ殘りの橋杙をしたゝか濡らすこともある、信心のものからいつぞや奉納したのが此樣になつたのだと尼僧は語つて聞かせた、予の借りた室に曾て二人の陸軍士官が居たさうな、軍人といへば兎角傍若無人な振舞をするもの殺生禁斷の淸淨境とも心得ず、月下對酌の下物にせんとてか、潛かに一突き魚扠に掛け損ねたのを見付かつて大騷ぎ、尼僧は行深般若波羅密多の梵唄を半ばに立ち上つて嬌聲を顫はし、柳眉を逆立て嚴責に及ぶ、士官等は直詫に詫びたが詫びも叶はず鯉も食はずに追ひ立てられといふとだ、て鯉には胴下二三寸の處に三十六鱗の一二鱗を失つた創跡が鈍白く殘つて居たつけ、其鯉は予の居つた中に矢張り夏の眞盛てあつた、池淡の折に誤つて敢なき最後を遂げてしまつた、嗚呼人の世の遭逢は雲の峯の成壞それにも似たる姿である、懷かしの友よ何處の果に同じ想を運んで居るか今は知らぬ、予は礫川の僑居に繽紛たる市塵を浴びて俗塵更に俗を加ふる今日此頃、午暇多忙なる筆を措いて苟且に肘を曲げれば、有りし夜頃の姿がまざまざと眸裡に徂徠する。

鬼面魔語

涼烟子

▲善隱しに物事を隱す人は全く秘密を守る術を知らぬ人ぞかし。首尾よく隱し了ふせる事は十に一つにて、九つまでは或少しのバレ目に尾を附け鰭を附けられ、あんなに隱した事なれば定めてもつと深き譯あるべ

しなど、實際よりも二倍も三倍も大きく噂をさるゝのぞ。寧ろ或程度まて公然にして、何も彼も明つ放しの人だと思はしむるのが秘密を守るの妙法也。但し或程度とは多くとも八分を超ゆべからず、二分の所は腹のドン底に固く收めて置け。

▲素人の女は熱心に思ひ込まるれば、つひに男に靡くが常なれど、黑人の女は餘り執着心強しと思ふ男は却て嫌氣がさして之を振つて了ふものとぞ。

▲珍らしきものを求むる世也。どうせ賣るなら利口を賣るより正直を賣るべし。寧ろ馬鹿正直を賣るべし。

▲最も仲あしき異性の間にも、最も仲よき同性の間に優る引着力あり。

▲人生の事多くは平凡也。而して其中最も平凡なるものゝ一は男女の關係也。但し平凡とは無意味といふ義にあらず。當り前にて驚くべき理由なしといふ也。而して當り前の事は人生に最も意義あることたるを知れ。

▲醜情を挑發する危險あるものは所謂生理的美人と稱する中以下の女に多し。若し夫れ眞の美人に至ては人の魂を奪つて、其優姿麗色の中に飄蕩せしむ。此刹那斷じて些の醜情の起るを許さず。

▲情を燃やす最大の力は空想也。あゝか、こうかと相手の氣合などを考へても何れとも分らぬやうな時に情は熾んに焔を擧ぐ。然し、好かれたとか、嫌はれたとか極まつて了へば火事は先つ下火になつたの也。

▲色男氣取りの男は多く他人と評判のある女を迷はして見たがるものぞ。蓋し自己の色男の度合を試して見たきのなるべし。

▲二頭曳馬車の中に、梅干の如き婆さんや、又は下品な下女などを見出したる時、何となく腹立たしく冷笑したきやうな氣がするものぞ。

新刊批評

▲俳句階梯　沼波瓊音著　東亞堂發行

俳句なるものの起因から說き初めて、それに餘情の尊ばれる事やら季節の必要な事やら此理由を明らめた上、その季節に關する法則、切字の心得、題材には平等觀を持つべき事、字句の簡潔を要する事、時には繁冗をも厭はぬ場合ある事、字數の如何、俳句に特有なる文法若くは修辭法の如何等、一々例句を擧げ平易に周到に手引きしたもの、噫それ階梯である、階梯を辿つて堂奧に入らんとするものには此上なき良著であるだけ、それだけ既に心得のあるものには大凡そ會得し居るべき卑近な事項のみである(定價金三十錢)

▲不朽の道　松村介石著　警醒社書店

猶太國民と基督との關係を說き、それを日本の現勢に顧みて基督の心を有するものゝ大に動かさるべき時となし、さて第三章に於て明治基督

教の變遷を說いたが、此章に至つて著者の極めて正直な基督教内部の告白が見えて面白い、それより基督教を歴史的に說き、耶蘇在世、師徒、師父等の諸時代から降つて現在に及び、其處に基督教の長所欠點を見たる後、最後に自己の信條を明にして居る、それは「我教會の信條」の一章に於て知ることが出來る、それによると直情徑行端的に神と隔面せんが爲にあらゆる傳習的教儀の束縛を排して居る、吾人は之を以て眞個の基督教と呼ぶべきか否かの問題は第二として、その神の認め方の最も合法と首肯さるべきもの、斯の如くにして進歩せる現世紀の頭腦にも滲透すべき健全な教とも思ふ、併し唯一の議すべき點がある、氏は一般の基督教徒と同く永生を說く、がそれが單に信仰に止まる言ひ表はし方故、別に學理的には何等か確乎たる說明の道を有して居らるゝて有らうけれど、見えた限りでは明瞭に物心二元論の窠臼に陷つて居る、靈魂論は元より至難の問題ではある、が兎に角此一項の說き方では未だ以て吾人を首肯させることが出來ぬ、(金五十五錢)

▲女殿下　藤井繁一譯　玄黄社

原著者は婦人問題の研究に於て有名な、從つてその種の著書が多く世に出て居り。歐米の讀書社會に歡迎されて居るマックス、オーレル氏である。就中此著は原名を Her Rogul Highner Woman といつて、彼地の批評界に名聲嘖々到る處の家庭に必ず一本は備へられて居るといふ程のものださうな、原著は既に觀察の深刻と、造語の奇警とで推稱されて居るのだから、之を和譯して而かも元との姿を失はざらんとするには平凡な腕では容易な事では無いのだが、今此譯者を措いて見ると流麗な文章は清淺の水の隨處に淵を作り瀬を成して趣を示すが如く、淀むべき處に淀み流るべき處に流れて毫も澀滯の跡はなく、警句の多くも巧に我國の俚諺に譯されて居る丈、有りしまゝの力を備へ譯物の香が十分に取れて居て讀み心地がよい、一篇四十五章、「戀する男子」「結婚せんとする男子へ」「夫婦の撰擇」「夫の操縱法」「戀の手ぐだ」等より始めて或は英米佛の細君氣質を評し或は母親氣質、祖母氣質、姑氣質、看護婦氣質、等を說き去るものの中讀むべき幾多の好文字が散らばつて居る、(正價金八十錢)

▲ファピオラ　森雅子譯　三才社發行

カルチナル、ワイスマンのファピオウラの和譯である、中々に姿態多き流暢な筆で一貫して居る點は推稱の値がある、(定價金壹圓)

▲時間活用法　堀内新泉著　東亞堂發刊

時間の不確守は一種の東洋病の如くに見做されて居る、その弊な救はん爲に、一々統計珠をはぢいて得失の打算を見せ、引例なども豐富にして讀者の刺激を勉めたものだ、(正價金六十錢)

◎闇の盃盤

岩野泡鳴著
日高有倫堂發行

長短詩合せて六十編、著者の第四詩集として現れたもので、普通の七五、五七以外、三三三とか六四とか、五九とか色々新しい調が試みられて居る、全體に於て用語に生硬なもの、造句に窈錬を缺くものがあり、尠からず趣を害して居ると思はれるが、これ以て氏の所謂る表象詩の特色だといはれれば、我等は即ち門外漢で與り知るを得ないとあきらめるより外はない、その中でも敍事的のものはまだしもだがその他のものになると特にその弊が見える、想に於ては此世の闇黑面を見て少からず悲愁を懐いて居る趣が多い、「闇の盃盤」の一篇は取つて以て此書に名けた位だから、氏の最も讃まる丶を望むものであろうが、その後半に次の樣な句がある、

見えぬ火の中水の中の
　恐怖と威嚇は迫り來れど
酒のかゝりに泡のいのち
　甘き歡樂ねむり誘ふ
闇の盃盤闇を盛りて
　われは底なき闇に沈む
かくて夢より夢を浮び
　とこしなへにも生に醉はん

と、此世を泡沫夢幻と觀じ、只酒に醉ふて甘き歡樂の眠に耽けるといふ、その中情には一味の哀韻が籠つて居らではなからうか、之が孰れの詩にも通じて見られるのだ、「地なる響」、「月と猫」、「人肉狂賣」等は割合に字句の上の蕪雜なるもの丶中で、味ははるべき想と讃まるべき調とに富んで居るものと思ふ、(定價金三十八錢)

本誌六月號目次

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵税共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年六月廿七日印刷
明治四十一年七月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御文被上度候

一金七圓五拾錢也　同径三寸丸　同目方正味二十九匁付
一金拾圓九拾錢也　同径三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾参圓貳拾錢也　同径四寸丸　同目方正味九十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同径四寸五分丸　同目方正味九十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径五寸丸　同目方九十匁付

三ツ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製径二寸五分丸盃三ツ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同径三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同径三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金参拾壹圓也　同径四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同径四寸五分丸同　同目方正味百・十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同径五寸丸同　同目正味二百卅匁付

（定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）
（文字彫刻　一字　金拾錢）
（大字彫刻　一字　金七拾錢）

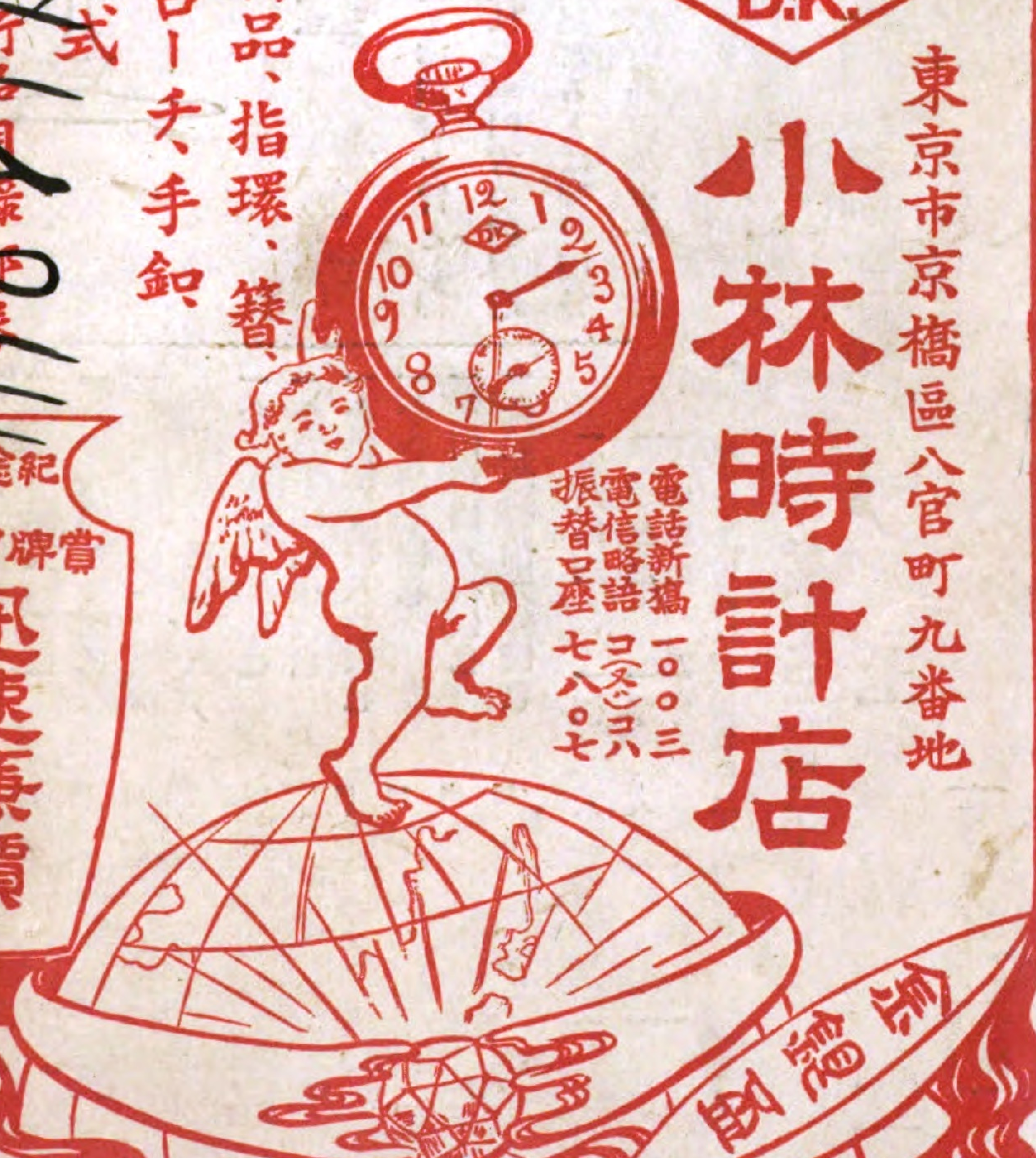
其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商 玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

（電話下谷特九六五 一二四四）


金賞牌